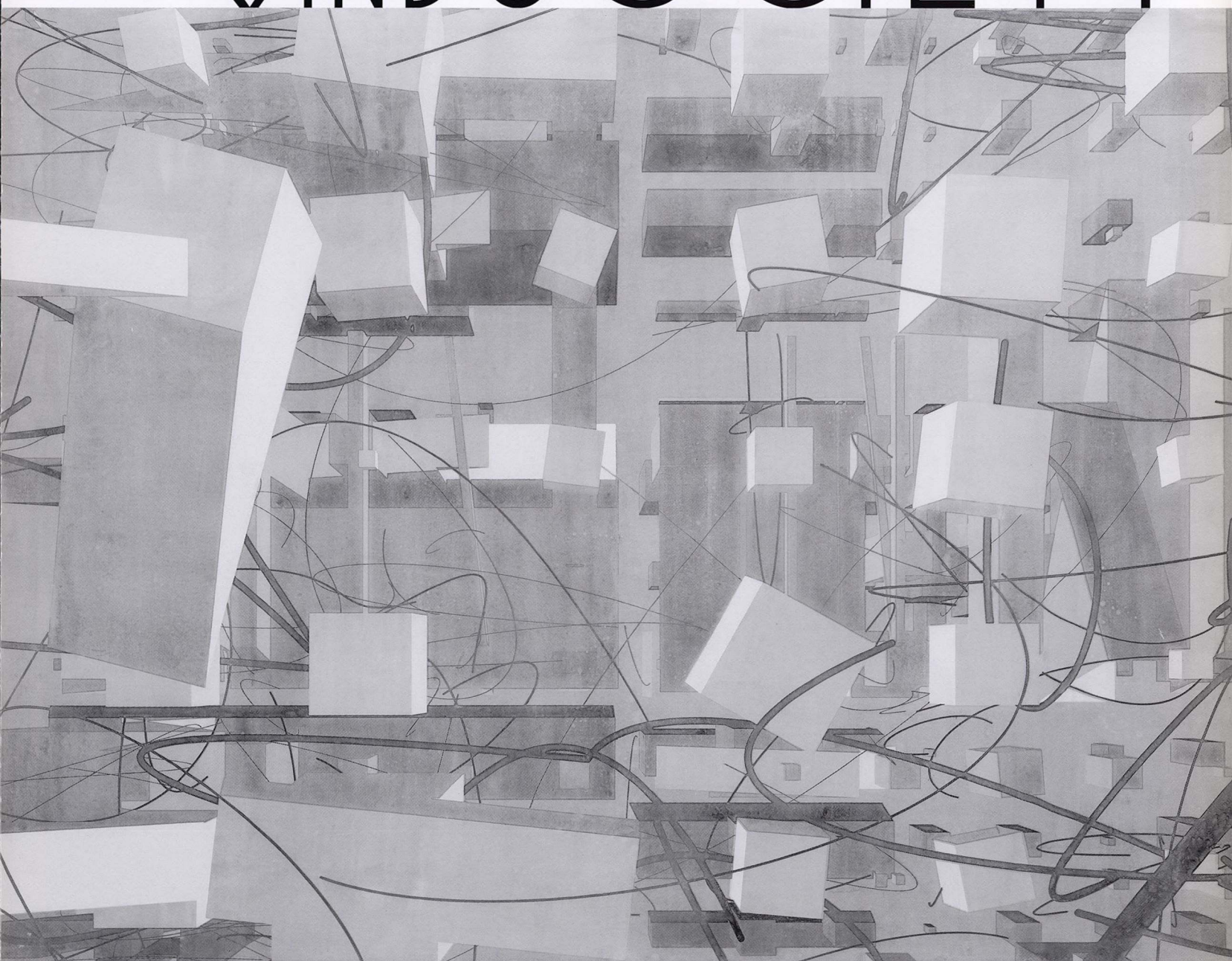


建築と社会 ARCHITECTURE AND SOCIETY



特集 _ 変遷する“身の置きどころ”

日本建築協会

2011

5

日本建築協会企画・販売 出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

A 4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

A 4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格2,000円

昭和生まれ 関西の建築家50 1987年

A 4判 企画・発行：日本建築協会 本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

講演記録集 話のはなし 1997年

B 6判 5分冊 企画：日本建築協会建築クラブ 販売価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款（平成21年6月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項・建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条および省令第4条に基づく書面

販売単位：2部1単位とする

価格：1単位700円（税込）送料は実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で販売

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、（社）日本建築協会事務局（TEL06—6946—6981、FAX06—6946—6984）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判2色刷イラスト入

〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会 発行：学芸出版社 本体価格¥1,600～¥2,800

衛生設備のトラブル50

建築設備トラブル研究会

建築の現場管理システム

伊東貞夫

鉄筋工事・本音の現場学

荒川治徳

新版コンクリート工事のチェックポイント100

加賀秀治

建築と音のトラブル

中川清ほか

建築基準法の性能規定を読みこなすコツ

高木任之

建築工事の祭式

「建築工事の祭式」編集委員会

第二版 環境と共生する建築25のキーワード

大西正宜

飛躍する構造デザイン

渡辺邦夫

木造住宅のしくみ

在来工法の基本と応用 浅野平八・東 敏博

改訂版 建築物の消防法を読みこなすコツ

高木任之

インテリアコーディネートの100ポイント

町田ひろ子監修／松本 茂・村元俊子著

プロが教えるキッチン設計のコツ

井上まるみ

木づくりの常識非常識

上村 武

現場で学ぶ 住まいの雨仕舞い

玉水新吾

建築トラブルにみる常識非常識

荒川治徳

住宅エクステリアの100ポイント

藤山 宏

第三版 都市計画法を読みこなすコツ

高木任之

第三版 建築基準法を読みこなすコツ

高木任之

建築主が納得する住まいづくり

玉水新吾

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾

プロが教える住宅の植栽

藤山 宏

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

選書特装版

企画：日本建築協会 発行：学芸出版社 本体価格¥3,000～¥4,000

水にまつわるトラブルの事例・解決策

〈建築篇〉 「建築漏水」編集委員会

建築デザインのための構造計画

須賀好富

水にまつわるトラブルの事例・解決策

〈設備篇〉 「設備漏水」編集委員会

入門・建築積算

生島道春

建物の汚れ・トラブル事例と解決策

「建物の汚れ」編集委員会

建物の結露・トラブル事例と解決策

「建物の結露」編集委員会

近刊 平成21年3月10日発行

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

管理の良い現場、悪い現場が一目瞭然！
現場のブローケンウィンドウズを見逃すな

著者 玉水 新吾
四六判 224ページ
定価 1,900円＋税

最新刊 平成22年11月10日発行

プロが教える住宅の植栽

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、住空間で緑（樹木・草花）を効果的に使いこなすための知識と考え方

著者 藤山 宏
B 5判 176ページ
定価 2,800円＋税

会告

平成23年度
通常総会開催

来る6月17日(金)に日本建築協会通常総会を開催いたします。

通常総会終了後には、総会出席者及び会員を対象に、下記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催いたしますので、多数のご参加をお願いします。

と き 2011年6月17日(金)
16:00から

ところ 大阪マーチャンダイズ・
マートビル20階
東天紅

議 題 ①平成22年度事業報告
②平成22年度収支決算報告
③役員改選の件 他

総会の正式開催通知は、5月下旬に各会員あて、別途送付します。

・当日は軽装でご出席下さい。

吉野繁氏講演会
「東京スカイツリー
600m超えを目指し
て」と会員交流懇親
会の開催■吉野繁氏講演会
「東京スカイツリー600m超えを目指して」

と き 2011年6月17日(金) 17:00~18:00

ところ 大阪マーチャンダイズ・マートビル20階「東天紅」
大阪府中央区大手前1-7-31

定 員 80人(参加費無料・要申込み)

来年4月にはオープンする東京スカイツリー。計画をはじめたのが2005年の1月なので、現段階で6年半が経過しました。大規模な開発ですが、よくこの年数で実現できたものだと感じています。スタート時から、タワーの形状、敷地の形状、構造との三つ巴の戦いでした。今回は、世界のタワー事例、スカイツリーの形、構造計画について、設計段階の頃に時間をさかのぼってご説明させていただきます。

■吉野 繁 (よしのしげる) プロフィール

1961年3月 三重県鈴鹿市生まれ、50歳

1986年3月 早稲田大学大学院池原研究室修了

1986年4月 日建設計入社

2011年 デザインパートナーとして現在に至る

■受賞歴

《2001年 日本科学未来館》

Dupont Benedictus Awards (アメリカ) 公共部門賞

L'Architettura Automatica Award (イタリア) 最優秀受賞

グッドデザイン賞2001

International Illumination Design Awards 2002 (北米)

日本建築学会 作品選集2003

建築業協会賞 (BCS賞) 2003

《吉野繁氏講演会と会員交流懇親会》
ともに

申込先 (社)日本建築協会総務課
下記のいずれかでお申し込み
下さい。

TEL 06-6946-6981

FAX 06-6946-6984

Email soumu@aaaj.or.jp

申込み 6月10日(金)締切厳守

- ・会場収容人数に限りがありますので、お断りすることもあります。
- ・当日は軽装でご出席下さい。

■会員交流懇親会

会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催。

と き 2011年6月17日(金)
18:10~19:30 (講演会に引き続き開催)

ところ 東天紅
(大阪マーチャンダイズ・マートビル 20階)

会 費 5000円(当日徴収)

事前にお支払いいただく場合は下記口座へ。

郵便振替口座 00910-9-39975

口座名義 社団法人日本建築協会

講演会・懇親会FAX申込書(きりとり)

1. 申込区分(○印をお願いします)

① 講演会のみ参加 ② 懇親会のみ参加 ③ 講演会・懇親会の両方参加

2. 6月17日の通常総会出席予定(○印をお願いします)

① 出席予定 ② 欠席予定 ③ 未定

(総会開催通知は5月下旬に各会員あて別途送付いたします)

3. 懇親会会費の事前振込(○印をお願いします)

① あり ② なし

申込者氏名	
ご連絡先	(職場・自宅)
ご連絡先TEL	

総会議決お知らせ

平成23年3月23日開催の平成22年度第2回通常総会において、下記議案が原案どおり承認されました。

- 1.平成23年度事業計画
- 2.平成23年度収支予算書

1. 平成23年度事業計画

1. 平成22年度の事業概況

平成22年度の建設業界を取り巻く環境は、景気停滞に伴う工事着工件数の減少が続いていたが、夏以降は住宅エコポイント制度等もあり、住宅着工件数は微増で下げ止まり感が出ているものの公共工事の削減等が続き、低迷状況から脱しきれない状態が続いた。

このような環境下で、改正建築士法、改正建築業法の施行等に基づく建築物に対する信頼確保のための法整備の成果と建築基準法の運用改善の成果が現れつつある。国土交通省において設計・工事監理等の業務報酬基準が改定されたが、よりその浸透が期待されるところである。

当協会の各事業においては、それぞれの事業における肌理細かなコスト削減を継続するなど、各事業の収支の均衡に努めている。個別の事業については、「建築と社会」の発行をはじめ概ね前年度と同様の事業を実施した。

平成17年度以降財政の縮小均衡を図り、支出抑制に努めた結果、事業収支は18年度から21年度の決算においても順調に推移してきた。22年度決算においては会員の高齢化や景気停滞の影響等で、会員口数、会員数の減少をはじめ事業収入の減少が引き続くこともあり、決算数値が前年度より低下する見込みである。今後とも会員確保と収入確保のための努力を継続していく必要がある。

2. 平成23年度の活動方針

各常設委員会の基幹事業は40年、50年の実施年数を数え、会員の枠を越えて、それぞれの関係者間に定着しており、その役割も大きい。近時の建築基準法・建築士法等の改正を踏まえ、建築に従事する者の資質のより一層の向上が求められる。

また、協会の将来のために若い技術者のニーズに即した新しい事業の掘り起こしが求められる。そのためには協会の枠（会員）のみにとどまらず、有為な人材の育成に努めることを活動の柱として、

- ・会員外的一般参加者が参加できる事業
 - ・他団体との交流・連携事業
 - ・若手・中堅技術者の参加を促す事業（例「関西の建築界/群像」・コンクール・講習会・書籍発行）等
- の充実を図る。

協会設立100周年を見据え、新しい事業を行うために、平成19年度に編集委員会のサブ委員会として10年委員会を設置した。23年度から記念事業委員会の一つに位置づけ、記念事業を展開する。

①10年委員会において、20年度から「学生向け建築現場見学会」および「大阪かくれたええところ再発見コンクール」を実施している。22年度はコンクールに代えて「大阪かくれたええところ再発見マップ」を作成し「大阪かくれたええところツアー」も実施した。今後は次の段階に移行する。

②21年度から関西の建築界の人々を紹介するページを会誌に設け、取材には若手会員の参画を得て、100周年時に単行本「関西の建築界/群像」として発行する事業を継続する。

③同様に実施している「再読 関西近代建築」の発行事業を継続する。

3. 平成23年度活動計画

(1) 出版委員会

①「建築技術選書」と「プロのノウハウ」の企画・編集発行

・当委員会は、建築技術の単行本発行を企画し、出版することを目的とし、時代のニーズに即した新しい著者の発掘を第一義的に行い、22年度で累計105冊の発行に達した。

・また、新たな出版に合わせて、この出版書をテキストとする著者の講習会を実施した。

・23年度においては、企画執筆中の図書を積極的に発行する。

(2) 教育委員会

①建築工事実務講習会の実施

・昭和32年以降、毎年主として中堅クラスの建築技術者を対象に、標記講習会を実施し、平成22年度までに延べ86回を数えている。

・平成22年度は、テキストを4年ぶりに改訂し、本部・東海支部ともに1日コースで各1回実施したが、本部の参加者数は昨年より減少した。

・平成23年度は、本部・東海支部ともに年1回実施する。

②工高生デザインコンクールの実施

・標記コンクールは、工高生の設計技能向上のため昭和30年に創設、平成22年度で第56回を数えた。

・平成22年度は、参加校数19校、応募作品数108点と、参加校数は激減したが作品数は微増

であった。平成23年度も22年度同様に実施する。

③工高建築科優秀卒業生の表彰

・優秀な建築科卒業生を表彰することにより、本人の研鑽意欲の向上を促し、また激励することを目的とし、昭和27年より実施してきた。

・毎年約180校の申請がある。平成23年度は会員校及び会誌購読校を対象に実施する。

④大阪府住まい・まちづくり教育普及協議会への参画

大阪府、(社)大阪府建築士事務所協会、(社)大阪府建築士会、(社)日本建築家協会近畿支部等で構成する協議会の、諸行事の実施に協力する。

(3) 事業委員会

①情報見学小委員会

・時代に応じたテーマによる催しを年4回程度実施し、著名建築物や茶室、近代建築等の見学会、並びに話題建築について設計者・施工者等から話を聞く場を設ける。

・平成22年度は、見学会を4回（うち1回は茶室見学会）開催。平成23年度も、22年度同様4回程度開催する。

(4) 編集委員会

①会誌「建築と社会」の発行

・会誌は、大正6年の創立以来、当協会活動の中心にあり続け、会員相互あるいは会員と社会を結ぶ役割を果たしてきた。

・記事内容の、より一層の充実を努める。

②青年技術者の顕彰

・満35歳以下の青年技術者を対象とする青年技術者顕彰制度は22年度で第57回に達し、建築界の優秀な人材を社会に顕彰してきたが、平成17年度からその意義をより一層深めるため、表彰式及び受賞者も出席しての懇親会を併せて実施している。

・平成23年度も顕彰制度を実施するとともに、講演会、及び協会役員等や青年技術者同士の交流の場として懇親会を実施する。

③読者と選ぶ「建築と社会」賞の顕彰

・会誌に掲載された本誌の趣旨にふさわしい社会性、環境などに配慮した建築作品や建築に関する論文、記事などを顕彰する。平成23年度も継続する。

④「関西の建築界/群像」の発行

関西の建築界をとりまく様々な分野の方々を紹介するページを会誌に設け、取材には若手会員の参画を得て100周年時に単行本「関西の建

会 告

築界/群像」として発行する事業を継続する。

⑤「再読 関西近代建築」の発行

関西における歴史的名建築について個々に取り上げ、解説し会誌に連載する。創立100周年の記念事業として連載記事をまとめ書籍として発行する事業を継続する。

(5) 10年委員会事業

①建築現場見学会

・次世代の建築界を担う人材の育成に繋がることを目的として、学生向けに設計の意図を生かした建築現場やそれを支える施工者の工夫、また現代技術を駆使した工場での製作過程など、さまざまな“ものづくり”の実際を総合的に体

感できる場を提供する。23年度も継続する。

②大阪ええとこそうせい（創生）プロジェクトの実施

・大阪かくれたええとこ再発見コンクールを開催。このプロジェクトは、普段見過ごされそうなまちの資源を発掘し、“こうしたらもっとよくなる”“もっといきいきする”等のアイデアを創立100周年の2017年まで様々なテーマで募集することにより、まちづくりや町おこし、賑わいづくりに役立てていくことを目的としている。22年度は「大阪かくれたええとこ再発見コンクール」の入選場所を記載したマップを作成配布し、その場所を巡るツアーを実施した。

23年度は「かくれたええとこ」が持つ潜在的な魅力を生かすためのシンポジウムやイベントを実施する。

(6) 建材委員会

①新建築材料の調査・検討

・新しい建築材料の品質・性能の検討、設計・施工上の留意点等の調査を行い、会誌上へ紹介を行う事業。

・平成23年度は、多角的な方法での建材の検討・調査、会誌上での紹介を行う。また、建材の機能や工法の紹介についても検討する。

2. 平成23年度収支予算書 —平成23年4月1日から平成24年3月31日まで—

単位：千円

科目	予算額	前年度 予算額	増減	備考	科目	予算額	前年度 予算額	増減	備考
I. 事業活動収支の部					I. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入					旅費交通費支出	70	35	35	アルバイト交通費含む
①会費収入					通信運搬費支出	410	430	-20	電話、FAX、メール、郵送等通信費
個人正会費	10,602	11,559	-957	14,400円/1名	集金費支出	650	700	-50	会費、グループ会費、広告料集金手数料等
個人正会費(地方)	933	853	79	12,600円/1名	消耗品費支出	1,520	1,850	-330	HP維持費、PCソフト、トナー、文房具外
団体正会費	26,449	27,332	-883	25,000円/1口	備品購入費支出	120	150	-30	事務所内備品
準会費	8	8	0	8,400円/1名	修繕費支出	30	40	-10	事務所内修繕費
会費収入計	37,992	39,752	-1,761		印刷製本費支出	50	50	0	印刷製本費
②事業収入					光熱水料費支出	225	240	-15	電気代
編集委員会収入	11,725	15,025	-3,300	会誌収入、10年委員会事業収入	保険料支出	25	20	5	火災保険料
契約約款収入	4,230	4,231	-1	契約約款販売収入	租税公課支出	607	669	-61	消費税、法人府市民税
出版委員会収入	500	500	0	出版企画料、講座参加料	清掃費支出	20	30	-10	1回/年・事務所床清掃
事業委員会収入	290	290	0	見学会、講演会参加料	建物管理費支出	4,560	4,560	0	事務所賃借料等
教育委員会収入	1,000	1,000	0	実務講習会参加料	雑支出	1,555	1,730	-175	監査、保守、協賛、購読、未収金償却外
建材委員会収入	0	0	0	会誌収入に含む(新建材広告料)	管理費支出計	25,165	26,450	-1,285	
雑収入	161	172	-11	事業協力金、会員交流懇親会	事業活動支出計	56,454	60,436	-3,982	
事業収入計	17,906	21,218	-3,312		事業活動収支差額	0	765	-765	
③雑収入	556	231	325	利息、派遣労働者雇用安定化特別奨励金他	II. 投資活動収支の部				
事業活動収入計	56,454	61,201	-4,747		1. 投資活動収入				
2. 事業活動支出					投資活動収入計	0	0	0	
①事業費支出					2. 投資活動支出				
事業関係人件費支出	15,534	15,523	11	事業関係分が3.5名	①特定資産取得支出				
編集委員会事業費支出	11,815	14,023	-2,208	会誌発行費、10年委員会事業費	退職給付引当資産取得支出	701	714	-13	事業所都合による要支給額積立
契約約款費支出	2,530	2,670	-140	販売用約款購入費、送料	記念事業積立預金支出	0	0	0	現状予定なし
出版委員会事業費支出	130	130	0	講座経費、印税支払経費、委員会事業費	特定資産取得支出計	701	714	-13	
事業委員会事業費支出	230	230	0	見学会、講演会経費、委員会事業費	投資活動支出計	701	714	-13	
教育委員会事業費支出	950	1,380	-430	工高生コンベ、講習会経費、委員会事業費	投資活動収支差額	-701	-714	13	
建材委員会事業費支出	0	0	0	会誌発行費に含む	III. 財務活動収支の部				
雑支出	100	30	70	発送代、切手代	1. 財務活動収入				
事業費支出計	31,289	33,986	-2,697		財務活動収入計	0	0	0	
②管理費支出					2. 財務活動支出				
管理関係人件費支出	12,767	13,284	-517	管理関係分が2.5名	財務活動支出計	0	0	0	
退職給付支出	0	0	0	現状予定なし	財務活動収支差額	0	0	0	
福利厚生費支出	10	20	-10	職員福利厚生費	IV. 予備費支出				
助成費支出	1,601	1,672	-71	3支部への助成金、交付金	当期収支差額	-751	1	-752	
会議費支出	945	970	-25	総会、評議員会、理事会、常設・特別委員会	前期繰越収支差額	47,828	47,827	1	
					次期繰越収支差額	47,077	47,828	-751	

(注) 平成23年度については、借入限度額を30,000,000円とする。

学生のための見学会 『東リ(株)伊丹工場』

申込はFAXかE-mailで
FAX 06-6946-6981
E-mail: h-katayama@aaj.or.jp

日本建築協会特別委員会『10年委員会』では、100周年を見据え、新しい事業として「学生のための現場見学会」を実施しています。

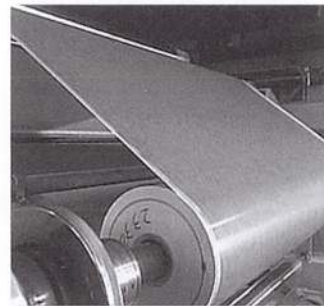
学生のための見学会とは、建築及びデザインを学ぶ学生のために、進行中の建築現場や工場を紹介し、見学の機会を提供するものです。大学等の授業だけでは、建築現場や工場で製品が作られる過程やものづくりのポイントを伝えることは困難な面があります。そこで教育現場からの要望を取り入れ、その要望を橋渡しする役目を担うべく、この企画を3年前より開催しています。



案内図

企画第5弾は、東リ(株)の伊丹工場です。大正8年創業のこの会社は、プラスチック系弾性床材、カーペット、カーテン、壁装材と内装材を提供するインテリアの総合メーカーです。

今回見学する伊丹工場は、塩ビタイル、クッションフロアー、カーペットなどの製造過程をご覧いただきます。教室内の講義では決して学ぶことができない制作の現実を、是非見学してみてください。



工場内部

日時 2011年7月8日(金)
14:30~16:30(約2時間)
見学先 東リ(株)伊丹工場
兵庫県伊丹市東有岡5-125
集合 現地
(最寄駅 JR伊丹駅・猪名寺駅)
定員 30名
参加費 500円(保険代、資料代)
締切日 2011年6月10日(金)
申込み 申込用紙記入の上FAXかE-mail
FAX 06-6946-6984
E-mail: h-katayama@aaj.or.jp
(社)日本建築協会編集事業課
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
TEL.06-6946-6981

〔申込書〕

名称	東リ(株)伊丹工場見学会		
学校名・学部・学科			
引率者職名・氏名	(おられない場合は記入不要)		
学生氏名・学年			
学生氏名・学年			
学生氏名・学年			
参加通知書送付先住所・TEL・FAX	〒 TEL	FAX	

2011年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります！

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成23年9月号

「第58回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに57回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

58回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積み重ねている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1. 応募される人は満35歳（平成23年7月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

（選考時までに入会が必要です）

2. 原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3. 応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあつて、なしたげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5. 「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第58回青年技術者特集号」（平成23年9月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

第58回青年技術者は、本年6月30日(木)までに応募できるよう準備をお願いします。

6. 提出資料

■すいせん用紙

請求は、本会事務局、またはすいせん依頼先担当部署へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙5枚以内にまとめる。

① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7. 提出期限 平成23年6月30日（木）

8. 提出先 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャントイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

Email: ken-sha@aaj.or.jp

9. 青年技術者選考委員会（平成23年度）

委員長 設案 貞樹／安井建築設計事務所常務取締役

委員 木多 道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

北村 潤／東畑建築事務所理事設計部長

吉田 文男／一級建築士事務所アトリエフォルム代表取締役

高梨雄二郎／竹中工務店プロジェクト開発推進本部副部長(西日本担当)

太田 寛／鴻池組大阪本店建築設計部長

桑原 進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

高山 真／日建設計設備設計部門設備設計部長

井村 隆／清水建設関西事業本部設備設計部設計長

阪井 聡／大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長

山辻 直樹／大成建設関西支店建築部購買管理室課長

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1989～2010

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1989 vol.70	● 夢をのせる輸送設備	● リゾート事情 ● 竹中工務店創立90周年記念	● 色の復権 ● 東海の新建築と伝統技術*	● 省力化のための材料・工法	● まちづくりと法	● 博覧会とまちづくり	● 都市環境創造と設備I	● 建築とアート	● 構造の省力化 ● 鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	● 都市環境創造と設備II ● ユーザー参加のハウジング	● 第36回 青年技術者	● 最近の博覧会 パビリオン
1990 vol.71	● 商品化住宅のデザイン*	● ニュートン・ルネサンス	● 東海の都市景観 ● 住育文化企画*	● スケール感	● プレハブ住宅技術の現在と未来	● 国際花と緑の博覧会	● 建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	● 高度化—設計の多様化をめざして*	● やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	● 都市のナイス・プレイス ● 兵庫県営繕の歩み	● 第37回 青年技術者 ● 和歌山県の展望と景観*	● 高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	● 新しい都市空間づくり—I—	● オフィス・プレジャー ● 新しい都市空間づくり—II— ● 建築の風景	● 東海支部復活30周年記念	● 大阪東海上ビルディング	● 今、京都 ● 建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	● 建築と土木 ● 毎日放送本社ビル ● 近畿地方建設局管轄部	● 一般号*	● 建築をめぐるトラブルとその解決 ● 建設現場のイメージアップ作戦	● 空間のアイデンティティ ● きんでん写真集 ● 大建設40周年	● 自治体住宅政策への提言 ● 大林組創業100周年記念	● 建築と土木—構造技術の世界— ● 第38回青年技術者	● スリムでタフなコンクリート ● 21世紀の住まいを考える シンポジウム
1992 vol.73	● 夢物語—人がかわる、まちがかわる—	● こだわりのインテリア ● 近畿の郵政建築15年の歩み	● 建築とデザイン—東海支部—*	● 建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	● 地球環境時代の建築	● 街創り、住まいの創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	● 木構造を使ってみませんか—集成材による構造—	● 接着—建築分野への限りなき可能性	● 中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」*	● 屋台—飯屋の魅力に学ぶ— ● ハウジングのメインストリームを拓く	● いま建築教育に何が期待されているか	● 京のかたちと色
1993 vol.74	● 第39回青年技術者 ● 東海建築事務所創立60周年記念作品集	● 大阪府営繕	● 東海的美術館・博物館	● 市民劇場の舞台設備	● 環境—限りある自然と建築とのかかわり	● 都市のスカイライン	● 映画の中のインテリア ● いはらばなラザ・住友ホール	● 建築の再生—構造技術の役割— ● 大阪府営繕	● 国際的パートナーシップの可能性	● 福祉のまちづくり	● 都市型住宅再考	● 第40回青年技術者 ● 環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	● コピー文化の新时代 ● 広島市街創りアジア競技大会	● 九州のインスタレーションと観	● 伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈*	● 建築のエネルギーシステム	● 明日に向かって—会員作品—*	● いま、医療施設は	● 住空間における居どころへの視点	● まちなかの看板 ● 竹中工務店の集合住宅	● 水と建築 ● 日本建築総合試験所	● 建築設備のCGシミュレーション ● 村野、森建築事務所	● 構造美—建築の中の美 ● 集合住宅団地リニューアル	● 第41回 青年技術者 ● 関西国際空港
1995 vol.76	● 光がつくる風合の世界*	● 音—騒音から操音/創音へ	● 飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化*	● トイレから見た都市文化	● トイレ空間	● 接合 ● コスモタワー	● ユニバーサルデザインとは	● 私の空間作法—会員作品	● 新しい「都市・建築」の視点*	● 建築構造と社会の接点 ● 日建設計*	● ライフラインと建築設備*	● 第42回 青年技術者 ● 滋賀県建築課
1996 vol.77	● 阪神大震災から学ぶ*	● 大阪府住宅供給公社創立30周年記念*	● 遠江—その地方振興と文化*	● 立体駐車場設備 ● 大建設計	● 災害！非常時に生きる法体系 ● OAPタワーズ	● いま、プールがおもしろい	● 住まいの未来像	● マルチメディアがつくる世界	● キーコンセプトの新时代	● 最新の大規模スポーツ競技施設の設備	● 私の空間作法'96 ● 九州の元氣 ● りんくうの3作品	● 第43回青年技術者 ● 近畿地建管轄部
1997 vol.78	● 建築のロングライフ化をめざして	● 鉄ものがたり*	● 東海支部会員作品 ● 鉄・鋼—歴史・文化とよみな建築*	● 創立80周年記念 ● 建築と私と社会—80人の眼—*	● 木造建築物の伝統技術とその将来	● 住む空間の復興—ま・観の復興と新たな展開— ● 住居公団関西支社	● 素材の不思議 ● 大阪ドーム	● 新エネルギー ● 住宅・都市整備公団改革への提言	● クロスワード ● 都市OSAKA*	● モザイク都市の住むかたち ● 昭和設計40周年	● 私の空間作法 ● 一会員作品—	● 第44回 青年技術者 ● 京都駅ビル
1998 vol.79	● 新しいまちづくりの予感 ● 東海建築事務所創立65周年	● Concrete ● 九州とわたし、そして建築	● 東海支部会員作品 ● 信州—諏訪とその周辺—	● 街並みの演出—最近の外構材料	● 生活環境の安全・安心	● 地球環境保全と建築	● 心と体を元気にするインテリア	● 建築設備—ビルメンテナンスの立場から	● 建築への証言'98—21世紀に向けて	● ゆめをとめる—たえざる技術からかかわる技術へ	● 私の空間作法 ● 2001年の医療施設	● 第45回青年技術者 ● 駅とともに歩んだ ● 阪西日本の12年
1999 vol.80	● “らしき”のデザイン ● 建築を結ぶ小粋なモノの仕掛け	● 大阪市都市整備局	● 東海支部会員作品'99 ● 北信濃—街並み修復と地域文化の再構築—	● 都市のパブリック	● 関西建築界の流れと東海連三の足跡をたどる	● 改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	● 改正建築基準法—パートII—	● 私の目みた環境問題	● アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	● 木とともに	● 私の空間作法 ● 一会員作品—	● 第46回 青年技術者
2000 vol.81	● 21世紀のデザインの動向を見る ● 安井建築設計事務所創設75周年	● 中国支部—しなみ海と中国地方の街づくり—	● 東海支部会員作品2000 ● 緑・道—地域文化の継承— ● 築き上げた施設づくりのあゆみ	● ところを癒す環境デザイン	● 調べる—測定方法と測定結果が意味するもの—	● スケルトン&インフィル	● 改正建築基準法—パートII—	● 100年後へのメッセージ ● 日建設計創業100周年	● 来世紀に引き継ぐ—わが、もの、こころ—	● 時間	● 私の空間作法 ● 一会員作品— ● 21世紀の高齢者の居住環境	● 第47回 青年技術者
2001 vol.82	● エス・ティ・ティファシリティーズ	● 21世紀の建築設計教育	● 東海支部会員作品 ● 岐阜・大垣	● IT社会におけるきずな	● 自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	● 成熟社会をささえるまちづくり	● 現代の日本の空間・文化を探る	● 建築をささえるセンサー ● 津町リバープレイス	● 建築の力 ● 都市の力	● 緊張 ● 都市基盤整備公団関西支社	● 私の空間作法 ● 一会員作品— ● NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館*	● 第48回 青年技術者 ● 第50回青年技術者十周年技術者顕彰50年
2002 vol.83	● 国土交通省近畿地方整備局管轄部*	● 再生・リサイクル	● 東海支部会員作品 ● 愛知・名古屋	● 生活環境の安全・安心—パート2—	● 塗装のいろいろ	● 都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	● いま、インテリアデザインは ● 津町リバープレイス	● 建築をささえるセンサー ● 津町リバープレイス	● 建築とボランティア	● 時を超えて—サステナブルエンジニアリングの現在—	● 私の空間作法 ● 一会員作品— ● 大阪府中央公会堂	● 第49回 青年技術者 ● 第50回青年技術者十周年技術者顕彰50年
2003 vol.84	● 東海建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 ● 愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	● サステナビリティ—次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン—	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	● 建築をささえるセンサー ● 津町リバープレイス	● 建築とノスタルジー—建築の主観的価値について—	● 力と楽しくつぎ合う方法	● 私の空間作法 ● 一会員作品—	● 第50回青年技術者十周年技術者顕彰50年
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博*	● 省リスクな「まち再生」*	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design+1	● 銭湯—心地よさを求めて—	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法 ● 一会員作品—	● 第51回 青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」 ● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 ● 東海における施設づくりへの新たな試み	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ*	● 私の空間作法 ● 一会員作品—	● 第52回 青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」—まちと共存する空港づくり—	● 東海支部会員作品2006 ● 十東海支部特集3部作*	● 都市再生の本質—光と影のはざま—	● 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー—エネギ—をたくわえ、有効利用する—	● 設計図が伝えるもの ● 設備に役立つ地震対策	● 建築物の安全・安心 ● *	● 第53回 青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも… —構造が未来へつなぐ夢—	● 私の空間作法 ● 一会員作品—
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007 ● 十東海支部特集3部作	● 創立90周年記念—この10年、これからの10年—	● あそび考	● こだわりの創る住まいのカたち	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回 青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法—一会員作品—	● PFI事業、その後	● 東海支部会員作品2008 ● 十東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を訪ねて見るとの ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観 ● 建設図が伝えるもの ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観 ● 建設図が伝えるもの ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観 ● 建設図が伝えるもの ● 小林聖心女子学院	● 自然と戦う構造	● 第55回 青年技術者
2009 vol.90	● 私の空間作法—一会員作品— ● 読者電報 中・島嶼—新都市計画と建築—	● 水の都にぎわいのある未来に向けて	● 東海-TOKAI オムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間を求める空気環境（空気質）	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回 青年技術者	● 地域の歴史を活かしたまちづくり	● 第16回 会員作品特集 “私の空間作法”	● 構造家日記—頭の中をのぞいてみたら—
2010 vol.91	● 創業110周年記念特集 NIKEN SEKKEI	● 建築とエコ技術	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● 食と建築・都市	● ホスピタリティのあるケア空間	● 太陽光発電	● 建築と石	● 再生・受け継ぐ・繋がる	● 第57回 青年技術者	● 建築ストック社会の形成への展望	● LED照明の活用・将来を考えると、地球への思いやり—	● 東京スカイツリー

*は欠号



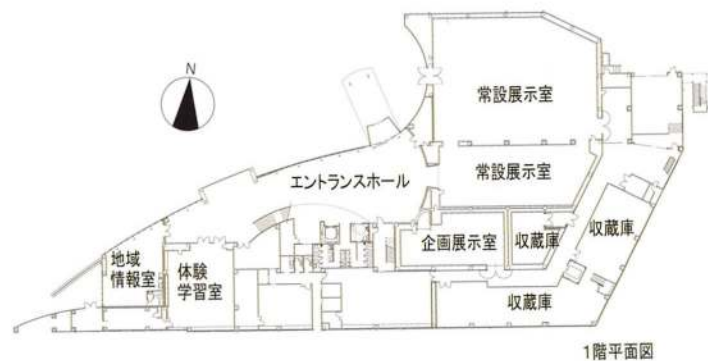
常設展示室



常設展示室



ファサード鳥瞰



所在地——大阪府高槻市郡家新町48番8号

敷地面積——5,603.82㎡

建築面積——2,786.57㎡

延床面積——3,956.04㎡

構造規模——S造

工期——2010年6月～2011年3月

用途——博物館

最寄駅——JR東海道本線 摂津富田駅

撮影——エスエス大阪／増田裕一（林設計事務所）



建 築 主 高槻市

設計・監理 林設計事務所

施 工 イチケン栗田三和共同企業体（建築工事）
西部広沢共同企業体（電気設備工事）
精研竹村太陽共同企業体（機械設備工事）

今城塚古代歴史館

摂津北部、三島平野の中央部に6世紀前半の古墳時代に築造された、真の継体天皇陵ではないかと考古学会で議論されている国史跡「今城塚古墳」がある。

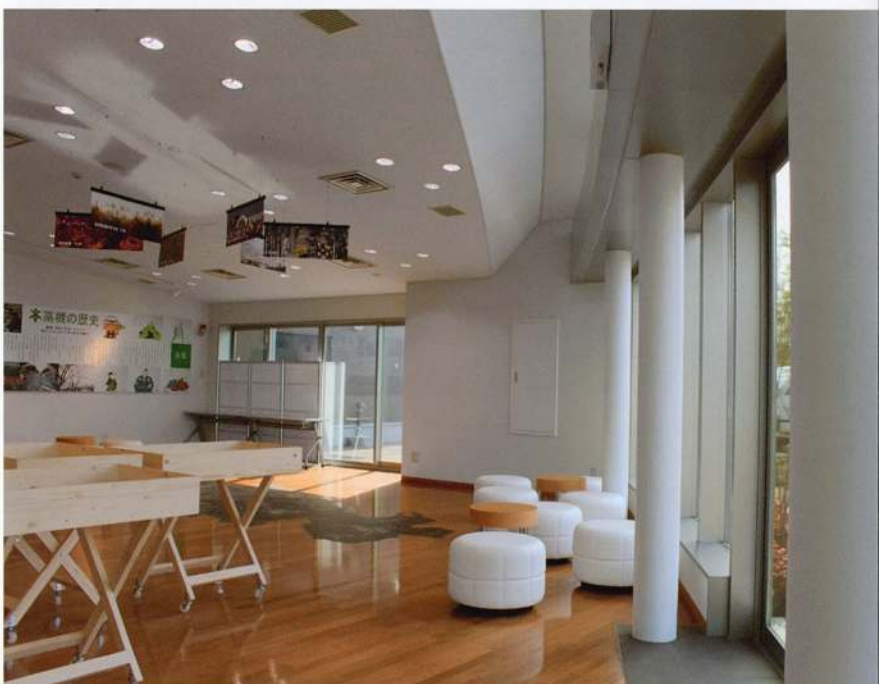
高槻市は、古墳の保存を図るために、昭和33年から約50年かけて史跡の公有地化を進め、平成9年以降、継続的に発掘調査を行い、この史跡の崩壊を防ぐことを目的に、「史跡公園」と位置づけ、平成16年から古墳の復元整備作業を進めてきた。この史跡公園整備事業の一翼を担うのが『今城塚古代歴史館』である。館内は、古墳時代をテーマとした常設展示室、特別展の企画展示室、出土物収蔵庫、講演等に利用できる映像研修室、埴輪製作体験ができる体験学習室等の諸室がエントランスホールを中心に機能的に配置されている。外観は、建物の南にある史跡公園への誘導を意図して、曲面構成としている。

設計に際しては、文化庁の指導のもと、「エアタイト展示ケース・窒素ガス消火耐圧内装・紫外線カットガラスカーテンウォール」等の仕様を組み込んで、重要文化財の展示が可能な施設としている。（展示は別発注工事）

（増田裕一／林設計事務所）



エントランスホール



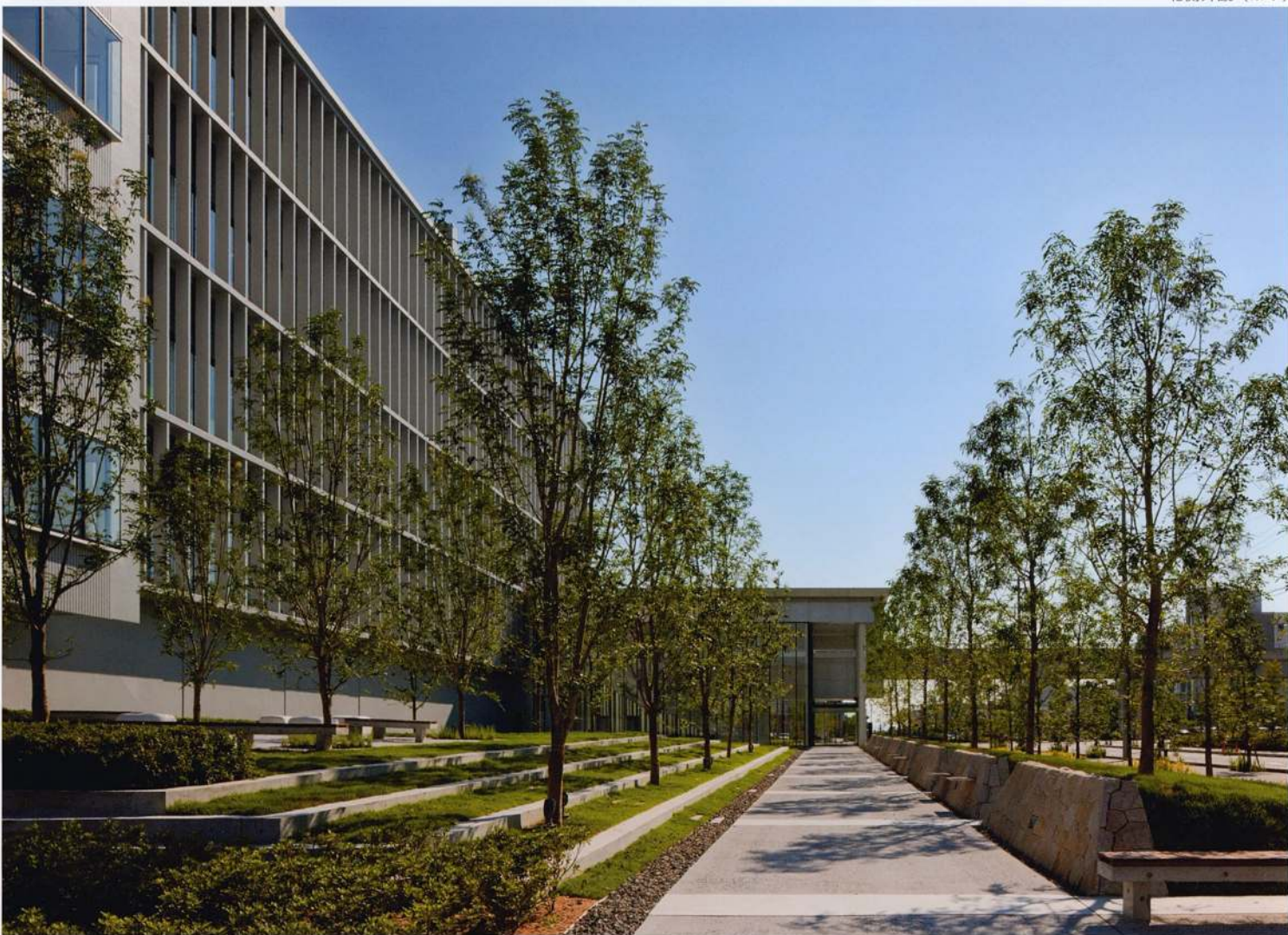
地域情報室



建物全景



北側外観（※1）



前庭（※1）

建築主 鹿島リース株式会社
設 計 KAJIMA DESIGN
施 工 鹿島建設 関西支店

アスビオファーマ株式会社

神戸のポートアイランドに建つ創業のための研究所である。

アスビオファーマは第一三共グループの中でベンチャー的精神をもつ企業として位置づけられており、本建物には風通しのよいユニークな企業風土と神戸らしさを表現することが求められた。

用途としては、特殊実験室、薬理、探索、合成、そして本社機能が備わっており、コンパクトな規模の中に最新の創薬コア機能が用意されている。

北側に面する執務エリアは、道路を挟んでペーリンガーインゲルハイムの研究所と正対しており、見合いを防ぐことと、斜め方向からの西日を遮ることを目的に、北面の外装は、230枚の押出成形セメント板のルーバーにより構成されている。

1階が特殊実験室エリアのため、受付を2階とし、受付までの上下移動の空間としてガラスボックスのエントランス空間を配置している。そこで来訪者は、エスカレータにより上下移動しながら、水盤越しに前庭の眺めを立体的に楽しむことができる。

インテリアは神戸の地形になぞらえ、海から山、そして空へと上昇していくことをコンセプトとしており、1階では海を暗示する水盤を、研究フロアでは山の果実を暗示するビタミンカラーを、6階では空や大気を暗示するカラーリングを施している。

ランドスケープは盛土による段差を築き、立体的な地形とするとともに、沿岸地であるが故の塩分濃度が高い土壌への対策としている。

夕刻に瀬戸内の海へと沈み行く太陽を眺めながらラウンジに腰掛けていると、神戸空港から飛び立ったジェット機が大きく旋回していく。それを見ながら、この研究所で生まれた新薬が世界へと飛び立ち、病に苦しむ多くの人々の命を救ってくれることを願った。

(千葉 洋/KAJIMA DESIGN)

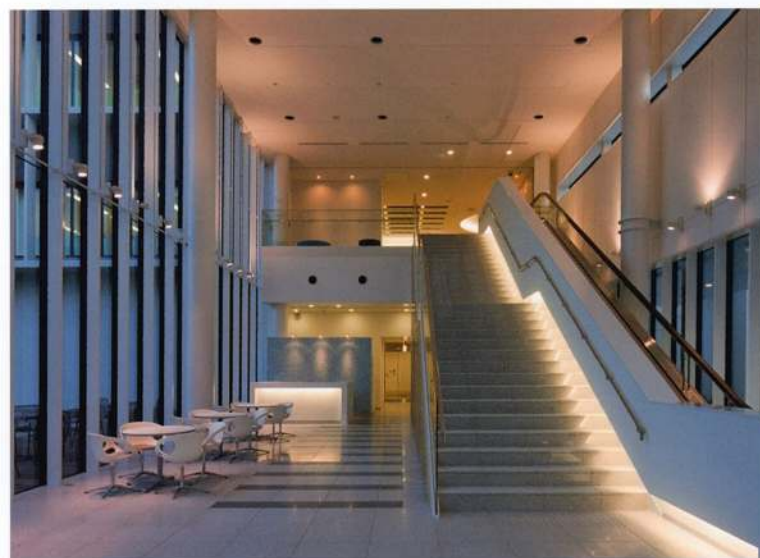
所 在 地 —— 神戸市中央区港島南町6-4-3
敷地面積 —— 10,000.01㎡
建築面積 —— 4,291.34㎡
延床面積 —— 16,431.95㎡
構造規模 —— RC造 地上6階
工 期 —— 2009年6月～2010年7月
最 寄 駅 —— ポートライナー 先端医療センター前駅
撮 影 —— ※1 松村芳治
 ※2 山崎浩治 (伸和)



6階ラウンジ (※1)



執務エリア内のセンタースペース (※1)



1階エントランス (※1)



執務エリア内の吹抜階段 (※2)

所在地——大阪府豊中市新千里東町1丁目
敷地面積——2,925.14㎡
建築面積——2,047.22㎡
延床面積——19,165.24㎡
構造規模——RC造（一部S造） 地上17階 塔屋1階
工期——2009年1月～2011年3月
最寄駅——千里中央駅
撮影——野口兼史



建 築 主 住友商事(株)・阪急不動産(株)・オリックス不動産(株)
設計・監理 竹中工務店
施 工 竹中工務店

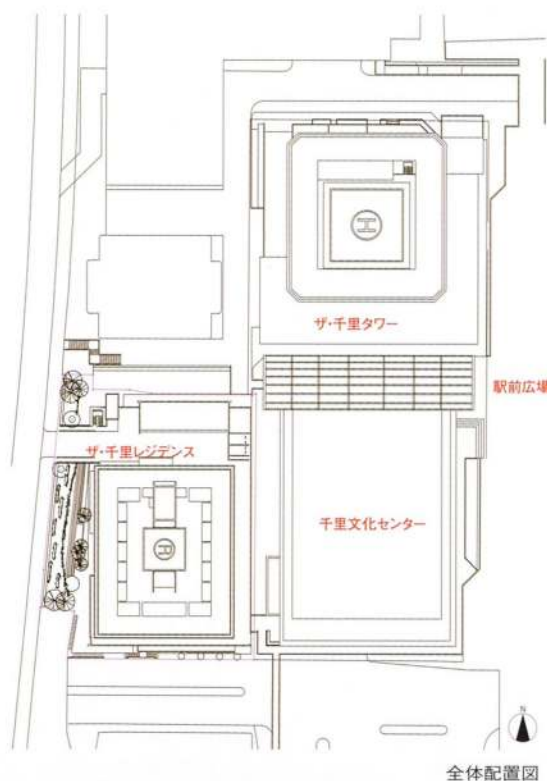
ザ・千里レジデンス

千里中央駅前再整備事業の最終プロジェクト

大阪の中心部と北摂エリアを結ぶ御堂筋線のターミナル駅前に位置する複合型集合住宅である。千里中央駅前再整備事業の最終プロジェクトとして、既存都市機能の活性化と、商業・生活文化ゾーンに住宅機能の付加を、目的としている。低層部には駅前の立地特性を活かした商業施設を配し、駅前広場と一体となった賑わいある街並みを形成している。

千里に相応しい「上質な暮らし」

フラットなスラブと丸柱を積層させた構造計画により、空間を広く大きな開口を確保、千里の緑豊かな眺望と大阪都心部まで一望できる開放的な住環境を実現した。自然素材で構成した共用部のインテリアや家具は、「すまい」として心地良い空間を創出。また、「たぐさんの里：ちさと」をテーマに、千里を代表する竹林・紅葉、積層した石の造形等、伝統的な要素を再構築した美しい庭をラウンジに面して配するなど、千里に相応しい「上質な暮らし」を感じる事ができるシーケンスを生み出している。（河合哲夫、立本 良／竹中工務店）



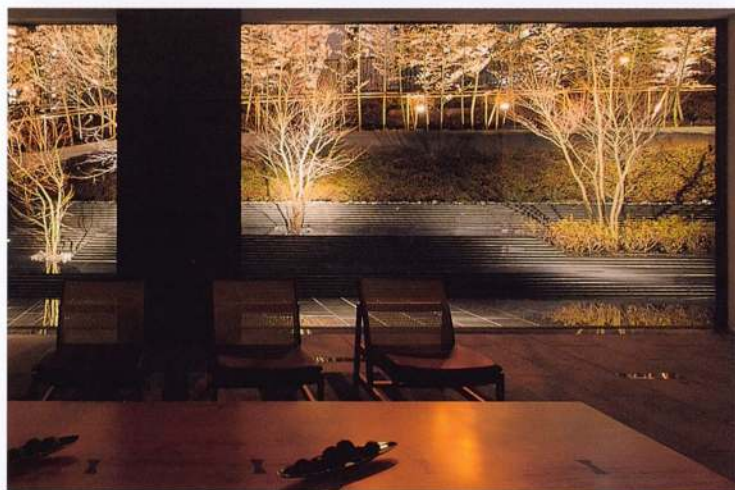
全体配置図



コーナー住戸内観、大阪都心部まで一望できる



アプローチよりエントランスを望む



千里の原点「たぐさんの里」を継承した「千里の庭」



ラウンジより「千里の庭」を望む

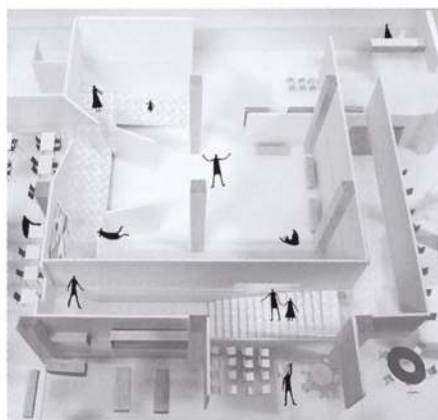


2層吹き抜けラウンジ（エントランスより）



■研究室の紹介

水谷俊博研究室は武蔵野大学環境学部環境学科住環境専攻・都市環境専攻の設計・計画系の研究室です。2006年4月に発足し、この春5期生が卒業（合計約70名程が建築の世界にはばたいたことになります）し、6年目に突入しています。研究室の活動は大きく3つのテーマがあります。1つめは建築の設計、デザイン。実施設計を通して、建築の設計プロセス、デザイン手法、などを実践的に学習していきます。2つめは、木造構造物の制作（平たく言うと「モノづくり」ということでしょうか）。ある意味、施工といってもいいかもしれません（いわゆる建築施工学とは異なりますが）。プロダクトにいたるまで実際にモノをつくることによりデザインを学んでいきます。3つめは、まちづくりです。これもいわゆる都市・地域計画学のまちづくりということとは異なりますが、さまざまな地域においてアートワークショップの実践をおこなうことにより、空間と地域（の人々）をむすびつけていく取り組みをおこなっています。私自身学生時代は京都大学で内井昭蔵先生と布野修司先生という2人のいわば対照的な（！）先生方に御指導を受けました。設計からまちづくりまでの守備範囲は、このお二人の師匠の影響といえます。



2 前橋市美術館（仮称）プロポーザルコンペ案

「右手で設計、左手で研究」という布野修司先生の箴言が水谷研のベースになっているともいえます。

■建築の設計・デザインへの参画

研究室では公共施設から住宅の設計まで、実施設計をベースにした建築教育をおこなっています。2011年2月に開催された「前橋市美術館（仮称）プロポーザルコンペティション」において最優秀賞に選定されました。本プロジェクトは2012年度までの本研究室におけるメインプロジェクトになります。その他2008年の町田市鶴川駅前公共施設設計プロポーザルで入選の他、住宅の設計にも学生が参画する場を設けています。「Off The Wall-石神井台の家」（2010）（住まいの環境デザインアワード特別賞（東京ガス主催））や「One Plus (+) One-羽鳥の家」（2007年）などは設計や一部施工に参画し、建築雑誌などでも紹介されています。これらの実施設計における経験は学生の卒業設計にとって、実践的なトレーニングの場になっており、例年学生設計優秀作品展（主催：レモン画翠）、全国学生卒業設計コンクール（主催：JIA）等に出展をしています。（2009年に加藤夏美さんが銀賞（JIA）、2007年に平田悠さんがレモン賞（レモン展）を受賞しています。）



1 石神井台の家の内観（研究室のゼミ生が、一部設計の他、家具の施工にも携わっている）



3 小金井市（上）と西東京市のワークショップ（水谷研学生5期生（上）、3期生（下）と共に）

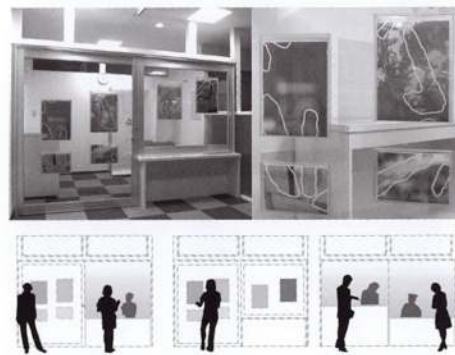
■地域・行政との連携

研究室では設計活動の他、地域の行政や自治会などが主催するプログラムにも積極的に参加しています。

2010年、小金井市公民館主催事業「地域センター施設研究講座」においてワークショップを開催しました。小金井市公民館が進める地域センター建設事業に先立ち、市が連続全13回の「地域センター施設研究講座」を開催。そのうちの4回にわたり市民ワークショップを企画、開催。地域センター建設にむけた提案を建築ワークショップにより市民から募りまとめました。

2008年、西東京市が進める総合計画（後期基本計画）策定プロジェクトの一環により、大学生ワークショップに参加。田無、柳沢、東伏見3地区の地区調査をおこない、まちづくり活性化にむけた提案を市民公開のプレゼンテーションによっておこないました。

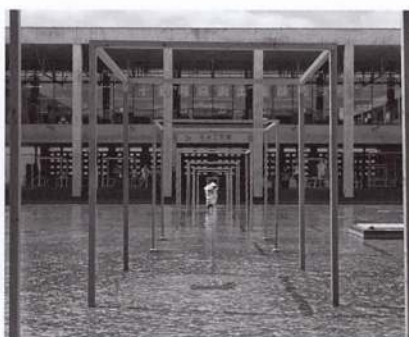
また、デザインの実践の展開もおこなっています。西東京市田無駅前のショッピングセンタービルの情報カウンターの設計（2006年）です。単なるサービスカウンターづくりの要望から発展させ、地域全体の情報基地としてのプログラムを実現しました。ゼミ活動の内容はFM西東京に紹介されました。



4 西東京市アスタ商店会の情報カウンター



5 木でつくるプロジェクト授業講評会の様子



7 越後妻有アートトリエンナーレ出展



9 池袋本町商店会のワークショップの様子

■木でつくる取り組み

設計と並行して、実際にものをつくるという活動を通してデザインの考え方、プロセス、方法を学んでいくプロジェクトを展開しています。そのひとつは「いすをつくる」プロジェクト。東京藝術大学の渡邊浩幸さんに指導をお手伝い頂いています。毎年新たな課題を設定し（ちなみに今年度の課題は「10秒後の世界、または自分が知らない時間を感じる瞬間。そんなときにこしかけの椅子」）、そのテーマに対して「いす」によりどのようなデザインの回答が可能かということ問いかけています。

活動の展開として、東京デザイナーズウィーク2010へ出展をしました。作品名は『In A Savanna』。6,438本の木の線材によって創り出された椅子のインスタレーションは学校部門GRAND AWARD賞（グランプリ）、及び学生賞を受賞しました。

また、活動の枠を地域へと広げる取組もおこなっています。2006年、商店街活性化を目的とした取り組みとして、西東京市伏見商店会において「ベンチでまちづくり」プロジェクトを開催。コミュニティ活性化への一企画として、ベンチのデザインから制作をおこない商店会にコミュニティベンチを設置。3年生のゼミ活動とリンクし商店会との企画会議をへて実現されました。活動の様子は朝日新聞等で紹介されました。

■建築とアートの連続

また2007年より継続して仮設木造建築物の設計、制作をおこなうプロジェクトをおこなっています。セルフビルドでの施工が前提となるため、誰でもつくれる工法をベースに、木材の組方や既成金物の工夫により、木質材料の可能性や設計と施工を区別しない、いわば建築生産の可能性を探っています。

2009年には大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレに出展をしました。作品名は『アーチの森2009』。新潟県十日町市越後妻有交流館「キナーレ」（設計：原広司）の中央に木造の立方体フレームで構成した池を横断する大胆な回廊を創出。施工は完全なセルフビルドで、巨大な4m角から、手のひらサイズの4.5cm角のアーチまで計17個のユニットにより形成。作品は多数の来場者を楽しんでいただきました。

また2010年に木造仮設建築物の作品『アーチの森2010』を武蔵野市クリーンフェス2010のメインゲートとして出展（会場：武蔵野市クリーンセンター）。クリーンフェスの会場の演出及び活性化促進をおこないました。作品展示の様子は建築系の雑誌に掲載され、「エフエムむさしの」において放送されました。

■ワークショップの展開

研究室発足当初からさまざまなコミュニティ単位において地域活性化へのプロジェ

クト展開をおこなっています。デザイン・設計の実践ということターゲットにすえながら、グループワークによる空間デザイン等の企画、ワークショップの実践をおこなうことを目的にしています。豊島区池袋本町『夏休み児童絵画展』、『エコ・キャンドルナイト&ワークショップ展』（2007年）、武蔵野市吉祥寺シアターカフェ『みんなでつくる写真展』（2008年）、多摩六都科学館アートワークショップ展『幸せのイヌ一人々の幸せのメッセージをカタチに』（2010年）などを開催しました。

■設計系研究室が学生へ伝えられること

このように、さまざまな建築の展開を考えながら学生たちとプロジェクトに取り組んでいます。建築設計業界も元気がない状況にありますが、なんとか学生のみんなには夢を描いて欲しいと思います。そう考えると研究室でのさまざまな活動や経験によるブレークスルーする感覚を大切にしたいと熱心に感じています。僕はいつも学生たちに『ぶっ生き返せ！』と伝えてますし、これからも伝えたいと考えています。学生たちの今後の活躍に期待しています。

（文責：水谷 俊博）

写真撮影：浅川 敏（7）、水谷研究室（その他）
活動の詳細は水谷研究室のHP
http://k-13.jp/M_lab/を参照してください。



6 TDW2010出展。学校部門グランプリ受賞



8 武蔵野クリーンフェス出展の「アーチの森」



10 吉祥寺シアターカフェのワークショップ

まち 建築 ひと

gallery

panscape

設計

今津康夫

昨年、設計させて頂いたパン屋さんのインテリアデザインです。
独立すると、勤めていた時のように大規模プロジェクトを依頼される
訳もなく、巡り会った仕事に取り組んでいる間に、店舗デザインを依
頼されることが多くなりました。

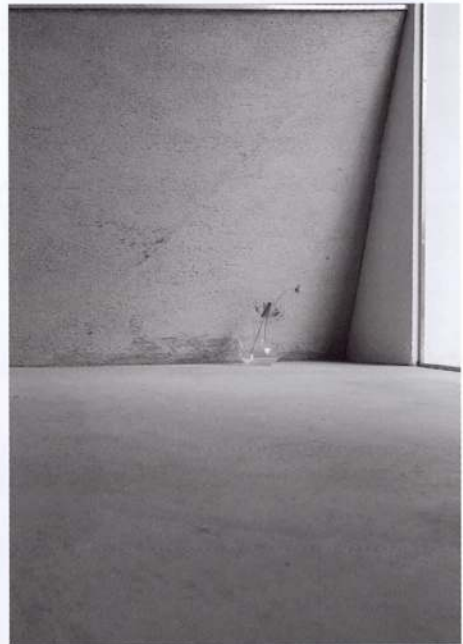
最近特に思うことは、「店は街と連動してる」ということです。
それは、単に経済活動だけではありません。1つのお店ができること
で、そこに訪れる人の生活に影響を与えることができます。前を通る
だけの人にも賑わいや明るさを与えることもできるでしょう。

店舗はパブリック開き、同時に大きく働きかけることができるのです。
不特定多数の人が同時に居合わせることが出来る貴重な場なのです。
それは、建築を思考するときの最も大きなモチベーションの1つでし
た。店舗デザインは建築デザインと分けて考えられがちですが、小さ
な美術館（パブリック）いくつも街につくるんだという気概で、日々取
り組んでいます。

今津康夫（いまづ やすお）

1976年
2001年
2001-2005年
2005年
2007年
2007年
2008年
2010年
2010年

山口県生まれ
大阪大学大学院修了
遠藤剛生建築設計事務所
ninkipen!一級建築士事務所開設
Residential Lighting Award 2006 入選
JCD Design Award 2007 銀賞
42nd SDA賞 最優秀賞/青木淳賞
JCD Design Award 2010 新人賞
Tokyo Midtown Award 佐藤卓賞



特集

変遷する“身の置きどころ”

このたびの東日本大震災によって被害を受けられた皆様に、心からお見舞い申し上げます。

2月某日、昨年末より開始した本特集の企画もようやく大筋が定まるに至った。ここ数年の社会、政治経済の変化にともなう、われわれの暮らしや生活空間に生じた変化に焦点を当て、その変遷と背景をあぶり出そうという内容であった。価値観の多様化、拡張とボーダレス化を受けた生活空間は、単に“住まい”という従来型の言葉で語ることが相応しくなく、ここでは“身の置きどころ”と呼ぶことになった。

3月11日に起きた未曾有の大震災により、状況は一変した。被災された多くの方々が避難所で生活することを余儀なくされた。われわれの全く予期しない形での“身の置きどころ”がいたる場所で発生し、テレビなどを通じて知ることとなった。中途半端になることを懸念しながらも、先に予定した記事の後半半分を、避難所のルポルタージュに充て、特集号を二本立てとすることとした。

避難所のルポは、専門家による空間観察者としての視線で書かれているが、滔々とした記述の中にも人々が寄り添い過ごし、交わる様が少なからず伝わってくる。冒頭の総論で杉浦先生が述べているように、“身の置きどころ”を論ずる時には“心の拠りどころ”も携えることを忘れてはならない。

本特集企画担当●神谷浩司

●総論

生活空間の変化と展望～「身の置きどころ」は「心の拠りどころ」～／杉浦久子

●各論 1

- ①居住空間としてのマンガ喫茶／北川啓介
- ②セルフビルド～家をつくることの愉しみ～／大竹誠
- ③田舎で元気になろう！／越道正芳
- ④コンバージョン+交流の場～HOSTEL 64 Osaka～／中谷ノボル

●各論 2

- ①東日本大震災の被災地を訪ねて／北川啓介
- ②日常を失った生活空間～東日本大震災における身の置きどころのたち現れかた～／北川啓介+米澤隆

ルポ1・公民館ホール

ルポ2・会議室

ルポ3・和室

ルポ4・図書館

ルポ5・体育館

生活空間の 変化と展望

～「身の置きどころ」は
「心の拠りどころ」～

昭和女子大学大学院教授

杉浦久子

1958年東京生まれ。87～89年早稲田大学大学院修士課程修了（建築）。89～92年フランス国立建築学校、94年仏国建築家資格取得、92年から現在、昭和女子大学大学院環境デザイン研究専攻教授。

作品：1995年「仙台メディアテーク建築設計競技優秀賞」（古谷誠章氏と共同）、2002年SD Review入選（蚊帳のウチ）。2003年、06年、09年「越後妻有アートトリエンナーレ」出展（雪ノウチシリーズ）。2010年、11年「Shibuya1000展」（渋谷駅構内）出展。

2000年より「サイト・リノベーション」活動を展開中。

2008年、日本建築学会の会報誌『建築雑誌』4月号にて「拡張する『私んち』？」という特集記事を、当時の編集委員として企画し、書いた。今回、「変遷する“身の置きどころ”」特集において、「生活空間の変化と展望」というタイトルで原稿のご依頼をいただいたのも、上記の特集が関係しているというお話であった。

あれからはや3年。すでに3年前からその兆候は現れていたが、現在、様々な規範や価値観が大変革しつつある。この間、世界はさらに、どのように変わったであろうか。と考え始め、いざ書こうと思っていたところ、この大震災であった。「変遷する“身の置きどころ”」、「生活空間の変化と展望」というテーマは大変根源的な問いとして、私に突きつけられているように見え、なかなか筆が進まなくなり、困った。

だが、とにかく、2008年から今までの経緯を少し書くことにしたい。当時の解題、まとめからの抜粋を以下に記すことにする。

■2008年

—私的空間からのアプローチ—

『建築雑誌』2008年4月号では、特に公共性と対峙する概念としてある私性の側から、公共性を逆照射してゆく。

偏在、表出、拡張してゆく私性は、あらたな公共性を生む可能性を持ちうるのだろうか。

表題の「拡張する『私んち』？」はいわゆる「私の家」という概念からは少しはみ出したオルタナティブな「私の家的なるもの」の存在を『私んち』？という言葉に託した。変わりつつある社会の中で、私的空間・公的空間のあり方も変わり始めている。今日、「電車の中で化粧にいそしむ人」は言うに及ばず、私の家を持たずに漂流する「ネットカフェ難民」、公共の場で暮らす「ホームレス」、ネット上の仮想空間で、私的な「ブログ」をパブリックに発信して起こった「ブログ炎上」等、公・私の境界にまつわる問題が様々に見られる。

また、ある建築家が「私の家」を地域に開き、身近な「小さな公」が生まれた事例などが報告されている。「私の家」を公共に開く

とは、ひるがえって、その家の主の私性がまちに表出することと同意でもある。

さらに、コミケ（コミックマーケットの略）に集まる集団のように、共通の趣味を通じて、たくさんの私的な集団が公共の場に突然、わくように集まってきたりする。ネットや携帯で繋がり、新たな関係性が生まれ、ある種のコミュニケーションが形成されているように思える。一方、拡張する私性とは逆方向に、ゲーテッドコミュニティやひきこもりなど、社会や公共的なものから積極的に閉ざそうとする私性も見受けられる。

このように今日、公・私の境界が変容、曖昧化する流れの中で、公共空間について考察するためにも、私的空間の側からのアプローチを試みた。

■公共空間と私的空間の交錯

拡張する『私んち』？がもたらすものは、公共的空間に私的空間が広がってゆくだけではなく、私の家の中に公共的なものが入ってきたり、私性が公共空間に表出してゆき、積極的に他者と関わりを持ちながら交流が起これること、新しい公共性・私性の概念が生まれそうなことではないかと思う。

実際、ネットなどを通じて様々な新たなコミュニケーションのような繋がりが生まれつつあり、現実の場所でも交流が始まっているようである。（またこの特集の中では都市空間を私的に占有するアーティストや、私的な空間に入り込んでいっしょに住んでしまうアーティストらも取材したのだが）条理化した都市の中でのある種の特異点、稀人の事例から次なる可能性の萌芽、新たな公・私の概念が生まれてくれば、と期待している。（『建築雑誌』2008年4月号）

■2011年

—さらに多様な「身の置きどころ」—

そして現在。都市の中では、さらに多様な「身の置きどころ」が出来始めていると感じていた。海外ではよくある友人、知人どうしの（あるいは赤の他人どうしの）「シェアハウス」、「コレクティブハウス」等、日本でも経済的事情や、新たな関係性やコミュニティをつくりたい等の積極的理由により増えてき

たように思える。

またネット上ではツイッターやフェイスブックなど、ブログやmixiより、さらに進化したコミュニケーションツールにより、自身のネット上の「身の置きどころ」や、人と人の関係性は、公、私の境界を越えて、関係性の組み替えが行われ、孤立していた個人はどんどん繋がっていきこうとしているようである。

しかし、その一方で、物理的な「身の置きどころ」はあれども、社会から孤立し、誰とも繋がっていない閉ざされた私性がさらに孤立してゆくことも加速度的に進んでいる。現在、私たちの「身の置きどころ」は従来の「家」（ネット空間の「身の置きどころ」としてはホームページ）を越えて多様な場所に展開され、あるときは都市空間（ネット空間）の様々な場所に偏在している。

しかし、いったい「身の置きどころ」とは何なのだろうか。そんなことをぼんやり考えていたら、2011年3月11日、東日本大震災が起こった。テレビに流れる、信じられないような画像を眼で追いかけてながら、ふと哲学者・池田晶子氏の言葉を思い出した。

「自然は人間の意志を超えているという、ものすごく当たり前で、ものすごく不思議なことへの驚きを忘れると、次に人間はこれを支配しようとし始める。自然を人間の意志でどうこうしようと考え始める。……体や命が自然のものだということを忘れ、それを自分のものだと思うところに、もう間違いは始まっているということだ」（『14歳の君へ どう考えどう生きるか』池田晶子著 毎日新聞社 2006年）

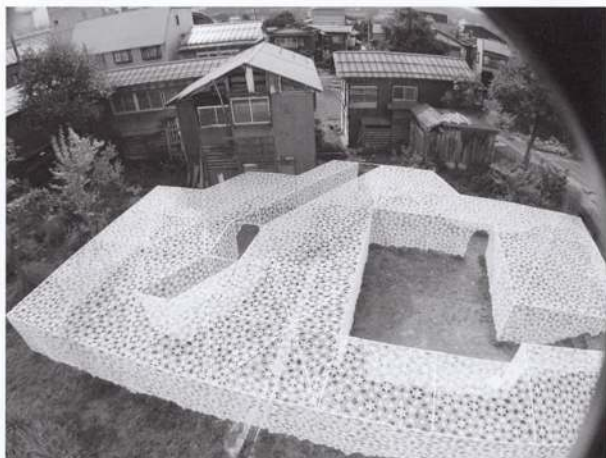
■震災

一場の記憶は心の中に生きている

地震、津波という自然は、町という人工を飲み込み、その場がいったんリセットされたかのように何もなくなり、まるで現代に原始の自然の姿が現れたようである。しかし、この場所の意味までもが一扫されたわけではなく、この場の記憶や経験は、人の心の中に生きている。

本来の「身の置きどころ」をすっかり失い、避難所に避難された本当にたくさんの方たち。

全景（2004年 豪雪地帯、新潟県十日町にて）
中越地震被災地跡地に皆で幸を願い雪のモチーフ1万枚を編み、空間とした



大地の芸術祭 2006

杉浦久子
+杉浦友哉+杉浦研究室



「幸(ユキ)のウチ」

地域の方々と学生らと皆で
設営する



地域内外の交流、ここで亡くなられた方、仮設住宅から戻られた方、半壊のまま住まわれている方、地域外からの来訪者、皆集まった「ごったくパーティー」

とりあえずの物理的な「身の置きどころ」はこの避難所や仮設住宅であるが、生きてきた場所というものの意味は大変に重く、そこでの仕事や日常生活、そこに居た家族、友人、共同体、今まで疑いようもないほど当たり前にあった、本当に様々なものが散り散りに分断されてしまい、「身の置きどころ」も切断されてしまったように見える。そして、「身の置きどころ」は同時に「心の拠りどころ」であったことが、被災された様々な方々へのインタビューなどからうかがえる。

復興に向けて、これから急ピッチで様々な事柄が進んでいくだろう。観念的なまちや抽象的なコミュニティではなく、本当の意味での「心の拠りどころ」となるような「身の置きどころ」が今こそ必要であると思う。私たち

の関わっている建築とは人工物である。建築が自然の一部とはなりえず、やはり不完全な人工物でしかないとしたら、もう一度、自然の部分としての人、建築という思想を生み出せるのか。

そして、この場所で生きてきた人々の想いを顕在化させ、分断されてしまった様々なものを繋ぎ、皆の「心・身の拠りどころ」となるような、新たなコミュニティの場が創出されることを願う。

（非力な私に何ができるのかわからないが、今まで学生らと行ってきた活動を、何らか「心・身の拠りどころ」を創出することに繋げてゆきたいと今は考えている）

（すぎうら ひさこ）

居住空間としての マンガ喫茶

名古屋工業大学大学院工学研究科准教授

北川啓介

1974年名古屋市内の和菓子屋生まれ。

建築家、研究者。専門は、建築設計計画、建築意匠、現代建築、都市計画、情報空間論、サバカル論、ナゴヤ論。1996年国立名古屋工業大学工学部卒業。1999年ライザー・ウメト事務所など。2001年同大学大学院工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）。同大学大学院助手、講師、助教授を経て、現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科准教授、名工大ラジオ局長。

論文＝『映画の中の都市と建築』、『和菓子と建築』など。報文＝『もうひとつの建築設計資料集成』（日本建築学会建築雑誌、2009年12月号）など。著書＝『ハイパーサーフェスのデザインと技術』（彰国社、2005年）など。

受賞＝日本建築学会東海賞、名古屋市都市景観賞など。

名古屋では、コーヒー一杯の代金で、おかずに無料で鰻腹ついてくる有名なモーニングに代表されるように、喫茶店でも他の商売でも豊富なサービスが不可欠であり、その延長上で1980年頃の名古屋市名東区にて、マンガ喫茶が誕生したと言われている。

それから約30年が経つ。定住せずに都心のカフェや飲食店を仮の棲み家として日暮らしの生活を送る日雇労働者の生活が、数年前にテレビや国会で取り上げられて以降、数々の人材派遣業者による偽装や破綻とともに、社会問題のひとつとされ、全国の行政が主体となって、賃貸住宅や定期雇用の斡旋を最優先課題として推し進めている。

しかし、行政側が終身雇用と比較してニートやワーキングプアを他を問題視することは容易でも、合理化が拡大し、寄るべき大樹もない現代社会において、民間や市民側のできることは必然的に限定されているのが実情である。特に、人口の自然減少が始まった2005年以来、特定の企業や関連会社の工場や下請け子会社などが自治体における産業の大部分を占める企業城下町では、各企業がこぞって働き手を求めて、海外から多くの労働者を動員し、それまで地方の一都市の小中学校は、南米系スクールや東南アジア系スクールへと様変わりして、従来の教育が成立しないのが事実である。数年前まで教職員が全員、国家公務員であった旧国立大学にあって、今や雇用の安定はどこへやら、任期や締切りに追われて、教育と研究の成果の提出が常に求められる。

私は、従来のトップダウンの公私の分別にとらわれることなく、つまり建築計画や都市計画という仰々しい計画物ではなく、一人ひとりの人間の実直な生活スタイルから生じた果敢な生活を送る個人の集まりの生活に、今の日本の都市と社会を考える重要なキーワードがあると思い、彼ら、彼女らの拠点となっている24時間営業のマンガ喫茶やファーストフード店空間に、いつも持ち歩いている鞆に着替え一着を入れて、名古屋の自宅を後にした。

■歌舞伎町のマンガ喫茶25軒での六日間

11月下旬の三連休を挟む六日間、歌舞伎町界隈の全てのマンガ喫茶制覇フィールドワークを開始した。中学生のときからマンガが多

いだけのマンガ喫茶には足繁く通っていた私も、宿泊できるようなマンガ喫茶に入店するのはこれが初めてであった。

フィールドワーク調査の起点として初日の0時に入店した全国チェーンの大手マンガ喫茶は、地下1階と地下2階に合計100のブースを設け、ブース同士の間仕切を開閉することで柔軟に空間を開閉でき、ユーザーのバリエーションに合わせた空間構成にできる。それ以上に優れているのが、階の構成である。昼と夜の客の利用形態をしっかり捉え、受付のある地下1階の壁面の書棚に店の全てのマンガや雑誌を揃えている。逆に、店の内部の階段で地下2階に下りると、そこには個別のブースが並ぶだけ。まるで寝台車のように人体スケールに即して合理的に計画された細い廊下と、数多くの単位空間が並ぶのみである。新宿のマンガ喫茶の利用者は昼も夜も就寝を目的にしている人が約半分であり、地下2階はその専用スペースとし、立地条件に合わせた極めて割り切った空間構成となっている。私は都市難民の実態を知るべく、まずは図面起こしへと店を彷徨い、なにやら人の気配を感じ振り向くと、ジュースや本を片手にパジャマやネグリジェ一枚で通路を歩き回る二十歳前後の少女たちがいた。数人に声をかけると、夜の繁華街で働き始めたばかりで稼ぎに限られるが、電車で通ってまで働きたいとは思わないという。店の共用部分なので誰の目にもつく空間であるにもかかわらず、シャワーを浴びた後に恥じらうことなく店を歩く姿に、彼女たちにとってマンガ喫茶が公的空間なのか私的空間なのか、結局、どちらでもない個々の価値観から生まれた新しい次元の空間だと確信した。

3日目の未明、駅近くにあり新宿で最も古いマンガ喫茶へ。入店と同時に次回以降の割引チケットを5枚もらい、リピーターへの配慮は満点である。割引チケットを使わなくても新宿で最も安価で時間を過ごすことができ、新しいマンガ喫茶がひとり一畳のブースに個別照明とパソコンとテレビと毛布が割り当てられるのに対して、老舗になるほど環境設備は最小限となる。多くの人が喫煙し、白かった壁も真黄色となっているのが暗い空間でもよく分かる。1980年代に全国に広がった

元祖のマンガ喫茶の形式を、30年あまりたった今も守り、設備投資もせず、他の店舗の動向に一切左右されない。実はマンガ喫茶は、マンガの品揃えからサービスの度合いなど、通常の喫茶店や飲食店以上にユーザーの要求が高く、栄衰による閉業開業の回転が著しい。早朝、この店の窓面を埋め尽くす本棚に収められた色とりどりのマンガの隙間からは、一寸の光が差し込み、建築意匠^{かき}の欠片もないと思われた最古の店は、その瞬間、神聖な空間と変貌する。最近の多くのマンガ喫茶が高遮光一辺倒であるのに対して、流行にのらず、普遍性を感じるほど、当時からのマンガに囲まれた空間の記憶をも今に伝えている。将来、マンガ喫茶が海外から評価を受けた際に日本として最初に文化財として保存すべきマンガ喫茶の空間である。

他にも、小規模店舗の天井高の書棚がパーティションを兼ねつつ、完全に視界と音を分断しプライバシーを守るとともに、マンガ喫茶の夏寒く冬暑く年中乾燥する独特な熱環境をブースごとに微調整できるように温熱環境面に配慮したマンガ喫茶や、他のマンガ喫茶がサービス空間を受付のみとしサービス自体もフリードリンクの自動販売機に一変し、本来の喫茶自体からかけ離れていったのに対して、店の内部を古都の街並みに喩え、大小様々な数寄屋ブースからのオーダーに応じて着物の女性店員が一杯ずつ呈茶するマンガ喫茶など、マンガ喫茶の空間を一般論では語れなくなっている。

マンガ喫茶というひとつのビルディングタイプに包含される内部空間の多様性は、新宿という一地区においても、今回の六日間で巡った25軒に限らず、将来の社会情勢に応じて常に意味が更新されつつ維持されていく極まりなく珍しい建築様式なのである。

■新しい付加価値と融合していく マンガ喫茶

私は、今も、全国のマンガ喫茶やマクドナルドに泊まり込んで都市生活の調査を継続している。新宿駅前では、江戸四宿のひとつであった時代から社会的活動、政治的活動に対する市民運動の中心であったことと連動しているのであろう、仕事、経済、出身、年齢といった客の個々の実直な生活事由が新宿に棲

み込むきっかけとなっており、他の地区と比べ、マンガがほとんどおいてない超低価格で一泊できる店から、重労働従事者に大人気のマッサージ機器ばかりが並ぶ店、高層ビルの上階の見晴らしの良い空間に美顔器や酸素バーをレイアウトしたセブ向けの店など、おのこの店が独自の属性を対象としつつ多属性の客を許容する軒を連ねることが多い。

対して渋谷と上野は、店の内部の数人用のブースの間仕切りが天井にまで至り、鍵がつき、防音性能も優れ、他者を介さず、匿名性を保つマンガ喫茶が多い。中野界限には、客がブースではなく、皆で広い座敷に横たわれるマンガ喫茶が多く、子ども連れでも安心であり、地域に開かれたコミュニティセンターのような役割をも果たしている。

冬の札幌すすき野では、共有部に暖炉、足湯、サウナ、各ブースに加湿器を備え、環境面において、他にない格段の配慮が確認できる。

発祥の地、名古屋の中心部では新種が生まれつつあり、男性5000円のマンガ喫茶と女性無料のマンガ喫茶を隣り合わせて開店し、その境に大きなマジックミラーを設け、出会いカフェとしている。二十歳前後の女性が無料で生活の拠点としている。通常のマンガ喫茶の組み合わせだけから新しい経営システムと新しいビルディングタイプを考え、その上で需要が高いことは、現代の都市と建築の重畳性を表象している。

都市の公共と私有を俯瞰的に計画する型とは異なり、都市に既存の建築の立地の環境風土を盛り込んだ内部空間として、多様にマイナーチェンジを繰り返していく個々の私有領域の拡張は、今後の高齢化、人口減少が加速する都市を考えていく上でも、時期として実は都市の必然的な事象である。

新しい価値が新しい文化を生む。仮想であったはずのマンガが生んだ現実の都市の物語。マンガ喫茶は現代人の精神の拠りどころを担っていることを、建築分野に身をおく私たちは可能な限り真摯に眼を向けるべきなのである。

参考文献

- 1: 北川啓介: マンガ喫茶白書 社会問題に先行するひとり一畳の聖域、日本建築学会建築雑誌、pp.5-8、2008年4月
- 2: 北川啓介: もうひとつの建築設計資料集成、日本建築学会建築雑誌、pp.36-47、2009年12月
(きたがわ けいすけ)



アニメのコスチュームでの入店者も多い



珍しい無音のスロットマシン席



格安化と多様化が進むフードメニュー



焼き放題の日焼けマシンが人気



防犯のためテレビはつけっ放しが多い



空きの多い昼間にシャワーを浴びる筆者

▶赤地邸：変化に
富んだ開口部が
見える



▼杉小屋：斜めの
窓もいかと、
あけてみた



各論1
2

セルフビルド

～家をつくることの愉しみ～

現代デザイン研究室主宰

大竹 誠

1944年東京生まれ。現代デザイン研究室主宰。LLPまち・コミュニケーション研究会メンバー。東京造形大学ほかで非常勤講師。武蔵野美術大学建築学科卒業。大学卒業後ゼミの仲間と「遺留品研究所」を設立。以降、街に取り残されたモノを通して都市探索を開始、調査・研究を続ける。

著書「アーバンテクスチャ」（住まいの図書館出版局）「街の忘れがたみ」（ギャップ出版）「新発見・寄り道まち歩き」（パロル舎）「初めてデザインを学ぶ人のために」（論創社）など。

世界に建てられる建築のわずか数パーセントだけが専門の建築技師によるもので、残りはすべてその地域で暮らす人々の手でつくられている。それらはセルフビルドされたもので、動物たちが棲みかを創り出すように、素人の人たちが自分の身体や暮らしに合わせてつくっている。そんな事例を世界中から集め編集した書籍『建築家によらない建築』（原著名はwithout architecture：著者はバーナード・ルドルフスキー）が1964年に発行された。この本の影響は大きなもので、仲間とともにページをめくり納得し、建築を学ぶならばまずはセルフビルドだよと心した覚えがある。夏季休暇などを利用して、民家を見て回るフィールドワークをしたり、実験的な空間をつくったり、公園の遊具をセルフビルドする友人も現れた。時代は1960年代末であり、既成の考え方を振りかざしたのではにっちもさっちもいかない状況で、新しい価値を求め出していたこともあり、セルフビルドの思考は市民権を得た。

*

セルフビルド建築の体験がいくつかある。一つは絵が好きで、いつも音楽の流れている伯父さんの家のことだった。伯父さんは戦後、下落合に6坪の家を建てて暮らしていた。借地の条件の期限とともに、その家を解体し、石神井公園の土地に再築する。再築の建て前までは大工さんをお願いするが、その後の工事を自分で試みる。2人の子供ができて家族4人が住むための住まいをつくるのだが、お金もないので敷地に TENT を張って泊まり込みながらやったという。そんな暮らし方を近所の人は訝しく思っただろう。この6坪の家は池辺陽さんの立体最小限住宅そっくりだった。そのことを大学で建築を学んでいた頃気づく。伯父さんは立体最小限住宅の6坪を拠点に、その周りに小さな部屋を増やしていく。大工さんから建物の古材を届けてもらい、ある程度たまと、その材料を見つめながら構想を練り、現場作業を始めていった。

*

伯父さんは身長が140cmぐらいの小さな人だった。その小さな伯父さんにとって最小限住宅のイメージはピッタリだったのではないかと。部材を担ぐにも、工事をするにもその小

さなサイズとシンプルな構造が活かされた。幅60cmに満たない廊下がつくられ、高さ180cm未満の天井が張られ、船のハッチのような入り口がつくられる。吹き抜け2階の子ども部屋を支える梁には柱が継ぎ足される。その2階の傾斜天井の先端に、表を覗けるスリット窓が入れられる。小さな部屋がつくられるたびに電線が碍子を介して張りめぐらされ、山小屋のような感じなのだ。伯父さんの身体サイズでつくられた家は、だからとてもかわいらしい建物で、子どもになったような気持ちにさせてくれた。それと小さな空間の中におのずとドアを開けるにも、廊下を通るにも、階段を上るにもつましやかな身振りになった。身体の大きさの違いが、こんなにもユニークな家を生み出すのかと不思議に思った。そんな建物なので、伯父さんの家に遊びに行くのが楽しかった。

*

伯父さんは大工さんからもらいうけた資材を、庭の隅や軒下に大切に保存していた。だからいつも家は工事中という感じであった。古い建築部材だけではなく、建具ももらっているようだった。教会の牧師館などから出されたもので、どちらかというといかたかな白ペンキに塗られた格子窓などが多かった。伯父さんはその建具の寸法に合わせて柱や木枠を入れ、梁や無目を入れ、改築していく。持ち込まれた建具を見て古いものと入れ替えることもしばしば。犬を飼い出したときには、土台を転がしたままのところに建具を入れ、床にはコンクリートブロックを敷いて犬と一緒に暮らすための土間にした。そして犬が亡くなった後には、板張りにと臨機応変、模様替えしていく。尋ねるとまず伯父さんはそんな増改築の様子をうれしそうに話してくれた。伯父さんのセルフビルドは、大工さんの仕事を見ていて自分にもできるのではないかと始められた。どのように切るのか、どのように穴をあけるのかなどを見ていてそのコツを覚えていく。大工さんや職人さんの仕事を見るのが好きだから、近くで工事など見つけると興味津津覗きにいったそう。そして何時間でも仕事を見てしまう。そんな風にして大工の技術を学んでいった。そしてそれなり

屋根屋さんをお願いすることもあった時、その工事が気に食わないと大工さんや職人さんが帰って後、自分で修正してしまうこともあり、職人さんがやってもダメだった雨漏れを直したこともあったそうだ。伯父さんのセルフビルドの家づくりは人生最大の楽しみであったのかもしれない。だから他人に任せられないわけだったのだと思う。

＊

次の体験は、数年前にINAXギャラリーの展示企画“自給自邸”、つまりセルフビルド建築を5軒まとめて取材した時のこと。その一つは伊豆の巢雲山の山麓の別荘地帯に建てられた赤地邸。赤地さんは以前、伊豆半島の下田に住んでいた。家を建てることになり40kmほど北の宇佐美の土地に行き当たる。下田の家は漁師小屋のような家で、それなりに手を加えつつ住んでいたそうだ。手を加えないと自分たちの暮らしぶりに合わないこともあったから。そんな手を加えながら住むのが当たり前との考えから、新築に当たり、建て前ぐらいまでは大工さんに依頼し、大工さんとともに建具の取り付けや外壁の板張り、間仕切り壁の取り付けなどを進めていく。大工さんの仕上げと、素人の仕上げの差も出てきて、大工さんにはたびたび苦笑される。一人ではできないところは奥さんと作業したそうで、赤ちゃんをそばに置きながらの作業もたびたびだったらしい。いざ材木を切って取りつけてみると隙間が出たり、切る角度が違ったりするわけで、収まりが悪い。しかし赤地さんたちは、その収まりの悪さを、こんな収まりも面白いんじゃないかと楽しんでしまう。二人にとってよき思い出になるわけだから。

＊

玄関を入るとワンルームの居間。柱間を利用して六角形の出窓とベンチ。その六角形も少しいびつ。玄関との界壁は板張りの所々に隙間を開け和紙が貼られている。居間のひと隅がキッチンで、手作りのカウンターが半端に飛び出している。しかもそのカウンターは固定されていないで、使い具合で長くなったり、角度を変えたりと、ずれるようになっている。食器棚は食器のサイズに合わせながらつくられているので収まりがいい。便所と風

呂へのドアはモンドリアンの絵のような構成で、色プラスチックがはめ込まれている。風呂場の壁には木端がはめ込まれ、出っ張った部分が石鹸のせ。キッチン奥には空き瓶を塗り込めた小壁があったり、風通しのスリット。2階が寝室、子ども部屋、アトリエで、それぞれに小さな形を変えたベランダが付けられている。アトリエには敷地全体を俯瞰してみるためのガラス出窓、寝室には外を覗くはね上げ式の小窓と数多くの仕掛け。

傾斜地に建てられているので1階の下にかなりの空間がある。そこで押し入れを取り払うなどして階段を設けて下の方へ増築が進められる。さらに離れ屋がつくられ、それが母屋とつながるといふ具合に。その連なりは複雑怪奇で、自分が今どこに居るのがわからなくなるくらいだ。敷地のあちこちに材木やタイル、建築金物やガラスが置かれていた。赤地さんはそれら素材を見つめながら、どこに使ったらいいだろうかと時間をかけながら考えを熟成させているようだった。日々どこかに手が加わり変化している。完成というゴールがない。建築家によって設計された完成した建築と異なるところかもしれない。

＊

3つ目は、自分で小屋を建てたセルフビルドの体験。伯父さんのセルフビルドやルドルフスキーの本の影響がどこに残っていたのかもしれないが6坪の小屋を試みた。たまたま近所に大工さん経験者がいて、その人に手伝ってもらいながらスタート。仮クイを打ち、ネギリから始め、水盛りパイプで水平を出し、敷地から出た岩を基礎の東石に見立て置き、その上にセメントを流し込んで盛り上げた。基礎が乾くまでの間を利用して材木店に行き、ヒノキや杉の材木を購入。元大工さんが土台や束の刻みを始める。数本つくってもらった後は自分で試みた。元大工さんの仕口をスケッチしておいたが、いざ材面に曲尺を当て墨打ちするのだが、すぐにあやふやとなる。蟻継ぎなどを刻み出すとさらにおかしくなる。そうこうして土台をつくり、基礎の上に束を立て土台を落とし込む。すかさず水平器を置いた。ピタリと水平だったので驚きというか、感激した。柱の通りのねじれなども元大工さんの手にかかるとすぐさま調整され

る。その手際よさは身体で覚えたものだろう。定尺の貫板で大きな三角定規や下げ振りをつくり、鉋かけの台や作業のウマもつくってしまう。セルフビルドの醍醐味を教えてもらった。

間柱を立て、さあベニヤ板を貼ろうとしたが、そこに下地材がないと貼れないことに気づき、小割材で下地をつくったりと図面には描けない部材があちこちに必要になることも会得していった。毎日が仕事だらけで、わくわくしてくるのだった。少しぐらいのずれなど気にしなくても大丈夫だし、失敗をどう克服するのが楽しくなってきた。いわば敗者復活戦のような状況となる。そんな作業をしているうちに体重がかなり減り、胴回りが細くなり出した。どこか身体が悪いのかと心配したが、考えてみれば、毎日、4mの材木相手に手鉋をかけ、刻みをし、立ったり座ったり忙しい。そのすべての作業が腰を使う。痩せた理由はセルフビルドだったのだ。

＊

数年してこの小屋に接して3坪の小屋を建て増した。保存しておいた材木を使い果たそうと考え、それらの材料でできることを試みた。だから柱や梁、根太のサイズもばらばら。壁、天井の断熱材には梱包用のプチプチや古いブルーシート、古新聞などを活用する。使わなくなった足場板で本棚もつくった。いずれも現場で思い浮かんだことだった。完成後、小屋との壁を抜いた。間柱と間柱の45cmの隙間が空いて通り抜けられるようになった。トンネルの貫通工事ではないけれど、うれしくなった。

身の回りにある、ありあわせのものでもものをつくり出すことを“ブリコラージュ”（クロード・レヴィ・ストロース）というが、セルフビルド建築はまさしく“ブリコラージュ”と言えるのかもしれない。ありあわせの思考ゆえ、素材の組み合わせひとつでもユニークだし、その工法も素人ゆえに変化に富んでいる。その結果、つくられた建物は多彩な表情を見せてくれるし、多様な暮らし方の可能性を編み出してくれる。それは、ルドルフスキーのいう専門技術を学ばなかった人たちによる“建物家なしの建築”がもたらす魅力に重なる。

（おおたけ まこと）



各論1
3

田舎で元気になろう!

つばさプロジェクト代表

越道正芳

1972年生まれ。1995年立命館大学経営学部卒業後、OA機器メーカーで営業マン。コピー機やパソコンのセールス。2000～2002年、地元の小さな旅行代理店に転職し、独立にむけて修業。2002年、田舎専門の旅行代理店「つばさツーリスト」を起業。2007年、屋号を「つばさプロジェクト」に変え、ツアー以外の地域活性化ビジネスにも取り組み始める。農林水産業と観光をテーマにした紙芝居や映画づくりなど。

●人と人のふれあいをテーマとした田舎旅を企画する個人商店「つばさプロジェクト」。観光名所を避け、大型バスの通れない小さな田舎道を進み、過疎化の進む田舎の集落で、都会の若い家族と村の人たちとの交流イベントを年間100回以上企画している。

●URL <http://www.e-toko.com>

■格安な土地、しかし……

1坪500円。これは私たちが関わっている田舎の地価だ。正直いって、破格である。コーヒー一杯程度の金額で土地が買えてしまう。一瞬、買おうかな、と思ってしまう。

しかし買ってしまったら、おそらく後悔するだろう。買うのは簡単だが、それからが大変なのである。仮に家を建てたらどうなるか。涼しい山間にあるので、夏は最高だ。水は清らかで、様々な虫が飛びかい、豊かな自然に包まれ、避暑にはもってこい。私が代表を務めている「つばさプロジェクト」でも、連日魚とりやカブトムシ探し、川遊びのツアーを開催している。



毎年8月、鮎のひっかけ体験。京都市左京区久多にて

しかし短い夏が過ぎると……。あっという間に涼しくなり、厳しい冬がやってくるのだ。いつもお世話になっている京都市左京区久多という集落がある。昔話の絵本に出てくるような、かやぶき屋根の家が立ち並ぶ地域だ。

気温が京都市内と5度以上違い、日本海側気候になるため、なんと積雪2mの豪雪地域なのだ。毎日、屋根の雪かきが待っている。私も手伝うことがあるが、屋根から落ちそうになってヒヤリとしたことがある。まさに命がけの作業だ。

しかし雪かきをさぼってしまうと、家がた



かやぶき屋根がある風景は、まるで昔話の世界

ぶれてしまう。何人乗っても大丈夫!のコーンで知られるある物置は、雪の重みでつぶれてしまったという“実績”がある。

大変なのは雪かきだけでなく。春に木々が芽を出すころになると、今度は草刈りが必要になる。ちょっとした広さの土地でも、少し油断したとたんにすくすくと下草が生い茂ってしまうのだ。太陽の恵みは甚大である。

田舎の家や土地は手入れをし続けないと壊れてしまうばかりでなく、近所の迷惑にもなってしまう。そこに住んでいても多くの労力を要するので、別荘気分で田舎の家や土地を管理することは、非常に難しい。

豊かな自然環境は、人間の生活にとっては苛酷な環境でもあるということだ。仕事や学校、病院があり、雪かきの必要もない平地へと移り住む人が多く、日本の中山間地域での過疎化が進んでいるのは、周知のごとくである。

■田舎への高まる関心

一方で、環境問題や食、農への関心から、かつてなく田舎への注目が高まっている時代でもある。私がつばさプロジェクトの前身である「田舎専門の旅行代理店」を起業したのは、2002年4月のことである。そのころの旅行先といえばもっぱら有名観光地であり、無名の村に行くことなんてほとんどなかったものだ。1990年代から、地方や過疎と呼ばれている場所での地域おこしが活性化してきたように思う。

去年は猛暑で、野菜が高騰したのは記憶に新しいが、そのため農産物の直売所のブームが起こった。品質のよい新鮮な野菜を求めてたくさんの人が詰め掛け、新しく直売所を始めた農家も多かった。農業がブーム、との報道も多く見受けられた。

農家民宿の取り組みも盛り上がっている。私がお世話になっている奈良県宇陀市の「B&Bにしみね」という農家民宿では、段々畑に囲まれたのどかな丘に建つ自宅の日本家屋を、宿泊者へ提供している。ツアーでは、田植え体験、味噌作り体験、餅つきなど、農家の生活そのものを味わえる内容のものを企画させてもらっている。

修学旅行生や外国人観光客を村で丸と



京都市左京区久多でのイカダ遊びツアー



B&Bにしみねの稲刈り体験ツアー



農家の縁側で遊ぶ子どもたち



B&Bにしみねでツアーの一こま。右端が西峯夫妻

って受け入れ、農家に滞在して観光するという成功事例も各地で見られるようになった。木造家屋で、海や山や自然の中で暮らす昔ながらの農漁村の暮らしとてなしの心が、訪れる人たちに感動を与えているのだ。

田舎には何も無い、仕事もないところによく来てくれた、住んでいる人はそう謙遜しておっしゃることが多い。しかし、私たちからしたら、とんでもない。自然の中で共存しながら、当たり前のように日常を営んでいる生活が、都会人にとっては感動的なのである。たくましく、力強く生活していることだけで、尊敬してしまう。村を守る、そんな人たちがいることが、日本の支えだと思う。

私は田舎の良さを紹介する仕事をしているが、田舎暮らしをしているわけではない、大阪生まれの私に、田舎暮らしに耐えられるかどうかと考えることがある。いろいろな地域に出向くのに便の良い場所のほうがいいということもあり、現在はツアーのときだけ訪れるという形になっている。

田舎で生まれ育ち、今も現役でやっている人たちの元気さには、頭が下がる一方だ。集落にお医者さんなどいないので、自分の体に頼るしかない。

一緒に山仕事をすることがある80代の男性は、勢いよくチェーンソーで丸太をなぎ倒したり、斧で薪割りをしたりする。私も体力には自信があるほうだが、彼らの働きぶりを見ていると、ほれぼれしてしまう。

Sさんは、50年前の出産の前日まで畑仕事をしていて、陣痛が始まってから最寄りの産婆さんのところまで3時間以上かかって山道を下りたという。

今でも、田舎の生徒たちは学校に行くのも片道数キロの道のりである。生活しているだけで、トレーニングになるのだ。田舎に暮らす老人たちとともにいると、鍛え方が違うなあ、と痛感する。



元気な老人

■田舎パワーで元気になろう！

そんな元気な方々のお世話になりつつ、自然体験ツアーを開催しているが、参加してくれた都会の子供たちは、顔を輝かせて帰るのだ。自然の中では野性に戻るのか、普段はおとなしい子も積もった雪の上では犬のように駆け回り、清流の川遊びではイカダを奪い合って争う。夕方になっても帰りたくないよ、まだ遊んでいたいよと泣く子もいた。

都会での暮らしは、大人にとっては都合がいい。だけれど子供にとっては、家や車だけで空き地は減り、走り回る場所も限られている。田舎の自然ほど、好奇心を満足させてくれる舞台はないだろう。ぜんそくやアレルギーなど、都会型の疾患に悩む子どもは増えている。アトピーなどのアレルギー性疾患は、田舎に移住すれば軽快する場合がある。都会での便利な暮らしには、それだけの代償もある。

今日は、東日本大震災という災害に見舞われている。原発問題にも発展し、今後の生活へ影響があることは間違いない。

スイッチをつければエアコンが入る、キュキュッと栓をひねればきれいで安全な水が出てくる、という当たり前に思っていたことが、なんと大切なことなのか、と我が国の全員が気づいただろう。ミネラルウォーターの品薄状態が執筆現在では続いている。資源は限りがあり、守っていかねばならないということ、私は強く思った。

都会において、生活の安全が脅かされたとき、田舎に元気に暮らしている人たちがいるということは、励みになるだろう。田舎には、遊びに行かせてもらえる居場所がある、そう思うだけでも、安心できる気がする。ほとんどの人は、仕事も学校もある場所を離れ、そう簡単に暮らしを変えることは難しいだろうが、いざというときに頼れる地域があるという、田舎は精神的な支えにもなってくれるだろう。

私は体験ツアーを通じて、こうした田舎を元気にしていきたいと思うとともに、田舎での交流を通じ、たくさんの人に元気になってもらいたいのだ。

(こしみち まさよし)



もと社員寮だった客室



倉庫をドミトリーとした

各論1
4

コンバージョン + 交流の場

～HOSTEL 64 Osaka～

アートアンドクラフト代表

中谷ノボル



建築家。京都工芸繊維大学造形学部建築学科卒業。不動産営業、建築設計、現場監督などに従事したのち、1994年に「アートアンドクラフト」を設立。以来、「均質化されていない あたらしい都市居住のスタイル」をテーマに活動する。自称「住まいの求道者」。
自らが倉庫やキャンピングカーをリノベーションしての暮らしを実践してきた。
2010年、古ビルをコンバージョンして、「HOSTEL 64 Osaka」を開業。ただ今、その宿での暮らしを楽しんでいる。

●Website <http://www.a-crafts.co.jp>

●Twitter ID @nakatani_noboru

●著書

「STOCK×RENOVATION」(2003年) 自費出版・在庫なし／「大阪のひきだし」共著・鹿島出版会(2006年)／「スマイ主義」きんとうん出版(2006年)／「みんなのリノベーション」学芸出版社(2007年)

■ホステルってなに？

まずは「ホステル」と「ホテル」の違いを共有しておかなければならない。ホテルの客室は「個室」が基本。そして客室内にバスやトイレがある。一方、ホステルには個室もあるが、「相部屋」(ドミトリー)もある。そしてバスやトイレは部屋内ではなく「共用」だ。ホテルがプライバシーが確保された「ワンルームマンション」だとするならば、ホステルはリビングルームなどを共用する「シェアハウス」だと言えるのかもしれない。

もともと、ホステルは欧州を中心に広く普及していた宿泊のスタイル。長く旅する者にとって、特に物価高の都市部では、安宿であるホステルは重宝されてきた歴史がある。ただし「部屋にバストイレがないが、そのぶん宿泊料が安い」という低料金な点にだけ焦点が当てられてきたように思う。それがかつてのホステルの認識だ。そのホステルがいつ頃に変化したのかを語るには、同時にブティックホテルについても話さなければならない。'90年代、ロンドンなど欧州の各都市でブティックホテル(デザインホテル)が開業された。「少々高くてもおしゃれなホテルに泊まりたい」という高収入のクリエイティブ層に支持されたデザインコンシャスなホテルである。そのスタイルは瞬く間に世界へと広がってゆく。ロンドン、東京、ムンバイ。もうここがどこの街なのか分からないほど、同様のデザインを施されたブティックホテルが林立した。

それに影響されてなのか、ブティックホテルを好むユーザーより少し若い人たちが、これまでのホステルよりもデザインを意識した宿を遅れて作り出した。それらを私は「デザインホステル」と呼んでいるが、まだカテゴライズされていないのかもしれない。低料金だけを売りにしてきたかつてのホステルとは一線を画し、共用部のロビーをまるでおしゃれな住宅のリビングルームのようにデザインし、これまでより広さも確保する。そこでは宿泊のゲストたちが、まるで誰かの家に集まったかのように過ごしている。本を読むもよし、PCでメールやSkypeをするもよし。出会った旅人同士で盛り上がることも。ホテ

ルのように自分の部屋に籠るのではなく、好んでロビー(リビングルーム)に出てくるのが滞在中のスタイルだ。これらデザインホステルの客層は、バックパックを背負っているものの、おしゃれにも気を使い、スマートフォンなど最新のデバイスを駆使する20-30代。これまでのホステル層より少しだけ年齢が高いと考える。そして、2008年のリーマンショックでブティックホテルが一気に衰退し、デザインホステルが一躍注目を浴びるようになったと認識している。

実際、自身の旅においても、ホステルに滞在する方が格段に楽しいと感じる。そんなホステルを大阪にもつくりたい。それがこの宿を始めようとした一番の理由である。

■リノベーション前提のストック探し

これまで、都市の建築ストックを数多くリノベーションしてきた。ホステルをつくる際にもリノベーションがいいだろうと当然のように考えた。というのも、低料金な宿なので新築の建物では資金回収に時間がかかり過ぎる。また、これまでにない事業モデルへの挑戦でもあり、失敗して撤退となったときに新築ではリスクが大き過ぎる。経営的な側面以外にも、高度成長期に建てられたビルを、新しい産業や需要を生み出す別の用途に転用する可能性をずっと探っていた。本計画を一建築ストックの再生にとどまらず、都市再生のモデルケースとして考えたい。その点からも、リノベーションおよびコンバージョンで計画を進めようとした。

さあホステルをつくろう。まずはそれに適したストックを探すところから始まる。規模、場所、賃料。エレベーターがない4階建て。前面道路が寂しい。店舗として不利な条件もホステルにとっては最悪のものではない。それより賃料の安さを重視して探した。300もの物件情報から最終的に選んだ物件は、そんな築40数年のどこにでもありそうな古ビルであった。富山県の工具メーカーが大阪に進出しようとして建てたビル。1階は倉庫、2階が事務室。そして3-4階が社員寮。トイレの洗面台や和室の造作など、建築当時のオリジナルからほとんど改修されていないことも気に入った点のひとつだった。

■設計から開業まで

事務所ビルを宿に転用する際に必要な手続きは、「建築確認」(建築基準法第6条1項)と「営業許可」(旅館業法および大阪市の条例)である。順序とすれば、まず大阪市保健所と協議して、旅館業の営業許可に値する計画だということの「通知書」を受け、それを添付して建築確認へと進む。確認後にリノベーション工事に着手、そして改修工事を完了し、ベッドや寝具など什器備品も整えた上で、保健所の検査を受けて旅館業の「営業許可」が出る。旅館業法の営業種別は「ホテル」「旅館」「簡易宿所」と種類があり、当ホステルは旅館としての営業許可を受けている。なお旅館業法上のホテルと旅館の区別や、和室と洋室の区別などは時代錯誤も甚だしく、多様な宿の誕生を邪魔している。

意匠的なことについても触れておこう。大阪に建つ、主に外国人向けの宿。西洋のカッコよさを真似たデザインでは意味がない。かといって「和」を必要以上に押し出すのもわざとらしい。もし、開国時にあのような盲目的で急激な近代化を選択せず、もっと緩やかに欧米の文化を私たちが受け入れていたとしたら。そのような感覚を念頭にデザインした。結果、違う文化圏からやってくるゲストたちは、ちょうど「いい加減」に日本のデザインだと感じているようだ。

開業までに準備すべきことは、他にも山ほどある。ウェブサイトやブログ、宿のロゴマークやショップカード、予約サイトへの登録、スタッフの採用と研修。なんとか予定していた開業日に間に合わせることができた。

■旅人と繋がる

自分たちの力だけで予約が埋まるわけもないので、外部の予約サイトでも部屋を販売する。そのひとつ、「HOSTELWORLD」からの集客は今も多い。客層は外国人客が7割以上。その7割ほどが欧米から。年齢は20-30代が中心。徐々にシンガポールなどアジア系のゲストや日本人客も増えてきた。大阪には関西国際空港があるため世界中の国々からやってくるが、上海や釜山を経由してフェリーで来る長期旅行者も多い。



ロビーでは旅人も地元民も

当館での滞在は1日だけの人もあれば、10日以上の人もある。平均すれば3日ほどであろうか。オーナーとして特に役割があったわけでもないのだが、何が起るかわからず不安だったので、開業後半年間はずっと住み込んでいた。そうやって宿に暮らしていると、ゲストと話す機会が生まれる。気が合えば酒を飲んで深夜まで盛り上がることもある。デザインコンシャスな宿なので、やはりクリエイティブな職業に就いているゲストが多い。グラフィックデザイナーやファッション、音楽関係者。そして建築設計事務所に勤めるという人も多い。

楽しいのは、雑誌やテレビの記事からではなく、タイムラグなしに人々の声が聞けること。本国で何が流行っていて、日本の何に興味を示し、そして何を思うか。海外に行かずとも、おカネを払っていろいろな人が会いに来てくれるかのような感覚になる。例えて言うなら、シェアハウスに住んでいるが、シェアする相手がどんどん入れ替わってゆく状態。また、ゲストたちは近隣のレストランやBARにも出かけるので、徐々にご近所さんとの交流も増えてくる。これを機に英語メニューを作ったり、英会話を習い出した店主もいる。近隣の方の中にも、ロビー内のカフェバーに来店いただき、宿泊者たちと友達になったり、京都観光へ同行する人までいる。旅人とすれば、そんな大阪の人たちとの思い出は、一生の宝物になることだろう。

■宿と住まいの境界線

開業後1年が経過した今、「旅行者」と「居住者」の違いは何なのだろうと考えるようになった。いったい何ヵ月大阪に滞在すれば住民と呼ばれるようになるのか。はたしてその

境界はどこにあるのだろう。期間ではなく、働いているかそうでないことが重要なのか。

本来、都市というものは、短期滞在者も受け入れてきたと認識している。しかし高度成長期以後の大阪は、定住者の街になり、同時にその勢いを失ったように思えてならない。今もヨーロッパやアジアの都市を訪れると、宿でもあり住居でもあるホステルやコンドミニアム、そして家具付きのサービスアパートメントなど、宿泊と居住の場が境界線なく用意されている。「建築基準法なのか旅館業法なのか」「宅地建物取引業なのか観光業なのか」宿と住まいを法律や役所の管轄で分類しようとするのが無意味に思えてならない。また、それが都市の競争力を削いでいるように思える。

今朝まさにチェックアウトした28歳の女性客について話したい。彼女は日本のファッションが好きで大阪を訪れ、2、3日の予定で当館に滞在した。たまたまロビーで出会った大阪の女子たちと仲良くなり、宿泊をどんどん延長する。そして10日目には、「大阪に暮らしたい」と言い出した。出会った知人を介し住込み先を見つけ、先ほど宿をあとにした。こんな経緯で、「旅人が住民に変化する」こともある。

これらの事例はもはや特別のことではない。IT技術がますます発達することで、世界を移動しながら支障なく仕事をこなす人も増えてくるだろう。また、家族の形態がますます多様化することで、今は家族と母国で暮らすのが半年後には単身で別の国へ移る人なども増加するだろう。どこに暮らすか。誰と暮らすか。近代のルールが、今世紀に入って急激に変わってきていると感じるし、自分自身の居場所もどんどん自由になってきている。数年後、世界は国籍や納税についても、その概念を大きく変える必要に迫られるかもしれない。フェイスブックなどインターネットを利用することで、世界中の個人と個人が簡単に「繋がる」。少なくとも私の周辺では、人々の居場所と生活空間が劇的に変化しつつあり、またそれを楽しんでいる。

(なかたに のぼる)

●ホステル ロクヨン オオサカ
<http://www.hostel64.com/>

東日本大震災の被災地を訪ねて

名古屋工業大学大学院工学研究科准教授

北川啓介

北川啓介／前掲

広大な砂礫が続く平原に、辛うじて確認できる方眼状に走る幅員6mの道路と街区。見渡す限りの数百mおきにたたずむ、窓や扉を失った鉄筋コンクリート造の建築物の軀体。あたり一面、どこが水路であったのか確認することができない中に残る破壊された水門。海に近くなればなるほど道路の痕跡もなくなり、残る建物も小学校の大きな校舎のみ。

山形空港から石巻市へ向かう途中、山形道路から仙台東部道路へのカーブで、地形と道路と建築のバランスが釣り合わない光景が、不意に車窓一面に広がる。仙台東部道路の一線を境にして、である。

2011年3月11日14時46分、冬の峠を越え、例年と同じように年度末を過ごす人も多い中、また、来る新年度に向けて胸を躍らせる人も多い中、日本国内での記録史上、最大の震災が起きてしまった。

名古屋の研究室で、海外留学を志望する学部生の相談にのっていた私は、数分間も続いた大きな横揺れに、16年前の阪神大震災の時に同じく名古屋で経験した約数十秒の大きな横揺れを想起した。今日はその揺れが全く衰えることなく数分間も続く。日本列島の周囲で未曾有の巨大地震が発生したのか、ひょっとすると、地球規模で大きな隕石が衝突するなどの天変地異が起きたのかも、と直感した。

あの瞬間を境に、東北と関東の太平洋側を中心にして、いつもどおりの日常が、非日常ばかりの日常へと一変してしまった。

当時、複数の新聞社や雑誌社から、居住空間としてのマンガ喫茶についての原稿依頼を受けていた私は、マンガ喫茶やカラオケボックスやマクドナルド店舗を生活の拠点とする様々な人々についての現地取材を進めていた。そこには、一般的に言う「家」での生活の概念とは異なる、仮の「やど」としての生活の概念が潜んでいると思いきや、そうとも限らない光景が広がっていた。ベンチシートやマッサージチェアやフラットシートといった多種多様なブースから選ぶことのできるマンガ喫茶、大人数で思う存分楽しむことのできる上に大人数ゆえ一人当たりが安価となるカラオケボックスなど、若いも若きも、男性も女性も、早朝から深夜まで、その日の彼女ららの一日の行動に合わせて、あくまで身

をよせる日常の生活空間として最大限に使いこなしていたのである。

人間も動物ゆえ、やはり、どのような空間でも生活していく上での人間の適用能力が優れているのか、もしくは、日常の家での生活と空間の既成概念に頼りすぎている自分がただけだったのか、日常と非日常の境目を位置づけることが難しくなっている。

では、例えば、小中学校や高等学校の教室や体育館、公民館の会議室やホール、図書館、寺の本堂、パチンコホールといった、今回の大震災での被災者の避難所での生活と空間は、今、どうなっているのか、そして、いつまで続くか自体が不安でいっぱいの中、いかに、日常的な生活の営みを空間的に取り戻していこうとしているのか、などを調査すべく、宮城県石巻市の役所、教育委員会、各避難所の担当者、そして、多くの避難民の皆様にご承諾をいただいた上で、避難所の空間を実測させていただくとともに、避難生活にまつわるお話を伺わせていただいた。

2011年4月15日、中部国際空港から山形空港へ移動し、軽自動車をレンタルし、早速、宮城県石巻市役所へ向かった。担当部署の方々へ取材の意向をお伝えして、内諾をいただけた避難所から調査を進めた。まずは、石巻市が以前から避難所に指定していたこともあって、被災地の町内ごと避難してきた人が多い公民館のホールと会議室と和室、次に、石巻市が避難所とは指定していなかったものの、避難所のスペース不足もあり教育委員会が自発的に避難所として開放した図書館、最後に、物資の輸送の拠点となりやすい地元の小中学校の体育館の順番で、夕方から夜まで、朝日新聞社の日丸美彦さん、私の研究室の博士後期課程1年の米澤隆さんと共同して、効率よく調査を進めた。

そこでは、もともとのビルディングタイプとして、就寝時も身をよせる生活空間としては設計されていなかったにもかかわらず、避難所のモジュールなどの空間の条件、避難民の人と人のコミュニティの様子、数日間は何もなかったという救援物資の在庫など、様々な要件の中で、一生懸命に、そして、適材適所に勘案する人々の生きる力があつた。

写真：北川啓介、日丸美彦、米澤隆



津波により破壊した水門 (仙台市)



1階の壁がほとんどなくなった体育館 (仙台市)



避難所としての会議室 (石巻市)



道路の痕跡もない小学校界限 (仙台市)



多く残るピロティ型の建築物 (石巻市)



避難所としての図書館 (石巻市)



屋上で周辺住民が助かった校舎 (仙台市)



掲示に溢れる役所の入り口 (石巻市)



掲示に溢れる避難所の入り口 (石巻市)



1階の教室の天井に残る痕跡 (仙台市)



自衛隊による避難所前の仮設浴場 (石巻市)



次々と届く救援物資 (石巻市)



一時的避難所となった上階の教室 (仙台市)



石原軍団による炊き出し (石巻市)



避難所としての和室 (石巻市)



木材や金属が突き抜ける体育館 (仙台市)



避難所としての公民館ホール (石巻市)



避難所としての体育館 (石巻市)

日常を失った生活空間 公民館ホール ～東日本大震災における 身の置きどころの たち現れかた～

北川啓介＋米澤隆

北川啓介／前掲

米澤隆／1982年京都府生まれ。
2007年国立大学法人名古屋工業大学工学部卒業。現在、同大学大学院工学研究科博士後期課程。HAP+associates主宰。
主な作品に、2006年『S邸-生きている建築』（中部インテリアプランナー協会学生賞）、2008年『ディスプレイ壁の中に住み込む家』、2010年『のれん』（Under 30 Architects Exhibition招待出展）、2011年『オモヤとハナレ』（SUSアルミ建築30歳以下の建築家による指名設計競技優秀賞）、2011年『公文式という建築』（SDRReview2008入選）など。

宮城県石巻市内の高台に、公民館がある。大きな吹き抜けの空間の前面に一段上がった舞台があり、その手前に広いがらんだ空間のスペースがある。二階には数列の客席が備え付けられ、吹き抜けを介して一階とつながり、一体空間を形成している。この広い吹き抜けのホールに普段は椅子が何百席も並べられ、著名人を迎え講演会が開かれていたのだろう。

2011年3月11日を境にしてこの空間は様変わりした。もともと指定避難所を選定されていたこの公民館に、地震と津波の被害から逃れた人々が身を寄せつつ生活をしている。

客席を配置することを想定していた広い床には、約700mm幅の動線が中央と左右に3つ確保され、それらを除いてブルーシートがほぼ一面に敷き詰められ、四隅はガムテープでしっかりと止められている。その上にカーペット、そしてひとり一畳の畳が敷かれている。限られた空間が効率的に区画割りされ、無駄なく床面積が確保されている様子がうかがえる。畳の上には布団が敷かれ、横になっている人、あぐらをかいて新聞を読んでいる人、数人が集まりおしゃべりしている人々、それぞれ皆、思い思いに過ごしている。ブルーシートは畳から廊下側に向かって少しはみ出しており、そこには新聞紙の上に載せられた靴、ダンボールに詰め込まれた生活用品などが置かれており、畳の上が内部空間だとするとブルーシートが縁側のような役割を果たしている。ブルーシートと畳により整然と区画割りがなされたひとり一畳半のスペースが、連鎖をなして生活空間を構成している。

舞台に目を移してみると、そこにも客席空間と同様、カーペットが敷かれ、その上にひとり一畳の畳と布団が敷かれている。このホールとしての建築において象徴とも言える舞台上に、特段ホールであることを意図されることなく、少しでも多くの床を確保しようと畳と布団が敷かれていることは、かえってここでたち現れている空間がいかに効率的に床を求めているかを象徴しているようで、その切迫感がうかがえる。

舞台とそこへ上がる両脇の階段で囲まれたスペースにはテーブルが3つ設置され、ポットやお菓子などが並べられている。年配の女性が集まり、井戸端会議が開かれている。階段を挟んで壁との間の囲まれたスペースにも

椅子が数脚並べられており、おじさんたちが談笑している。広いホールにおいて希少な囲まれたスペースをうまく活用している。

舞台に向かって左手の、入り口のある壁に沿って長机が並べられ、その上や下に生活用品がびっしりと敷き詰められている。その中、ひときわ目立つ中央の机に、断続的に震災のニュースを流す大型の液晶テレビが設置されている。よく見ると、横になっている人も、あぐらをかいている人も、新聞を読んでいる人も、ブルーシートと畳による区画割りで生活している人々の姿勢が、皆、この液晶テレビに向いていることに気付く。日中必要のない掛け布団と毛布を折りたたみ、それを背にしてもたれかかり、リクライニングベッドのように上体をおこしつつ、テレビに向かう。大空間における象徴的な存在として、整然と並んだ生活スペースに一体感をもたせている。震災の状況下において、いかに情報が必要とされているかということがうかがえる。

吹き抜けでつながった二階席は、各家庭の生活用品、もしくは、避難民全員が共有する生活用品が置かれた収納スペースとなっており、ひっそりとした落ち着いた空間となっている。その客席には、まだよちよち歩きの小さな女の子を連れてご夫妻がいらっしや、ふとひとりになりたいときはここに来るのだとおっしゃっていた。集団生活の中でほっと一息つける場になっている。

細かいところに目を凝らしてみると、随所に空間を活用する工夫がなされていることに気付かされる。手すりが物干しとして使われ、壁際にロープを張り、洋服やタオルが掛けられている。二階席に大きな扇風機が設置されており、空気の循環がなされている。

普段は講演会などに使われている公民館のホールが、震災後、実に効率的に計画され区画割りをされ機能的な生活の場として変貌している。それは徹底的にこの場を使いこなそうとした生活の知恵のたまものなのである。

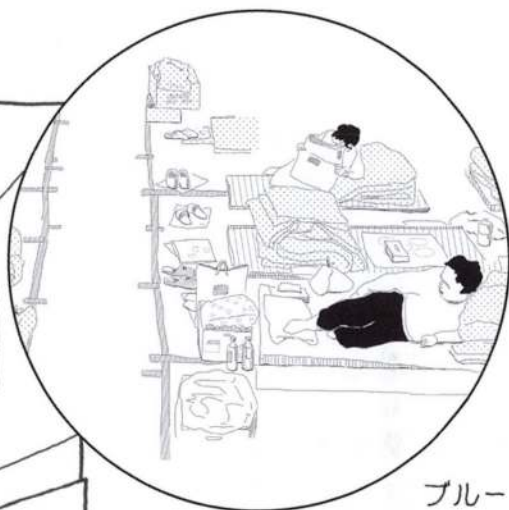
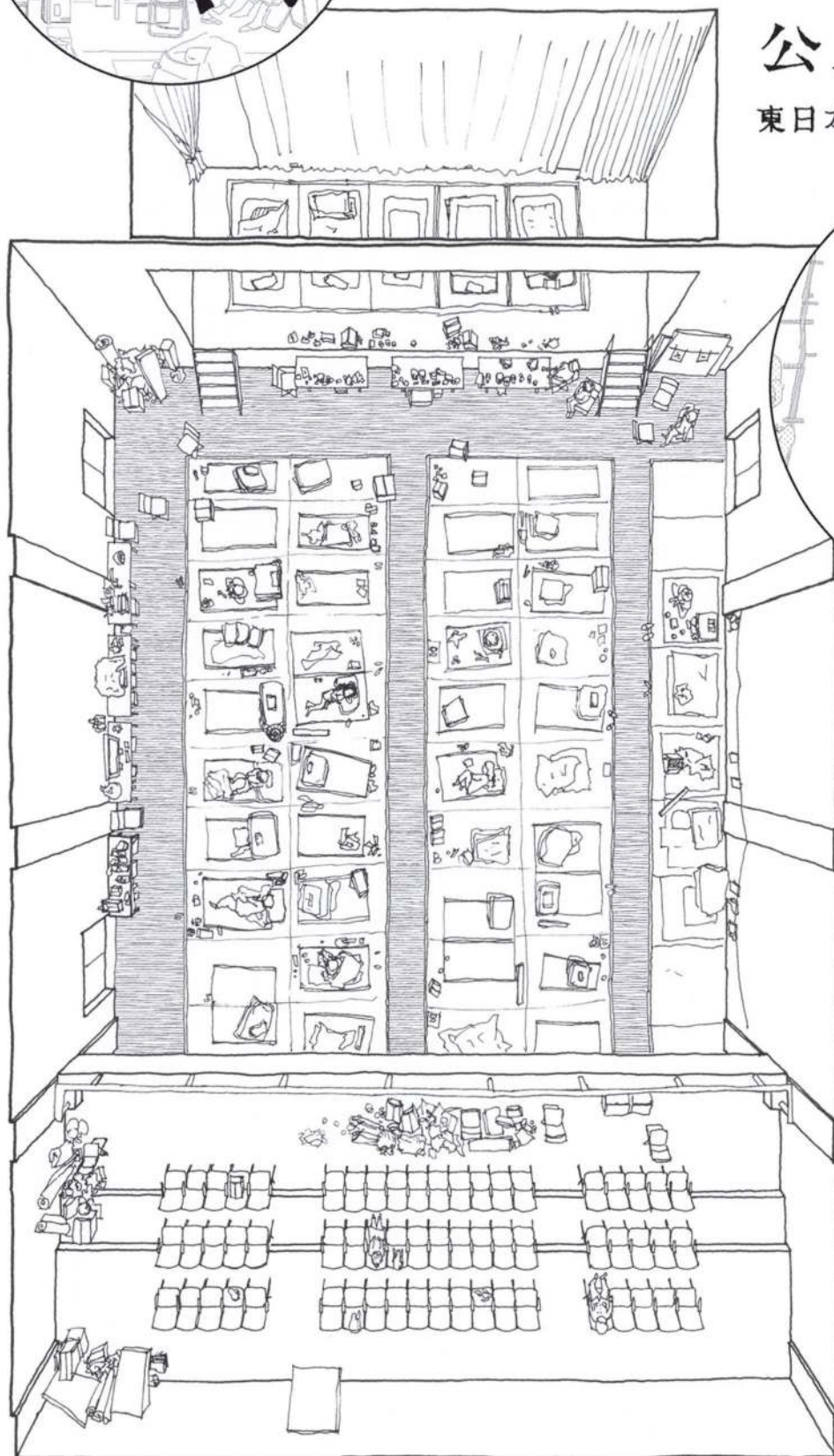
生活者数：57人
一階の延べ床面積：224㎡
二階の延べ床面積：96㎡
一階の専有延べ面積：137㎡
一階の共有延べ面積：87㎡
一階のひとりあたりの占有面積：2.40㎡/人



大きな吹き抜けの空間の前面に一段上がった舞台があり、その手前に広いがらんどうのスペースがある。二階には数列の客席が備え付けられ、吹き抜けを介して一階とつながり、一体空間を形成している。二百平米ほどの床面積と百平米ほどの観客席を効率的に計画し、生活と収蔵によって大きく区画に分けることで、機能的な生活の場として変貌させている。

公民館ホール

東日本大震災における避難所



ブルー

シートと畳による区画割りの上で、横になっている人も、あぐらをかいている人も、新聞を読んでいる人も、この大きな液晶テレビに向いている。日中必要のない掛け布団と毛布を折りたたみ、それを背にしてもたれかかり、リクライニングベッドのように上体をおこしつつ、この大空間の象徴的な存在であるテレビに面する人も多い。震災の状況下において、如何に情報が必要とされているかということがうかがえる。

文 北川啓介

米澤隆

絵 荒木省吾

坂本睦

日常を失った生活空間

会議室

～東日本大震災における 身の置きどころの たち現れかた～

北川啓介＋米澤隆

階段を上り、廊下から前後にある入り口を通してその中に入ると会議室がある。前面にはホワイトボードが設置されており、それに向かって左手の壁には柱スパンいっぱい大きな開口が設けられている。反対側はふたつの入り口を残して一面が壁である。日ごろはここに会議机が並べられ、町内会の会合などが行われているのだろう。震災後、同じ町の人々が難を逃れ、この空間で肩を寄せ合い生活しており、会議室の様子はいつもの町内の空間とは様変わりしている。

会議室の中央前部に会議机がロの字状に並べられ、その中心にはやかんを載せたストーブが置かれ、空間の芯をなしている。机の上にはポット、コーヒーセット、ペットボトルなどが置かれている。このロの字状の机に向かって、お茶を飲む人々、新聞を読んでいる人、談笑している人々など、それぞれの辺に二、三人くらいが集まり、ダイニングリビングの様相を呈している。ロの字状の中にも人がいて、お話を伺うと、「何のこれしき！絶対に立ち上がってみせます。負けてたまるか！！」と、予想もしなかったとても心強い言葉を伺うことができた。この場においてひととき存在感を持つ町の中心人物がロの字状の中にいるのは、象徴的である。

ふと笑い声が聞こえ、そちらに目を向けてみると、窓際に椅子が数脚、円を描くかたちで並んでおり、ぼかぼかと陽気の差し込む中、ご婦人方が楽しそうに談笑している。

廊下側の壁沿いにはブルーシートが敷かれその上に毛布、座布団などが敷かれ、ひとり半畳くらいのスペースにダンボール箱に入った生活用品に囲まれた私的空間が並んでいる。少し狭いのではないかと思われたが、「これくらいがちょうどいいんです」という言葉に、この町の住人の空間観を垣間見た。広いスペースに自分の空間を確保するのではなく、空間を共有することで他の生活者との連帯を大切にされていることを思い知る。

会議室後方にはブルーシートが広く敷かれており、壁際には座布団や毛布が高く詰まれ、それにもたれかかり本を読んでいる人、夫婦で会話している人々などがおり、収納も兼ねた自由な場となっている。

会議室前面にはホワイトボードを中心に左

側には大きな液晶テレビが据えられ、右側にはたくさんの貼り紙がされている。ホワイトボードには重要事項などが書き込まれており、情報の共有の場として会議室の前面が機能している様子がうかがえる。

日中はこのようなかたちで生活が営まれているのだが、夜になるとその様相が一変するという。生活している人の数に対して、限られた広さの空間である。寝床を確保するために、日中、中央に陣取っていたロの字状に並べられた会議机が片付けられ、床一面にブルーシートとダンボールが広げられ、その上に毛布が敷き詰められる。みんなでひと続きの大きな毛布の上で眠る。おじいちゃんも、お母さんも、友達も、近所のおじさんも、町長さんも年齢や性別や地位や血縁などの分け隔てなくみんなで一緒にひと続きの毛布にくるまり眠る。なんとも大胆でいさぎよい。日中、食事をする場所、団欒をする場所、個人的な場所、情報収集をする場所といった規律を有した80㎡足らずの空間は、夜になると空間の規律も、人々の属性さえも、全てフラットになるのである。

ここで約1ヵ月の間、生活されている方々にお話を伺ってみると、どの人も、「少し狭いかもしないけれども、これくらいの大きさでちょうどいい」「パーティションなどなく、一体になった空間がいい」「この町内においてプライバシーの侵害などという発想はない」「手を取り合っているこの避難所から再び家に帰宅するとき、家に戻ったときの少人数の孤独が、今は不安と心配で仕方がない」などと、口々におっしゃっていたことがとても印象的であった。

日ごろ町内の会合などに使われている会議室は、リビング、ダイニング、私的なスペース、収納スペースを備えた大きな家のような空間になり、日中と夜間でその表情をガラッと変える時間感覚を伴ったひとつの大家族の生活の場へと変貌を遂げた。

生活者数：35人

延べ床面積：78㎡

昼の専有面積：19㎡

昼の共有面積：59㎡

夜の専有面積：73㎡

夜の共有面積：5㎡

昼のひとりあたりの専有面積：0.54㎡/人

夜のひとりあたりの専有面積：2.09㎡/人

会議室

東日本大震災における避難所

階段を上り、廊下から前後にある入り口を通してその中に入ると会議室がある。同じ町の人々が難を逃れこの空間で肩を寄せ合い生活する。前面には大きなホワイトボードが設置され、外部に向けては柱スパンいっぱい大きな開口が設けられている。日の射す昼と明かりを消した夜とで、空間の共有方法が大きく様変わりする。



会議室

の中央前部

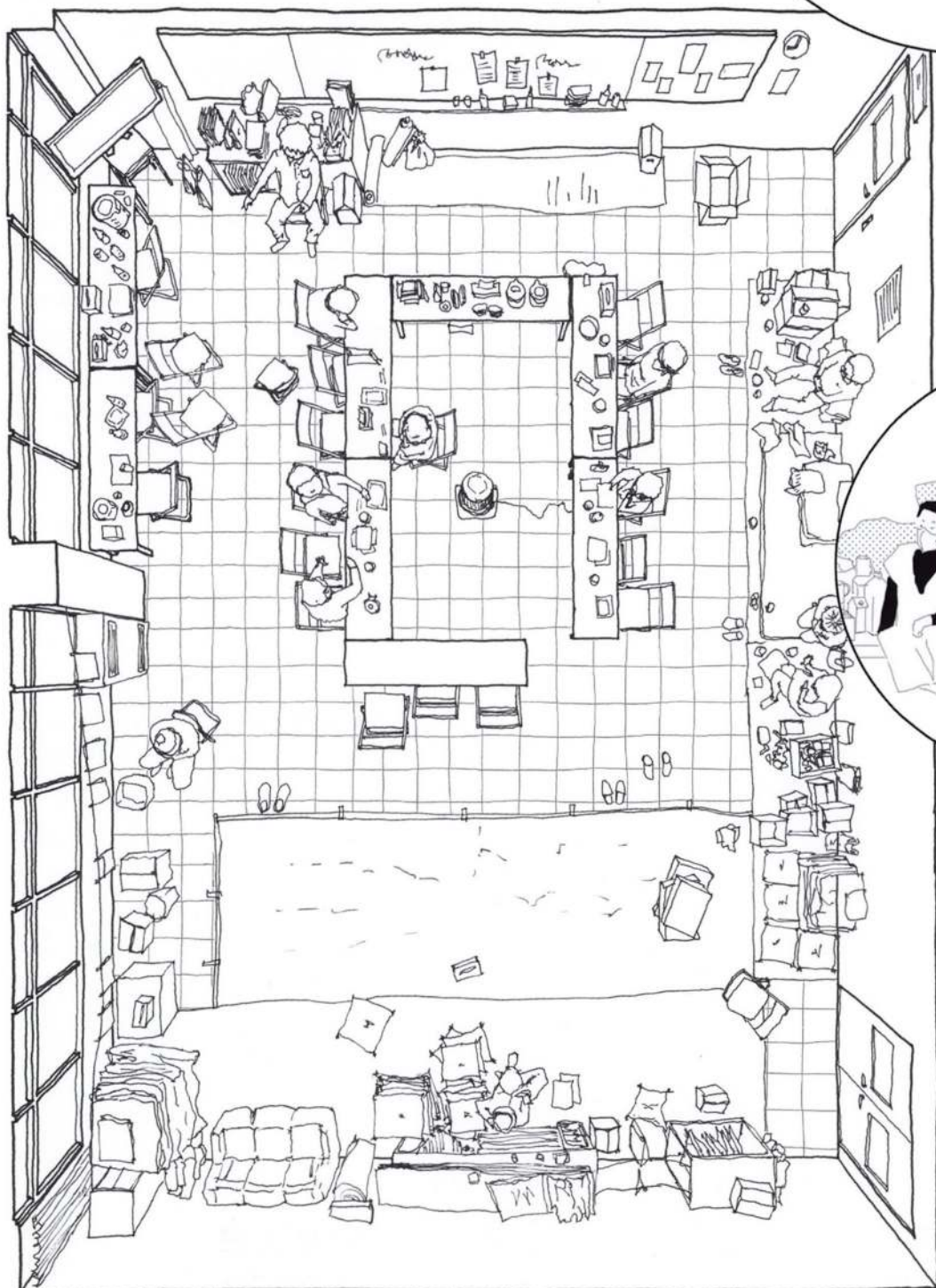
に会議机が口の字状に並べられ、その中心にはやかんを載せたストーブが置かれ、空間の芯をなしている。会議机の上には、コーヒーセットなどが置かれている。



日が暮

れて夜は、ブルーシートとダンボールを床一面に広げ、その上に同じく床一面に毛布を敷き詰める。一切の空間の隔てをなくして、町内の全員でひと続きの大きな毛布の上で眠る。

文 北川啓介
米澤隆
絵 荒木省吾
坂本睦



日常を失った生活空間 和室 ～東日本大震災における 身の置きどころの たち現れかた～

北川啓介＋米澤隆



一階の事務室のすぐ隣に向かい、前室にて靴を脱いでガラス障子を開け、身を寄せるご高齢の方々へ挨拶し、二間続きの十五畳の和室に足を踏み入れた。和室は、床の間、押入れ、襖、障子、畳敷きなどで構成されており、もう一室の和室はそれを線対称にしたように全く同じような空間形式である。その間を襖と欄間が分割している。震災後、畳が敷き詰められたこの和室に、お年寄りや体の不自由な方が身を寄せ、この和室空間は生活空間としてのあり方を変えることになる。

二室を切り分けていた襖が取り払われ、二間続きの和室が一室の大きな空間として使われている。日中は布団がたたまれて端に寄せられており、畳の空間が広くとられている。たたまれた布団にもたれかかっている人、畳の上であぐらをかき談笑している人、横になってひとりてゆっくり時間を過ごしている人など、もともと畳が一面に敷き詰められている空間ゆえに生活の自由度が高い。夜になるとたたまれていた布団が敷かれ、川の字状に並列に布団が並んでいく。日中と夜間といった時間により、用途によって、空間のフレキシビリティは高いようである。

これだけ見ていると和室の旅館など、旅先で見慣れた光景のようにも思われる。ただ、一時的な宿などとは違い、月単位の生活になる、それに加えこれだけ多くの人がひと続きの和室に生活するということは明らかに特異なことだろう。空間のたち現れかたにも随所にその性質が見受けられる。

左右の壁にある床の間には生活用品が高く積み重ねられている。押入れの中にも生活用品が所狭しと詰め込まれていて、ラジオやブラウン管テレビすらもこの中に入れ込まれている。テレビが押入れの中に設置されているために、空間の形状から見る者を限定してしまうように一見思えるが、畳の上にある物を少しでもなくし、生活のための自由な場としてすっきりさせ、適材適所に生活物品を配しておこうとする意図がうかがい知れる。他にも鴨居に洋服が掛けられていたり、ガラス障子にそのガラスの目地に沿わせるかたちで注意事項や新たな情報を告げる貼り紙が張られたりなど、空間を立体的に多様に使用するための工夫が見られる。

また、和室空間のフレキシブルさゆえか、二間続きの奥行きのある形状ゆえにか、そこに生活する人の温かなお人柄とこの空間構成が持つ特徴が呼応しているように思われる。入り口から入ってすぐに目が合う上座に位置するご夫妻が、この空間における中心的な人物なのだろうか。この位置からだと思入れの中にあるテレビも見やすい。事実、この空間に調査のために入った私たちに対応していたのはこのご夫妻であった。テレビのリモコンもこの夫妻が常日頃から管理されているようであった。生活道具や生活機器に触れる際にも、部屋を共有するご高齢の全員がなるべく体を大きく動かすことなく、一日の生活の随所を適宜、使用しやすいように考案されている。押入れのすぐ前のご婦人はテレビを背にしていってテレビを見るには不便そうに思われるが、その代わりにテレビの音声をラジオのように聞きつつ、避難所に届いた新聞や手紙を読むなど、自分のことを夢中でさせている。和室の中央あたりでは幾人かのかたが布団をかけ、横になって寝ている。テレビがない側の和室の奥のほうでは、こちらもご高齢の五、六人が集まり、なにやら真剣な面もちで会合を開かれている。

和室という日本古来の空間形式は、その本来の使われ方を変えたとしても、間仕切り、家具、床材になるものなどを持ち込む必要がなく、四六時中、一面に敷き詰められた畳はあぐらをかくにしろ、横になるにしろ、自由なふるまいを可能にしている。またこの空間が入り口から奥行きのある形状のためか、フレキシビリティが高いためか、必ずしもひとまとまりとしての一体感を創出しているわけではないが、人が様々な用途に応じて使用しやすい広間としての畳敷き平面と、床の間や押入れといった生活する上での機能を立体的に壁面沿いに配した和室という馴染みのある形式が、お年寄りや体の不自由な方が集まるこの空間全体に、なごみ感すらも醸し出しているように思えてくる。

生活者数：16人
延べ床面積：58㎡
専有延べ面積：42㎡
共有延べ面積：16㎡
ひとりあたりの専有面積：2.62㎡/人



和室

東日本大震災における避難所

床の間、押入れ、襖、障子、畳敷きなどで構成されており、その間を襖と欄間が分割している。六十平米足らずのこの和室に、お年寄りや体の不自由な方が身を寄せ、この和室空間は生活空間として
のあり方を変えることになる。



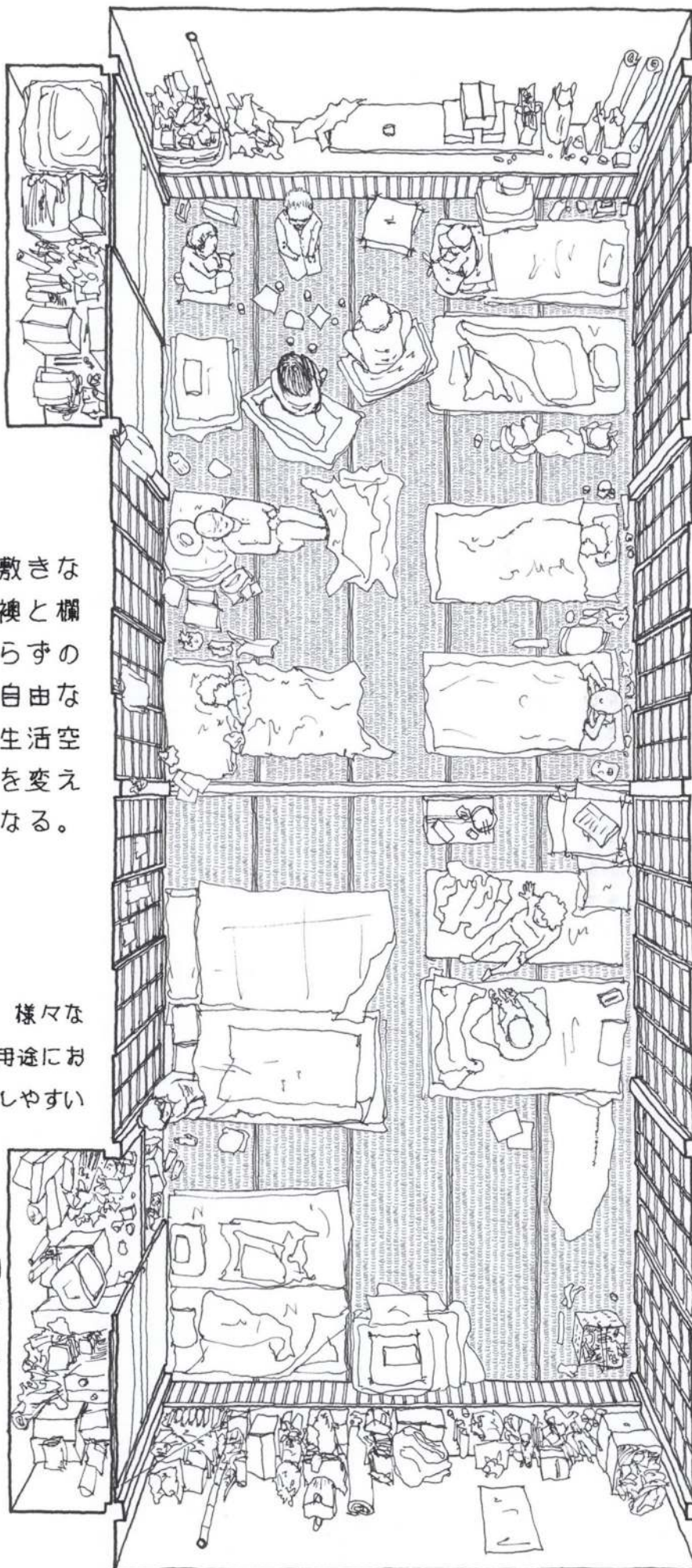
いて
畳敷きの

様々な
用途にお
使用しやすい

広間とし

ての平面形式と、床の間や押入れといった生活する上での機能を立体的に配した壁面形式が融合した和室という室内空間の形式が、お年寄りや体の不自由な方が集まるこの空間全体に、共同生活を送る上でのなごみ感すらも醸しだす。

文 北川啓介
米澤隆
絵 荒木省吾
坂本睦



日常を失った生活空間 図書館 ～東日本大震災における 身の置きどころの たち現れかた～

北川啓介＋米澤隆



高台の中腹に、うっそうと茂った木々に囲まれて、外壁のレンガが特徴的な図書館がある。風除室の自動ドアを手で開けて入り口をくぐると、受付カウンターのあるエントランスホールがゆったりとしたスペースで広がり、右手に児童書コーナー、左手に一般書コーナーが設けられ、本棚が一定の間隔で所狭しと並んでいる。普段は市民に知の集積として親しまれ、この空間で本を片手に物語の世界に入り込み、ゆったりした時間を過ごしているのだろう。この図書館は指定避難所として選定されていたわけではないが、住民の要望と図書館運営者と石巻市教育委員会の判断で、避難所として生活の場に様変わりしている。

図書館前の駐車場の一角は、自衛隊による仮設浴場の提供場所となっており、図書館に身を寄せる人々だけでなく、近隣の避難所からも心身ともに温まる湯船を求めて、日中は仮設浴場前の長椅子に座りながら自分の番を待つ。高台の中腹に位置するため、周囲には住宅街が広がり、目視で確認する限り、家屋への被害はほとんどなく、夕方ともなると、それぞれの家屋のリビングやダイニングには照明がともされる。今回の大震災では、やはり、地震による被害よりも、津波による沿岸部の被害が、石巻市を一変させたことがわかる。

まず入り口を入ってすぐに目にするのが、エントランスホールの掲示板にあふれんばかりに重なり合って張られた行方不明者の搜索のための貼り紙である。いかにこの被災地が切迫した状態であり、非常事態であるかというのを思い知らされる。この掲示板と直角をなすように受付カウンターがあり、その上にテレビが置かれている。エントランスホールにはやかんを載せたストーブがふたつ設置され、テレビに向かい椅子が数脚並んでおり、娯楽番組を見て人々が団欒している。非日常的風景と日常の生活が隣り合わせに同居している様子を目の当たりにする。受付カウンターの上にはテレビのほかに大きな鍋がいくつかと、ご自由にお取りくださいと書かれた貼り紙が付されたバスケットに入ったパンケーキ、ペットボトルなどが数本並んで置かれている。エントランスを入ってすぐの受付カウンターはボランティアの拠点になっている。

本棚と本棚の間は、そのスケール感と囲ま

れ感をうまく使い、私的な空間として使われている。床に毛布を敷き、その周りを生活用品で囲み、その横に椅子を置き、本棚に洋服を掛け、窓台に時計、水筒などの生活雑貨が並ぶ。本棚に挟まれたひとり一列の私的空間が誕生している。本棚と言っても、そこには小説、文学書、政治経済書、児童書など多種多様な本が並べられている。児童書の前には子どもたちが、雑誌や新聞の近くには高校生から若夫婦が、歴史書の前にはご年配の方が、といったように、単に本棚に囲まれて私的な空間が出来上がっているだけでなく、そこに置かれた本の種別によって、その場所を陣取るそれぞれの人々の属性の一端が現れているように思われる。

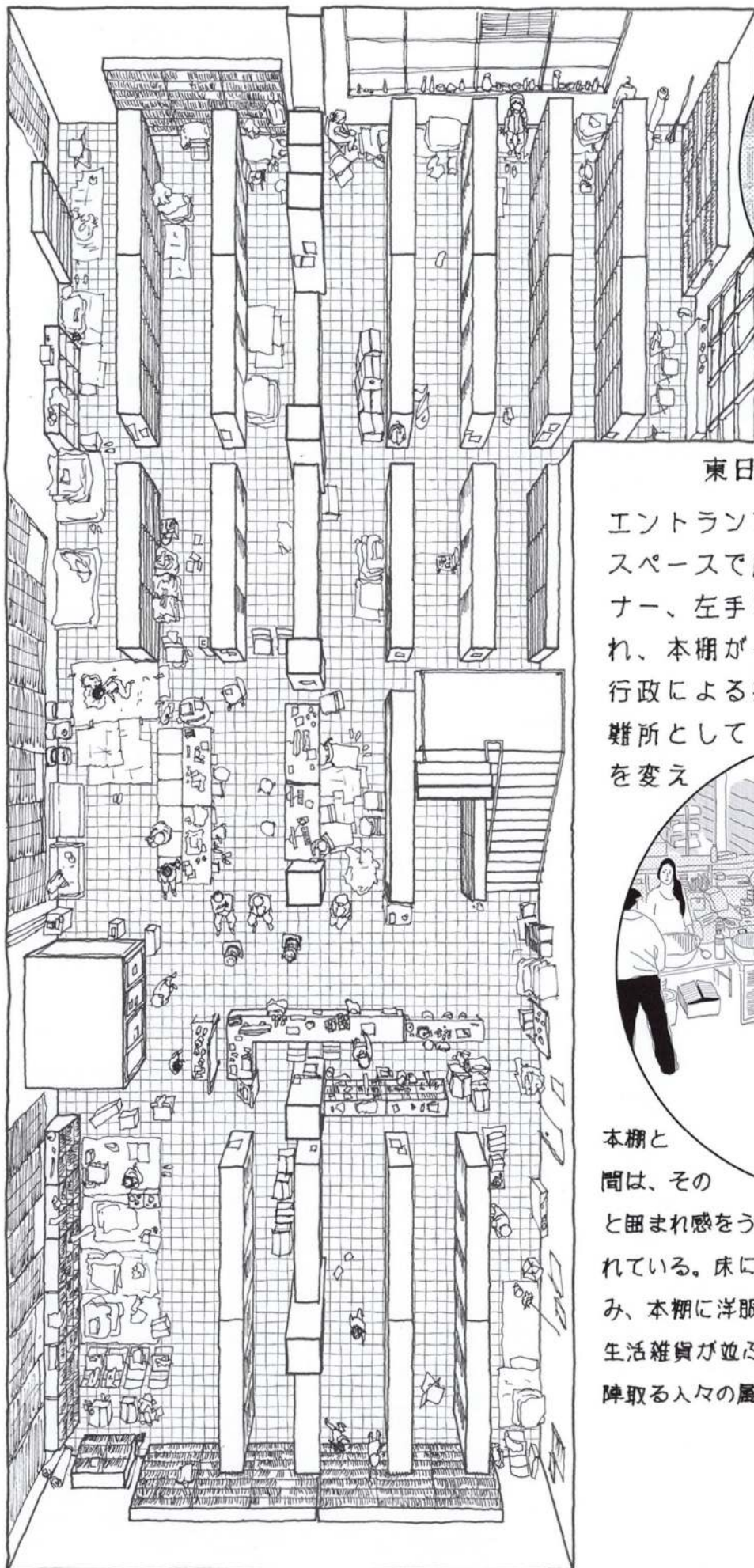
本棚と本棚の間隔が他より広めなロビー空間にはマットが設置され、テーブルが設えられ、家族が食事をとったり団欒したりしている。本棚の間隔に合わせて生活のふるまいに適した場がつくられている様子がうかがえる。

本棚の影から子どもたちがこそこそと話している声が聞こえる。数人の子どもたちが地べたに座り込み、なにやら楽しそうに話している。と思えば、ひとりの小学生が寄ってきて、テレビで面白いバラエティ番組をやっていることを告げると、多くの小中学生が一斉にテレビに向かい、本棚の間を駆け抜けた。子どもたちにとって、あちらこちらに身を隠せる秘密基地や、回遊性の高い迷路に近い空間なのかもしれない。

二階には書庫がある。そこには、カップ麺、パン、調味料、ビスケット、お茶、毛布、下着、おむつ、カイロなどの食料、生活用品が書棚の間に保管されている。通常は本や雑誌を保管するための書庫が、生活必需品の備蓄庫に役割を変えている。

生活空間として想定されては設計されていない図書館を、蔵書がカテゴリーごとに配された図書館たる形式を利用し、生活の場が生まれた様子がうかがえる。それぞれの本が内在する物語性が、無味乾燥になりがちな避難所空間に変化を与えている。

生活者数：25人
一階の延べ床面積：178㎡
一階の専有延べ面積：54㎡
一階の共有延べ面積：124㎡
一階のひとりあたりの専有面積：2.16㎡/人



図書館

東日本大震災における避難所

エントランスホールがゆったりとした
スペースで広がり、右手に児童書コー
ナー、左手に一般書コーナーが設けら
れ、本棚が一定間隔で所狭しと並ぶ。
行政による指定避難所ではないが、避
難所として 生活の場に姿
を変え ている。



本棚と
間は、その

本棚の
スケール感

と囲まれ感をうまく使い、私的な空間として使わ
れている。床に毛布を敷き、隅りを生活用品で囲
み、本棚に洋服を掛け、窓台に時計、水筒などの
生活雑貨が並ぶ。本の種別によって、その場所を
陣取る人々の属性の一端があらわれている。

文 北川啓介

米澤隆

絵 荒木省吾

坂本睦

日常を失った生活空間

体育館

～東日本大震災における
身の置きどころの
たち現れかた～

北川啓介＋米澤隆



宮城県石巻市内の高台の中学校校舎の裏側に、ひととき大きな体育館がある。鉄骨トラスによる巨大な架構の下に、テニスコートが二面入る広大な空間が広がっている。前方には階段を数段上って大きな舞台もある。長手の壁面の二階レベルには大空間を囲むようにキャットウォークが走り、バスケットゴールが取り付けられている。キャットウォークより上部の壁が全開口になっており、日中はここから内部に光が差し込む。日ごろは中学生たちがこの体育館でバスケットボールやバレーボールなど、元気よく運動していることだろう。大震災以降、主に家族連れで避難してきた多くの人々が、この体育館の大きな屋根の下に身を寄せ、長きにわたる時間と大きく続く空間を共にしている。

体育館という広大な空間においては、建築空間の中に住まうというよりも、広い敷地の上に空間や集落が立ち上がっていくという感覚により近いのであろう。生活用品、ダンボール、パイプ椅子など、生活に必要なもの、簡単に手に入るものを建築材料として生活の場が立ち上げられている。パイプ椅子が並べられ、道がつくられ、生活用品を積み上げ、壁が築き上げられる。積み上げる高さを変えることにより、その場その場に応じて壁の意味が巧妙に変わっている。ほとんどの世帯が、家族の衣服や生活用品などの荷物を詰めたダンボールを間仕切り壁として用い、そこに大小様々な開口部を設けている。この場における建築行為は人と人の距離をとる作業ということではなく、この広大な空間においていかに人と人の距離を縮めるかという行為なのである。創出する空間の基準とするスケールも、個人というよりも家族が対象であり、家族単位や町単位で空間が出来上がっている。子どもがいる家族、お年寄りがいる家族、ひっそりと静かに生活したい人、みんなでわいわい交流したい人、いろいろな人、様々な家族があり、空間はそれぞれの生活像に合わせてつくられ、必要とあればいつでもつくり変えられ、更新されていく。こうして出来上がった空間はその家族のありよう、その町の性格を如実に現している。

舞台の上には日の丸の国旗と本部と書かれた大きなボードがかかげられ、救援物資が入

ったダンボール箱が床を埋め尽くし、高く積み上げられている。舞台という、広大な空間のどこからでも見える象徴的な場所にボランティアの本部が設置されていることは、被災者に幾分の安心感を与えていることだろう。

この広大な空間には、いくつものテレビが点在している。それぞれのテレビで、放映されている番組内容が異なり、それに合わせてその周りに集まる人々の属性が異なっている。晩御飯を終えた頃、アニメ番組が放映されていればその周りには小学生たちが同級生や幼馴染み同士手を取り合いながら集まり、バラエティ番組やドラマ番組が放映されていれば携帯電話を手にした中学生や高校生がどこからともなく集まり、ニュース番組が放映されている辺りには大人たちが心配そうな表情をしながら集まっている。空間自体は家族や町を基準につくられているが、一日の時間帯によるイベント性とその枠組みを超えたつながりを生み出している。

世帯の家族構成が、体育館全体の中での世帯配置に影響を与えている。子ども連れや二世帯家族など、人数が多い世帯ほど体育館の中心に位置し、人数が少ない世帯ほど体育館の壁側に位置し、体育館の壁に寄り添う。世帯間の隔壁を自らの物資で設けているため、ひとりよりもふたり、少人数よりも多人数で隔壁を共有するほうが効率よく高さを保つことが可能になり、そして、世帯それぞれは、ほどよい囲包性の空間を有していく。

ここには住人ひとりひとり、世帯ひとつひとつが自らつくり上げた生活の場があり、それらが集まった公共の場があり、そして、全体を繋ぐインフラがある。つい数日前までは何もなかったところに、町が出来上がってきている。その生成の過程は、そもそも、近隣の老若男女の自助と互助のために集うことで村や町が生じ、その後、物資や経済や情報の交換を促すことで急速に発展してきた都市の生成そのものである。

生活者数：216人

世帯数：53世帯

一階の延べ床面積：843㎡

一階の専有延べ面積：462㎡

一階の共有延べ面積：381㎡

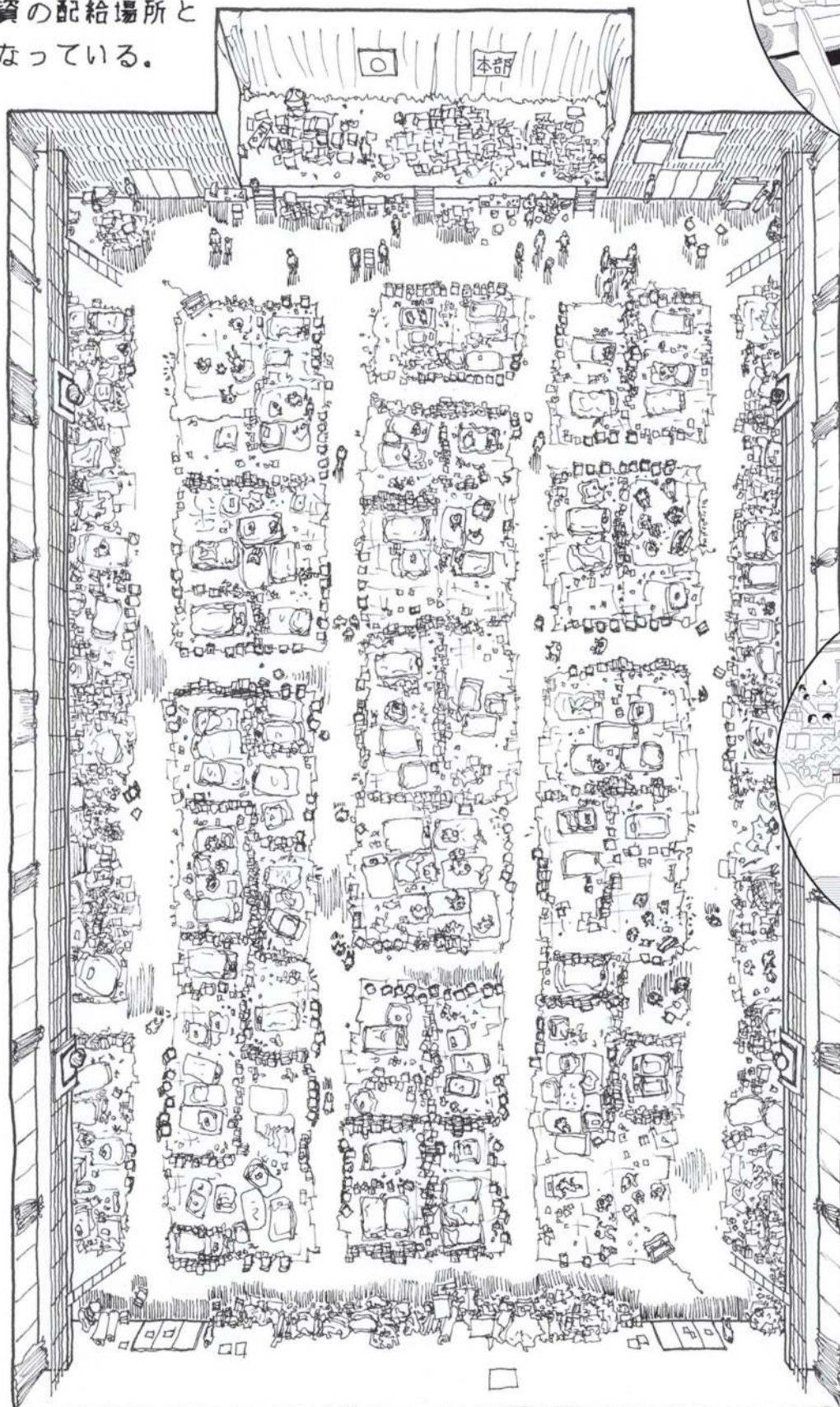
一階のひとりあたりの専有面積：2.13㎡/人

一階の世帯あたりの専有面積：8.71㎡/世帯

体育館

東日本大震災における避難所

鉄骨による巨大な架構の下に、二面のテニスコートが入る広大な空間が広がる。階段を数段上の舞台は、救援物資の配給場所となっている。



舞台の上には

日の丸の国旗と本部と書かれた大きなボードがかかげられ、救援物資が入ったダンボール箱が高く積み上げられている。舞台という体育館の象徴的な場所に、ボランティアの本部と救援物資が常に設置されていることは、被災者に幾分の安心感を与えている。



子ども連れや二世帯家族など、一世帯あたりの人数が多い世帯ほど体育館の中心に位置し、人数が少ない世帯ほど体育館の壁に寄り添うような区画となっている。

文 北川啓介
米澤隆
絵 荒木省吾
坂本睦

3 政令市（京都市・堺市・大阪市）の建築環境総合性能評価システム（CASBEE）

～最新の取り組み～

CASBEE京都 （建築環境総合性能評価システム）

杉本憲二

京都市 環境政策局 地球温暖化対策室

青木 巖

京都市 都市計画局 建築指導部 建築指導課

制度策定の背景

京都市では「環境モデル都市」の行動計画の一つとして、平成20年度から学識経験者や市民公募委員による「木の文化を大切にすまち・京都」市民会議を設置し、「木の文化」という京都の固有性を踏まえた地球温暖化対策のあり方について検討を進めてきた。

この市民会議では、3つのプロジェクトチームが設置され、そのうちの一つである「京都環境配慮建築物（CASBEE京都）」検討プロジェクトチームにおいては、建築物の環境性能を総合的に評価するツールであるCASBEEを活用し、京都にふさわしい環境配慮を行う建築物を誘導する基準や仕組みづくりについて検討を行った。

その成果を踏まえ、全国基準であるCASBEEに京都の地域性を反映した「CASBEE京都」を策定し、平成23年4月より運用を開始した。

京都市では平成17年10月から、京都市地球温暖化対策条例に基づき延べ面積2,000㎡以上の建築物の新築・増築についてCASBEEの届出を義務付けているが、これまでは、全国版のシステムをそのまま用いていた。

制度の概要

1 基本的な考え方

CASBEE京都の目的は、京都の特性に応じた環境配慮建築物を評価・誘導することにあるが、環境配慮建築物は地域の独自性だけで成り立つものではない。低炭素化という目的、そのための新しい技術、それらは普遍的

なものであり、そのような普遍性と地域性の共存が今、求められている。

したがってCASBEE京都のシステムを構築するに当たっては、CASBEE全国版のシステムに著しい改変を加えるのではなく、全国版の普遍性は保持しつつ、そのうえで、京都の独自性が評価・表示できるものとした。

CASBEE京都によって目指すべき京都らしい環境配慮建築物像について、「木の文化」の概念に即し以下のキーワードを設定した。

- ①大切にす 建築物を大切にし、資源を大切にす。
- ②ともに住まう 自然とともに住まい、地域とともに住まい、歴史とともに住まう。
- ③自然からつくる 自然材料を使ってつくる、自然を活かして計画する。

2 評価システム

①システムのあり方 CASBEE全国版をベースに、京都独自のシステム「CASBEE京都」を構築する。

具体的には、上記の3つのキーワードに応じて、重点的に取り組むべき項目を「重点項目」として全国版から抽出し、適宜評価内容の見直し等を行うことで、総合的な環境性能に加え、京都らしい環境配慮建築物を適切に評価・誘導できるようにする。

②京都の独自性 主な見直し・重点化の要点は、以下のとおりである。

- ・木材の利用促進⇒木材（特に市域産材）の使用を評価
- ・自然材料に関する取扱⇒環境・景観の両面で自然材料の使用を評価
- ・歴史性・地域性への配慮⇒伝統技術の採用や地域環境への配慮を評価
- ・低炭素景観の創出⇒格子や軒庇等の環境制御機能を持つ景観要素を評価

③「京都標準システム」と「京都独自システム」 「CASBEE京都」は「京都標準システム」と「京都独自システム」とで構成される。

全国版システムの普遍性を保持したままで一部見直しを行ったものを「京都標準システム」と呼び、それに対して、京都が重点的に取り組む部分として、上記「重点項目」を中心に「京都らしさ」を分かりやすく評価・表示する仕組みを「京都独自システム」として構築している。

「京都独自システム」では、重点項目での評価を抜き出して、3つのキーワードのそれぞれに対する取り組み度を5段階評価するシートを作成し、シート単体で京都らしさを評価できるようにし、「京都標準システム」の評価シートと合わせて運用することで、全国的な指標での評価と同時に、京都独自の考え方で評価を表示できるようにした。

④届出 CASBEE京都による評価結果は、地球温暖化対策条例に規定される「排出量削減計画書」の添付資料として、延べ面積2,000㎡以上の建築物について届出が義務付けられている。加えて、2,000㎡未満の建築物についても、任意での届出を受け付ける。

（すぎもと けんじ・あおき いわお）

CASBEE堺 （堺市建築物の総合環境配慮制度）

藤本晃久

堺市 建築都市局 開発調整部 建築指導課

環境モデル都市——堺市

堺市は、世界文化遺産登録を目指す百舌鳥古墳群や旧市街地をはじめとした歴史・文化資源、臨海部等の先端産業や伝統産業を含むものづくり産業が集積し、泉北ニュータウンに代表される良好な居住空間など、多様な都市機能を有している。

さらに、低炭素社会の実現に向けて先駆的な取り組みに挑戦する都市として、国から「環境モデル都市」として認定されている。

環境モデル都市の取り組みは、温室効果ガスの大幅な削減だけでなく、都市活力の創出等を同時に実現することが期待されている。

本市は、平成21年4月に堺市環境モデル都市行動計画を発表し、「快適な暮らし」と「まちの賑わい」が持続する低炭素都市『クールシティ・堺』の実現を目指している。

『CASBEE堺』の特色

『クールシティ・堺』の一層の推進を図るための施策として、『堺市建築物の総合環境配慮制度（略称：CASBEE堺）』を創設した。これは、大阪府からの事務移譲を受け、大阪府温暖化の防止等に関する条例に基づいて実施するものである。対象となる建築物と使用する評価ソフトは下図のとおりである。

堺市内に対象となる建築物を新築する場合、これまでは大阪府への届出となっていたが、今後は届出先が堺市に変わる。

届出先が省エネ法と同じとなり、建築主等においては、利便性が向上する。

	新築建築物 (増築含む)	既存建築物	戸建住宅 (10戸以上)
5,000㎡超	義務届出	任意届出	任意届出
300㎡以上	任意届出		任意届出
使用するCASBEE	新築(簡易版)	既存(簡易版)	戸建(新築)

CASBEE堺の対象面積のイメージ

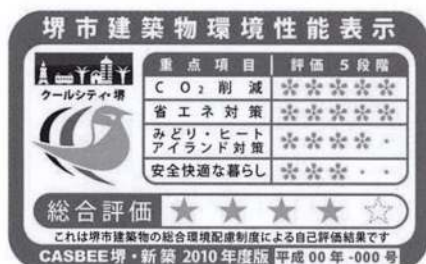
1 重点項目に「安全快適な暮らし」を追加
評価ツールは、建築物の種別に応じて全国共通のものさしとなる「CASBEE新築（簡易版）」などに、重点項目を加えた本市独自の評価ソフトを使用する。

CASBEEの評価項目から抽出した、建物の耐震、免震化による地震対策、身体障害者等の円滑利用措置対策など、より安全で快適な生活を営むことができる良質な建築ストックの形成への貢献項目として、「安全快適な暮らし」と名付けた項目を設けている。

これにより、重点項目は、大阪府・大阪市共通の3項目に、環境モデル都市として重視した独自項目を追加し、4項目となる。

2 建築物環境性能表示制度の実施

「CASBEE堺」による評価結果を、販売または賃貸を目的とした広告物や自社の建築物に環境配慮への取り組み結果を示すことができる制度である。堺市が定める表示基準に従い、任意で下図の表示をすることが可能である。



CASBEE堺の表示ラベルのイメージ

3 顕彰制度の充実

大阪府建築物環境配慮制度推進委員会の審査・選考による大阪サステナブル建築賞の中に、新たに『堺市長賞』を設ける。

義務届出となる建築物のうち、特に優秀な評価を得た建築主や設計者を顕彰する。

8月1日から受付開始

平成23年8月1日から、堺市建築物の総合環境配慮制度が運用開始となる。

今後、説明会等の普及啓発活動を行い、「CASBEE堺」の評価ソフト等は、本市ホームページに掲載する予定である。

なお、『クールシティ・堺』に賛同する市内の金融機関で構成される「SAKAIエコ・ファイナンス・サポーターズ倶楽部」が平成22年2月に発足し、本市と連携して、市民・事業者のニーズに応じた環境配慮型金融商品の提供に努めている。

今後も、『環境モデル都市・堺市』として、次世代に豊かで良好な環境を引き継ぎ、人と環境に優しいまちづくりを進め、低炭素都市『クールシティ・堺』の実現を図っていききたい。

（ふじもと てるひさ）

CASBEE大阪みらい （大阪市建築物総合環境評価制度）

柳原 卓

大阪市 計画調整局 建築指導部 建築確認課

建築物の環境配慮を総合的に評価する「CASBEE大阪」において、届出対象を拡大し、新築建築物におけるCO₂削減・省エネ対策の強化・充実や、既存建築物における省エネ化の促進を図るため、「CASBEE大阪みらい」に改正した。

制度拡充の目的

大阪市では、環境に配慮した建築物を誘導するため、平成16年10月より大阪市建築物総合環境性能評価制度「CASBEE大阪」を実施している。5,000㎡を超える建築物や、総合設計制度を活用する建築物を新築する際に、市が定めた評価基準に基づいて、建築主の方が建築物の総合的な環境性能を自己評価し、その結果を大阪市が公表するものである。現在、届出された建築物のうち9割近くがB⁺（良い）以上の性能を取得している。

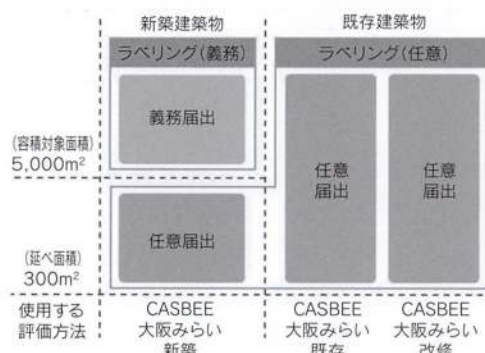
一方、家庭部門と業務部門（オフィス）からのCO₂排出量が増加傾向にあり、本市総排出量の50%以上を占めている。今後は、新築建築物における省エネ性能の向上だけでなく、既存オフィスの省エネ対策の促進など、環境に配慮した建築物の一層の普及促進を図る必要がある。このため、「CASBEE大阪」の届出対象を大幅に拡大するとともに、マンションやオフィスビルについては、購入者や入居者が環境に配慮した建物を選択しやすいよう、販売広告に環境性能を表示する制度（ラベリング）を新たに創設した。

おもな改正内容

1 届出対象の拡大（下図参照）

①5,000㎡を超える新築建築物に義務付けている「CASBEE大阪」の届出対象を拡大し、300㎡以上5,000㎡以下の新築建築物を任意届出とする。

②市内に多数ある既存建築物に届出対象を拡



CASBEE大阪みらい 対象面積のイメージ

大し、環境に配慮した良質な建築物を評価する。対象は300㎡以上の建築物とし、任意届出とする。（政令市初）

③既存建築物の省エネ改修を届出対象とする。対象は300㎡以上の建築物とし、任意届出とする。（政令市初）

※評価基準の改訂 「CASBEE大阪みらい」では、（財）建築環境・省エネルギー機構が発行・公表している「CASBEE（簡易版）2010年版」を使用する。

2 建築物環境性能表示制度（ラベリング）の実施

マンションやオフィスビルの建築主が分譲や賃貸の入居者募集を行う際に、建築物の新築及び改修の時に届出されたCASBEE大阪みらいの評価の結果に基づき、大阪市の定める表示基準に従って、広告等に環境性能を表示するとともに、その内容を大阪市がホームページで公表するものである。

①対象となるものは、マンション、オフィスビル等で、分譲、賃貸を問わない。

・新築建築物で5,000㎡を超えるものなどCASBEE届出が義務付けられているものを販売または賃貸する場合は、広告等にラベル表示を義務付ける。

・上記以外でも「CASBEE大阪みらい」による届出を行った建築物については、ラベル表示を可能とする。

②ラベル表示を行う場合は、CASBEE建築評価員による評価が必要となる。表示は「CASBEE大阪みらい」の評価に基づく。



CASBEE大阪みらい ラベルイメージ

なお、重点項目は、大阪府・堺市と共通となる「CO₂削減」「省エネ性」「みどり・ヒートアイランド対策」の3項目となる。

今後とも、環境に配慮した建築物が市場で評価される仕組みづくりに取り組む。

（やなぎはら たく）

あとがき

この度の東日本大震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

また、一日も早い震災からの復興を心より願っております。

構造 の頁

鋼材と木材を組み合わせた木造校舎の構造設計

小阪 淳也

㈱日建設計構造設計部門構造設計部主管

「飛弾の匠」のまち高山、アルプスの山並みと町を一望する高台に建つ中学校の建て替え工事である。

『木』のぬくもりが生徒たちの心に残る校舎を、との思いから、地場産材のヒノキやカラマツを用いた木造とし、小屋組や梁を表して、豊かな生活空間を創り出すことを心掛けた。

所在地：岐阜県高山市下岡本町

建築主：高山市

設計・監理：㈱日建設計

施工：

〔校舎〕井上・二反田・田中共同企業体

〔屋内運動場〕丸仲建設

敷地面積：38,964.35㎡

建築面積：5,770.79㎡

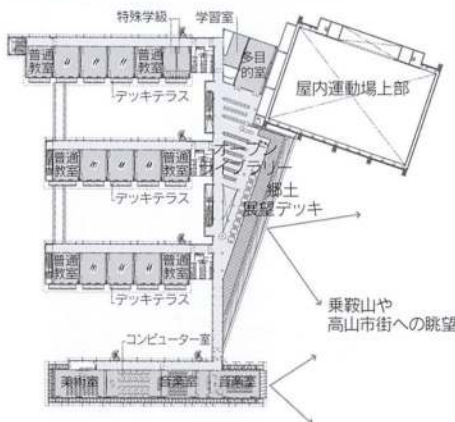
延床面積：8,685.96㎡

構造・規模：W・RC・S造 +2

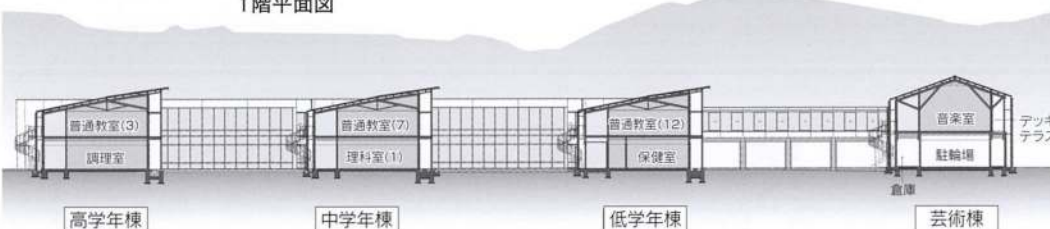
工期：2006年6月～2009年3月



1階平面図



2階平面図



断面図

製材とテンションロッドによるトラス屋根

3棟ある普通教室棟は、1階に特別教室や職員室などを、生徒が生活の大半を過ごす普通教室を2階に配置した。

屋根梁をカラマツの製材によるトラス架構とし、下弦材を照明器具の設置部材を兼用した2本のテンションロッド (22φ) として、『木』のぬくもりを出しながらもスレンダーな印象を与える教室空間とした。(写真1)

集成材と鋼板による耐震壁

一般に木造の床の遮音性は鉄筋コンクリート造に比べ劣るが、本計画では、強度の高いカラマツの集成材の梁で、穴あきプレキャストコンクリート版を支持することにより遮音性を向上させた。

また、1階の地震力も大きくなるが、教室の採光確保や将来のレイアウト変更への対応のため、壁を多くすることはできない。耐震壁には耐力の高い鋼材の利用が必須となるが、ブレース形式の場合には端部の接合部に



写真1 製材とテンションロッドによる普通教室棟のトラス屋根

力が集中し、十分な力の伝達が難しい。

そこで、鋼板耐震壁を周囲の木造梁・柱にラグスクリューで接合したCT材に接合することで、力を分散して伝達させることとした。

(写真2)

施工に先立ち鋼板耐震壁の強度試験を行い、想定する地震荷重を十分に上回る耐力を確認するとともに、周辺梁・柱との接合部の力の伝達能力の妥当性を確認した。(写真3)

木造の設計と施工

製材には乾燥期間が必要なため、工事に先行して木材を発注する。木材の部材断面寸法と数量の早期確定のためには、意匠・設備設計との早期の整合が必要となる。また、木造における防火性能の厳しい規制や耐震性の確保、さらには生活空間としての快適性の実現には多くの苦心が伴った。

完成後の郷土展望デッキから見た心広がる景色と、そこで語らう生徒たちの姿に、これまでの苦勞も忘れる深い喜びを感じる。

(こさか じゅんや)



写真2 鋼板耐震壁

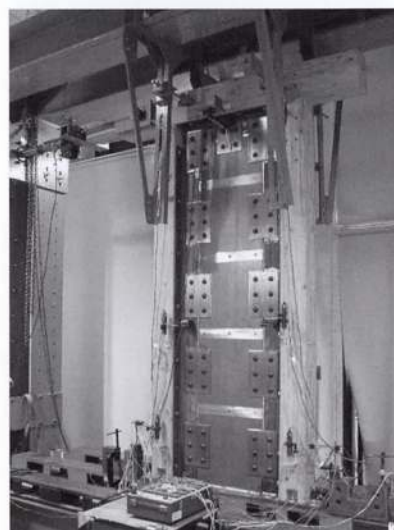


写真3 鋼板耐震壁の強度試験

旧大阪市立精華小学校

和田 康由

再読

関西近代建築

モダンエイジの建築遺産

■小学校建築の背景

大正8年、市街地建築物法公布直後の同9年、大阪市は同市学務委員、関係市吏員を組織して小学校設備調査委員会を設け、同12年関東大震災などの教訓から、この委員会を建築、衛生、教育等の学識経験者、実務家などを加えて組織を補強した。約1年半を費やして「構造は主体を鉄筋混泥土とし、一部に煉瓦及木材を使用する事を得、普通教室其他主要室床は板張とす」など11項目の設備標準を策定した。同市は昭和2年3月末学区の制を廃止、4月より学区を統一した。また、市に移管を機に校舎係を設け、技師主任富士岡重一、技師川口一二、大野直平の鉄筋コンクリート造（以下、RC造）に卓越した人たちをあて、技手、臨時技手雇、臨時雇など計約40名を揃えた。さらに小学校工事監督嘱託を立ち上げ、花岡才五郎、宗兵蔵などの実力者を連ねる総勢92名の大所帯を組織した。大阪市の小学校建築に対する意気込みが読み取れる。

これらの動向に対して、日本建築協会（以下、協会）は、昭和5年2月機関誌『建築と社会』（以下、機関誌）誌上で「学校建築特輯」を発表した。建築界の反響は高く、同年3月単行本『学校建築図集』を刊行した。この図集は、奉安庫、幼稚園、小学校のみならず中学校、高等学校、大学などに言及し、外観・内部などの写真、大阪市小学校木造校舎標準矩計図・平面図・立面図などの図面、工事梗概など多岐にわたり、実例の採用地域も大阪、京都、東京、横浜などを含め、昭和6年11月に3版を重ねるベストセラーとなった。

朝鮮総督府の現場から抜擢された富士岡は、早速協会機関誌に「昭和4年に於ける学校建築の趨勢」（昭和5年1月）、「大阪市小

学校校舎の実状と其計画の概要」（昭和5年2月）を著し、小学校建築の状況や建築計画などについて言及した。そこで、富士岡は木造とRC造の建坪の面積比率で各区を示し、その比率は大阪市全体で木造が70%、RC造が30%で、RC造の最も高い区は南区75%、東区68%、西区51%、北区41%の順となり、港区、東成区、住吉区は0%であると、各区の特徴を示した。RC造の建坪の面積比率が高い4区は富裕区とも呼ばれているが、歓楽街などの密集地も多くあり、明治42年約11,300戸消失した北の大火、同45年約4,500戸消失した南の大火、大正12年関東大震災などの経験を通して、耐震耐火構造の必要性が区会議員や住民などから求められていたことが要因でもある。

協会は、さらに昭和8年10月に2回目の「学校建築特輯」を発表、翌年4月『続学校建築図集』を刊行し建築界の求めに応えた。

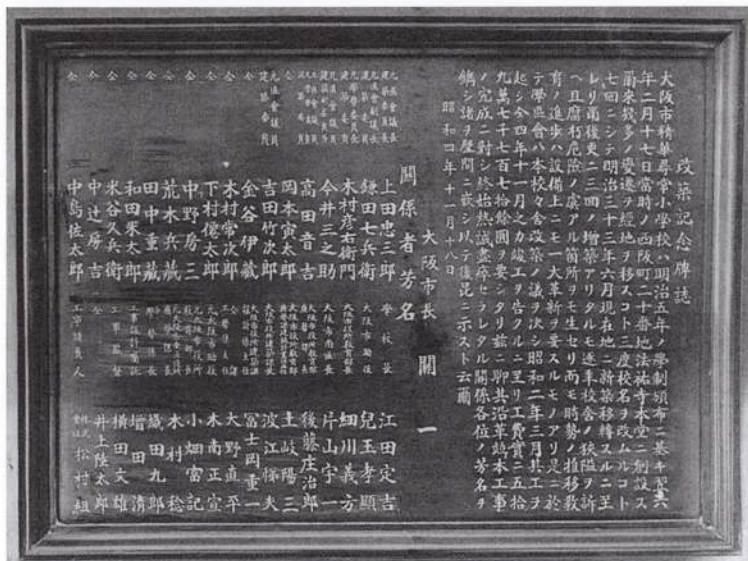
これらの協会の動きに対して久宝（大正12年）、集英（昭和2年）小学校などに関わった関西の大御所宗兵蔵は「巻頭言」（昭和5年2月）で「爰に我日本建築協会が其使命とする社会奉仕の一端として、その機関誌上に各学校々舎の設計、設備を掲載するは正に機宜に適したるものと信ず」と述べている。

富士岡は、昭和9年室戸台風の被害状況の報告として「大阪市木造小学校の被害状況と大阪市木造校舎標準規矩画」（昭和9年11月）を発表し、市全体の木造校舎が68%あり、そのうち全倒壊5校、一部倒壊40校などを挙げ、大正3年1月大阪市木造校舎標準などの効果について言及している。また日本建築学会の場で、建築構造の権威として活躍していた佐野利器は、大阪市の状況に加え、関東大震災後の東京市及び横浜市の状況や提言を

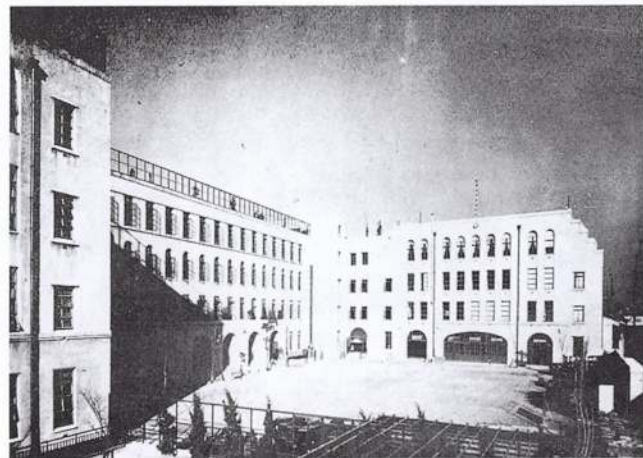


①旧大阪市立精華小学校俯瞰図現状（東から西を見る）

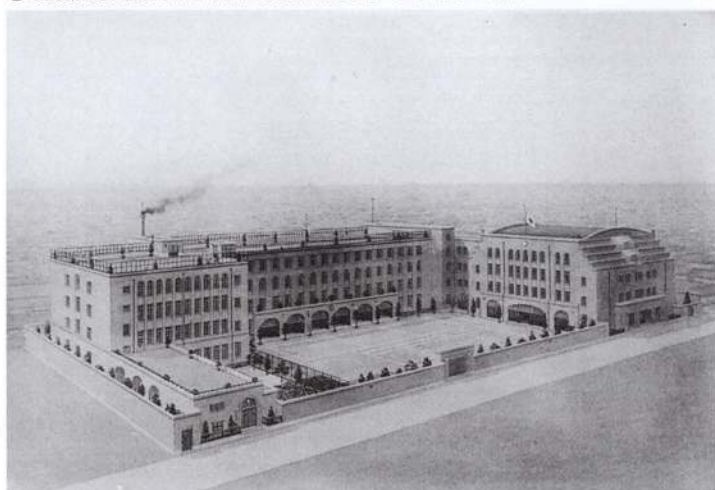
所在地／大阪市中央区難波3丁目25-2
建築計画／大阪市南区役所
建築実施設計嘱託／増田清
附帯設備設計／大阪市役所土木部建築課
工事監督一般／大阪市役所土木部建築課
建築工事請負人／松村組
竣工／昭和4年11月
構造／鉄筋コンクリート造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）
規模／地上4階、地下1階
種別／学校（なお、建築計画・建築実施設計嘱託・附帯設備設計・工事監督一般は『精華校園改築落成記念』による）



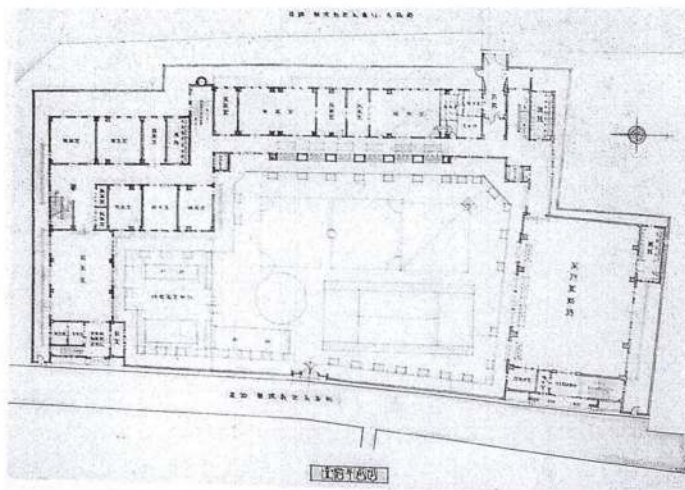
②改築記念碑誌〈「校園精華改築落成記念」より（以下*印）〉



③精華小学校（『建築と社会』昭和5年2月号より）



④外観透視図（*）



⑤1階平面図（*）



⑥学級室（学習ルーム）（現在）



⑦1階廊下と地下室明かり取り用ガラスブロック（現在）



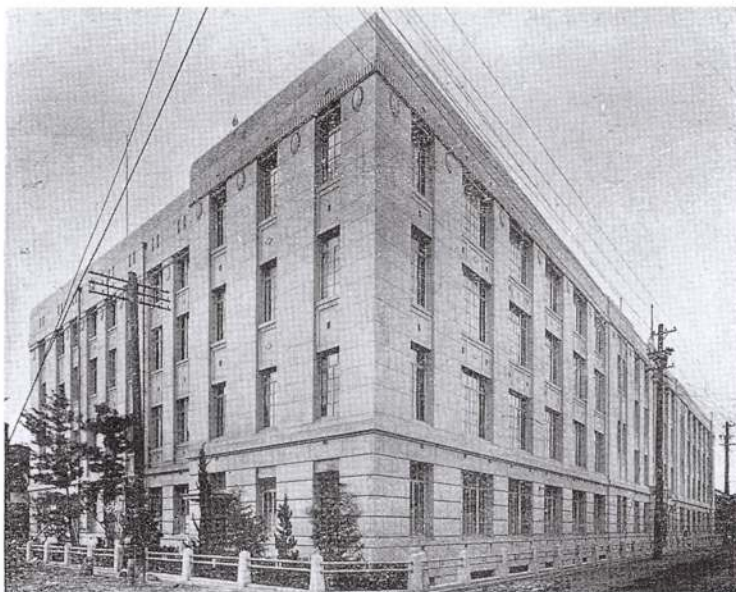
⑧増築部分 幼稚園2階室内プール・体育室（現在）



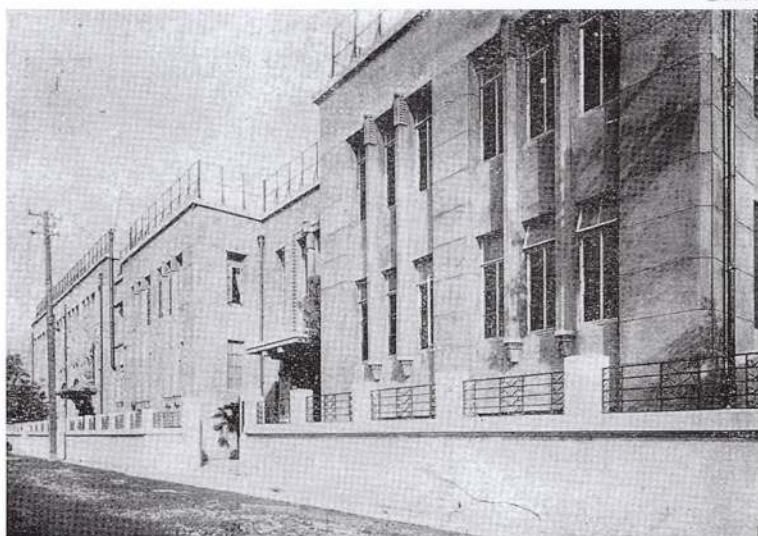
⑨講堂（現在）



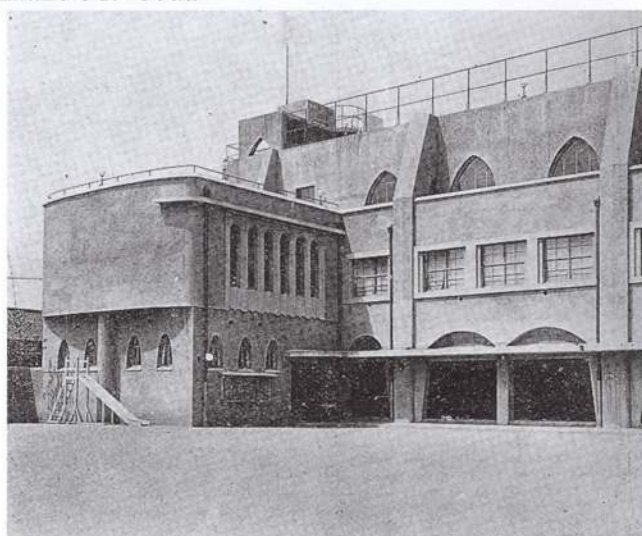
⑩大阪市金甌小学校：増田清（『建築と社会』昭和5年2月号より）



⑪大阪市立久宝小学校：宗兵蔵



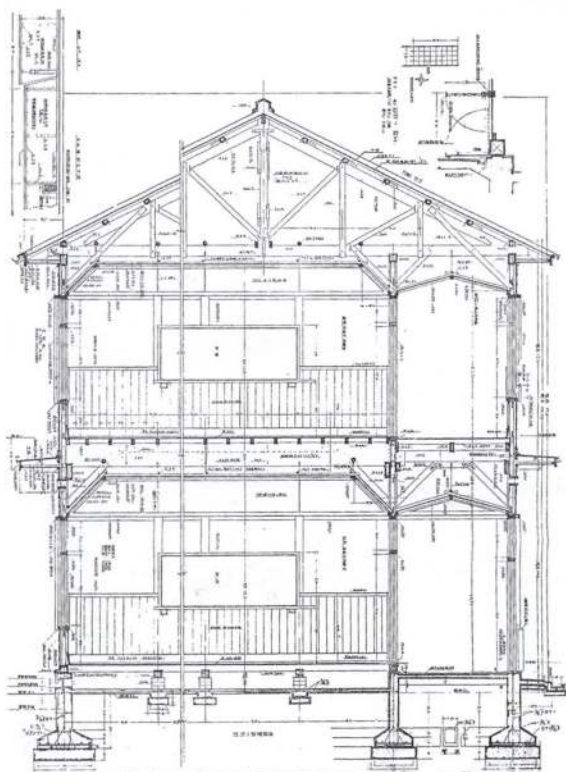
⑫京都市立龍池小学校：京都市営繕課（現・京都国際マンガミュージアム）



⑬大阪市立御津小学校：北棟 花岡才五郎、西棟 大阪市建築課

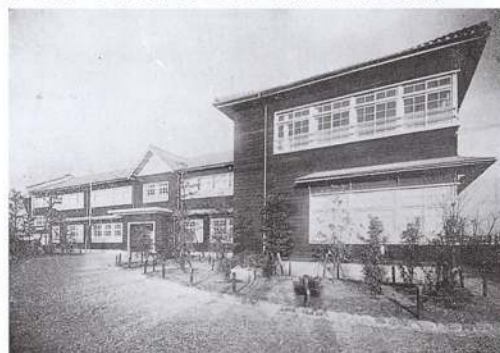
※⑪、⑫、⑬、⑭、⑮
（『学校建築図集』
昭和6年（三版）より）

※⑯
（『近代建築畫譜』
昭和11年より）



⑭大阪市小学校木造校舎標準矩計図

第二圖 大阪市小学校木造校舎標準矩計圖



⑮大阪市立田辺第二小学校：大阪市建築課



⑯神戸市立雲中小学校：神戸市営繕課

「小学校建築（一）」『高等建築学月報』（昭和9年11月18日）「小学校建築（二）」（昭和10年1月28日）に発表した。それによれば、両市は小学校を全部RC造を以て復興し耐震耐火構造とする、と謳っている。東京市は大正2年、東京市立小学校建設費補給規程を設け、震災後の同13年、東京市立小学校復興建設費補給規程を公布して耐震耐火の強化を図った。大阪市については、市内小学校数244校中全部RC造というものの31校、RC造の増築を有するもの50校とし、RC造を採用できない場合は、木造でも太い柱方杖筋違を用いて耐震耐風化を図ることを求めている。

■精華小学校の誕生

協会機関誌などには、設計者名は増田建築事務所や増田清とある。しかし増田の肩書きは、改築落成を記念した『精華校園 改築落成記念 昭和5年7月』掲載の改築落成記念牌誌には「工事設計囑託」、構造大要には「建築実施設計囑託」とあり、同じ記念誌の中で扱いが微妙に異なる。その上、建築委員と工事関係者が紹介され、建築委員は元区会議長、区議員、元学務委員など17名で組織、委員長には元区会議長の上田忠三郎が就き、工事関係者には上田を筆頭に校長、南区長、南区第一課長、南区学務部係長、南区技手、南区囑託技手7名が組織を補強した。区も市と同様の意気込みであった

建築委員等の精華小学校誕生の働きについては、『南区志』（昭和3年12月：387～390頁）に詳しく語られている。それらから精華小学校の誕生を追ってみる。現校地が郊外に建設するかの議論については、「中略—区当局は両者の主張を調停すべく、現校地に於いて、立体四階建築と成し以て双方の主張を相兼ねた設計を作成することに、漸く議を纏むるに至った。爾来上田学区会議長の要求に基づき、幾十枚かの建築プランにより、意見の一致を見て、茲に市長の承認並に知事の認可を得ることとしたるに、時恰も学区統一に、將に直面せんとするの時なりしを以て、急速に其の運びに至らず、区当局は勿論、其の間区議員、学務委員の焦慮苦心一方ならざりしが、漸く其の筋の認可を得て、昭和二年三月愈々総工費六拾余万円の予算を以て、本校を全部鉄筋混凝土四階建の一大模範的新校舎に改築すべく工事に着手することとなった」とされている。

また、建築委員長上田については、「中略—同氏の公共事業中、畢生の事業として計画せられたる、本校の改築に当りては、区当局を督し、幾十種かの建築プランを作成せしめ、建築委員諸氏と共に、考究に、調査に、幾多

の苦心を重ね漸く、現に改築中の設計を完成せしめられたるは、偏に、同氏の奔走尽力の賜ものであることを忘れてはならぬ」と語られている。

学区統一前夜での小学校誕生の動きが生々しく語られており、「幾十種かの建築プラン」とはどういった内容のものであるのか、「建築計画大阪市南区役所」も含めて非常に興味深い。建築委員は、我が国で最初のRC造小学校、神戸市立須佐小学校（大正9年11月竣工）や神戸市立雲中小学校（大正9年12月竣工）などを視察し研究している。それらの研究成果を受けて上田は、育英女子高等小学校（大正12年）、金阪小学校（昭和4年）など多数のRC造の学校建築を増田清に、大宝小学校（大正13年）を東京の工学博士阿部美樹志に、桃園第一小学校（大正13年）を分離派建築会の石本喜久治に、南区庁舎（大正11年）を宗兵蔵に依頼するなど奔走したことが、南区にRC造が普及した背景である。佐野を師と仰ぐ増田は、RC造に関する「鉄筋コンクリート其の日その日」と題する論文を、大正11年の機関誌に6回も著し、RC造の主に施工方法について詳細に説いていたことも、増田の登用に繋がったものといえる。増田は市内15校の小学校に関わるなど最多の実績を残すとともに、広島で設計した建物が被爆したにも関わらず現存するなど、建築技術者として卓越した実力の持ち主であった。

■建築的特徴

精華小学校は、6年制の小学校の機能のほか幼稚園、実業教育などの機能を必要とされた。

同校は、工事着手昭和2年3月、竣工同4年11月、建築費59万7770余円、高さは北東20m、西棟19.5m、南棟5.72m、校地4161㎡、建築面積1810㎡、延べ面積8300㎡である。配置は、富士岡の論文「大阪市小学校校舎の実状と其計画の大要」に述べられているように、「校舎の位置、形状、方向坪数校舎の位置は校地の北部と西部に位置せしむるが最も衛生的であるとされる、即ち東南部を開けて運動場とする」とあり、北部に体操室、講堂など、西部に玄関、校務室、応接室、各学級室などを設けている。構造は、講堂などのある北棟校舎の主要部は鉄骨鉄筋コンクリート造で、それ以外をRC造の耐震耐火構造とする。所要室は、地階は家事室、手工室、割烹室、柔道室、灌水室、含嗽室、帽子外套室、物品室庫、汽罐室、汚水浄化槽など、1階は、玄関、通用門、校務室、応接室、集会室、医務室、当直室、使丁室、湯沸場、体操室、遊戯室など、2階は、学級室、理科室、用具室、

文庫など、3階は、学級室、国史地理室、図書室、裁縫室、作法室など、4階は、学級室、唱歌室、裁縫室、作法室、校務室、ミシン室、講堂など、屋階は機械室を設け質の高さを誇った。北側と南側にそれぞれエレベーターを1基ずつ設置していたことも特筆すべきことである。また、RC造に手慣れた増田の手法が、独特の梁の配置の学級室・体操室やダイナミックなヴォールト天井を持つ講堂など、新しい空間を創り出していた。なお面積、室名は『改築落成記念』に基づいている。

■閉校後の大阪市立精華小学校

精華小学校は、平成7年3月31日閉校、同年4月1日大阪市立南小学校と統合した。

同年「精華校園跡地活性化協議会」が設立し、翌年大阪市は学習ルームとして地域に開放した。同15年大阪市が北棟1階体操室を約520㎡、200席規模の「小劇場」に1億8千万円をかけて改修することを決定し、翌年耐震強度について再調査した。同年大阪市、地元関係者、演劇人の構成で「精華小劇場活用実行委員会」を発足させ、10月23日「精華小劇場」を立ち上げ、大阪の芸能文化の向上に寄与した。同19年大阪市は、未利用地等活用方針策定基準を定めた。その基準は、処分検討地を基準1～3、継続保有地を基準4～6、事業予定地を基準7～9として3部門9段階の構成である。精華小学校は、処分検討地の基準2とされ、基準2とは「活用見込みがなく当該地の有効活用や税外収入確保に資するため処分を検討することが適当と判断されるもの（処分時に処分検討地から除外）、処分することにより周辺地域の発展に寄与するもの」である。すでに、同23年3月末学習ルームや精華小劇場は閉鎖され、現在処分を待つだけである。しかし、地元住民の熱意と寄付とによって誕生した、市内に唯一残る近代のRC造小学校建築を解体してよいものだろうか。大阪市は、大正13年竣工の大阪市立工芸高等学校本館（平成12年大阪市指定文化財、同20年近代化産業遺産）の永久保存を平成6年に決定し、教育の場として活用し続けている。精華小学校も学習ルーム、精華小劇場、密集市街地内の災害時の避難所等としての活用を再度検討していただくことを、大阪市に強く要望します。

参考文献

- ・『日本建築学会計画系論文集』石丸紀興、李明、藤岡洋保、川島智生
- ・『増田清研究成果』上諸尚美
- ・精華小校舎愛好会代表分田よし子主催「建築勉強会」資料

（わだ やすよし／大阪市立都島第二工業高等学校）



作品募集

(社) 日本建築協会では、「建築と社会」作品作風頁に掲載する作品を募集しています。掲載作品の用途は問いません。応募をお待ちしています。

作品掲載料 カラーグラビア2頁 250,000円 (消費税込み)

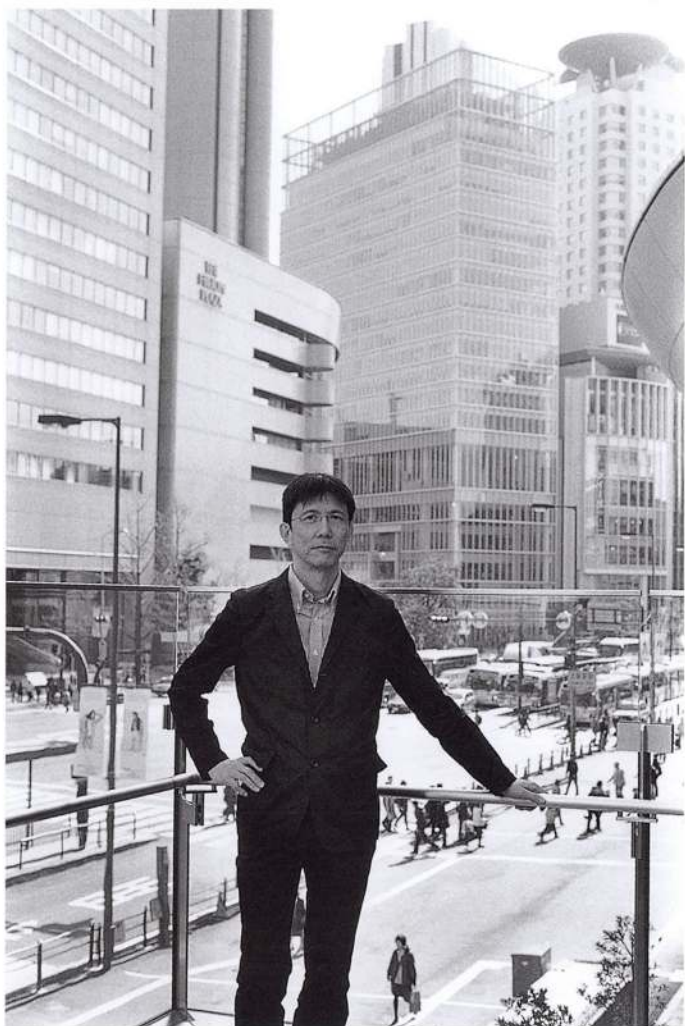
* 作品作風小委員会による選定があります。

* 会員に限らずどなたでも応募できます。

問合せ先 社団法人 日本建築協会 編集事業課
TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984
E-mail : h-katayama@aaj.or.jp

原田 哲夫

—HARADA TETSUO—



「第2吉本ビルディング」を背にして

経歴

1961 大阪市生まれ
1984 京都大学工学部建築学科卒業
1986 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
竹中工務店入社
1987～ 竹中工務店大阪本店設計部

受賞歴

生田神社震災復興：兵庫県人間サイズのまちづくり賞
HEP FIVE：BCS賞
第2吉本ビルディング：大阪建築コンクール大阪府知事賞
千趣会新本社ビル：日経ニューオフィス賞

境界の解放

開発が進む大阪駅周辺の西梅田に、ひととき透明な表情を見せるビルがある。東梅田には、街中に突如として現れる巨大な観覧車を取り込んだ複合施設がある。どちらも大阪人なら世代を超えて誰もがいろいろな形で利用し、記憶のワンシーンに残っている場所に違いない。この第2吉本ビルディング（ヒルトンプラザウエスト）とHEP FIVEは今まさに「大人な街」と「若者の街」大阪を代表するランドマークとして親しまれている。次々と都市に新たな空間の質を生み出し、自然と人々のにぎわいをもたらす建築を手掛ける原田哲夫氏に話を伺った。

「観覧車に乗りましょう」と原田氏に誘われ、大人4人はゴンドラに乗りこんだ。眼下に広がる大阪の街並みを望みながら、梅田の街づくりの変遷について話をして頂いた際、「もともと、建築建物単体を作ることより、都市再開発がしたいと思っていた」と語られた。原田氏の原点がそこにある。

都市再開発に携わる機会は、竹中工務店に入社後すぐに訪れる。阪急が茶屋町アプローズの開発に着手した際に、都市的アトリウムのネットワークを構成する一方で劇場の計画担当を任された氏は、劇場が人で埋め尽くされた時に空間が変わる—その人垣の圧倒的な迫力に、建築に命が吹き込まれる感覚を覚えた—という。そこから人の動き（アクティビティ）や関係性をデザインすることが建築をデザインすることだと実感する。

その次に訪れた機会はHEP FIVEである。外装は商業施設であることと旧ナビオ阪急との一体性を考慮し、旧ナビオ阪急をリファレンスしたパネルにより外部と内部を遮断した。しかし、観覧車と店舗、それらをつなぐアトリウムの配置が勝負どころだと検討を重ねた。結果、そのせめぎ合うところ（境界）に人々の出会いや出来事が生まれるとして、にぎわう人々の活動が交錯する立体的で開放的なアトリウムを生み出す。同時に、アクティビティが徐々に都市に姿を見せ始めるきっかけとなる。ここから氏は「建築の境界が都市に溶け出し始めることに興味を覚えた」という。

そして第2吉本ビルディングにより、氏の思いは実現する。一切の壁という壁が取り払われ、人々のアクティビティがまるで平面を歩くかのごとく立面上に現れる。その変化に富んだ豊かな表情は、前述した劇場での迫力を凌駕する。ここでは都市と建築、地上と地下、内部と外部が立体的に接続し、より透明感を際立たせている。「手掛ける計画は大規模なため、5年に1度しか実現しないので失敗できない。だから猛烈にスタディーする」と言うように、ここまでの透明な建築を実現する為にどれほどの構造的・法的難題をクリアしなければならなかったかは、想像するにあまりある。

さらに原田氏はその手法と技術力を次の次元に展開させる。大阪の阿倍野区に日本一の高さを誇る壮大な複合建築を生み出そうとしている。第2吉本ビルディングを4、5本積層させたボリュームは21万㎡に及ぶ。多用途なプログラムをいかに消化するかが大変だというのが、生み出す場所は大阪の下町であるので、町がもつ親密感のある美学を失うことなく、人々の暮らしそのものを外にあふれ出させ建物と地域をつなげる「絆」にしたいという。

そこでもテーマがぶれることはない。一貫して、アクティビティをいかににじみださせるかにこだわる。そして、大阪の住吉で生まれ、長屋での環境、学生時代に京都の町屋で過ごした氏の都市計画に対する尺度は、ここ日本において、「あたりまえでふつうなものを生み出すこと」だそう。しかし、その尺度で取り組む思考の先には、だれもが想像し得る世界を超える。境界は解き放たれ、結果としてここにしかない唯一無二の、垂直に伸びる新しい都市が展開される風景が広がっているようだ。

聞き手 影林督諭（安井建築設計事務所）
写真撮影 河合止揚

まるごとワンストップソリューションへ。

LIXIL

Link to Good Living



すべてを提供できるワンストップソリューション企業となるために。トステム、INAX、新日軽、サンウエーブ、東洋エクステリアは、それぞれの製品とサービスをひとつに集結。2011年4月、株式会社LIXILとして誕生しました。お客さまのビジネスを拡げる、幅広いラインアップと総合的なソリューション。これからも、皆さまのビジネスを力強く支えます。

2011年3月11日に発生しました「東日本大震災」により被災された皆さまには、心よりお見舞い申し上げます。

株式会社LIXIL

ビル関西支店 大阪市中央区修道町4-4-10 KDX小林修道町ビル6F
www.lixil.co.jp/products/building_equipment/ TEL.06-4707-6400

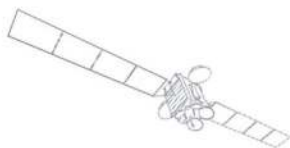
住む。暮らす。生きる。LIXIL

トステム・INAX・新日軽・サンウエーブ・TOEXは、株式会社LIXILの製品ブランドです。株式会社LIXILはお客さまの多様なニーズに対応した商品とサービスを提供してまいります。

MITSUBISHI

三菱電機

Changes for the Better



家庭から宇宙まで、エコチェンジ。

家庭・オフィス・工場から社会インフラ、そして宇宙にいたるまで、あらゆる事業を通じて
低炭素社会・資源循環型社会の実現にチャレンジし、持続可能な社会に向けて貢献していきます。

そのために、まず私たち社員一人ひとりが自らを変革し、

製品の開発・生産・輸送、お届けする製品・システム・サービス、そしてリサイクル、

それぞれの場面で変革を推進していきます。

お客さま、そしてその先にある社会とともに、世の中をエコに変えていく。

「eco changes (エコチェンジ)」は、私たち三菱電機グループの決意表明です。

エコチェンジ

検索

◎この広告についてのお問い合わせは、adv.webmaster@f.MitsubishiElectric.co.jpまたはFAX.03-3218-2321(宣伝担当)まで。

三菱電機株式会社

都市のみどりを 使いこなす



●講師からのメッセージ

- ①何より重要なのはシビックプライドを醸成し、「わたし(たち)のまち」として都市に積極的に参加していく状況をつくること。
- ②いくら美しい公共空間でも、そこに人がいなければ、そして人がうまく使いこなしていなければ、豊かな環境とは呼べないのではないか。
- ③緑は既成市街地においても、また新しい開発においても、都市に対する誇りと愛着を育むツールとして重要である。

■日本建築学会近畿支部環境保全部会

主査：三好庸隆（武庫川女子大学教授）

幹事：伊丹康二（大阪大学大学院助教）

上山 卓（株式会社コープラン）

北尾靖雅（京都女子大学准教授）

高岡伸一（大阪市立大学都市研究プラザ特任講師）

八木康夫（関西学院大学教授）

日本建築学会近畿支部環境保全部会では、平成20年度から、「なぜ日本の住環境は美しくないのか」という問題意識のもと、重要と考えるテーマについて先端的な取り組み、研究をされている講師をお迎えし、公開研究会を行っています。

第9回公開研究会

第9回となる公開研究会は、「都市のみどりを使いこなす」をテーマに、兵庫県立人と自然の博物館の研究員である武田重昭氏を講師に迎えて開催しました。（開催日：2009年2月10日、会場：大阪市立大学文化交流センター・大セミナー室）

なお、本公開研究会は、(社)日本建築協会の後援を得ています。

これまでの講師陣と比べて若手である武田先生は、昨年まで都市再生機構で実務に携わっておられました。いうまでもなく、美しい住環境の形成に緑は重要な存在です。今回は身近な緑の問題と環境の美化をテーマに、具体的な事例を交えてご講演いただきました。

講演

1. なぜ日本の住環境は美しくないのか

例えばひとつの象徴的な事例として、某マンションメーカーが出した新聞広告がある。そこには建物の写真もなければ、周辺の緑の写真もない。有名芸能人親子が全面に載っているだけで、この広告をみて市民はマンションをかう。他にも著名なアイドルグループがCMに採用されたというだけで、実際に募集倍率が上がったりもする。そこには、やはり大きな問題があるだろう。日本人の市民性、民度の未成熟といったことと同時に、このようなプロモーションを許してしまう、専門家側の責任もある。これでは日本の住環境は決して良くならない。行政も同じようなことをやっている。例えば「ゆるキャラ」と呼ばれるようなキャラクターをつくる。まちおこしといってキャラクターで人を集め、お金を落とせばそれでよしと考える風潮があって、これも問題である。

しかしその一方で、しっかりとした街のブランディングやプロデュースを考える事例も目立つようになってきた。芸能人やキャラクターではなく、住環境の良さを訴える広告、例えば「早起きをして散歩を楽しめるような」環境を前面に打ち出すテレビCMなどである。こういった街のブランディングという視点で住環境を捉えることは、ヨーロッパなどではしっかりと出来ているが、日本にはまだまだ欠けている。その時、緑というものは非常に重要なツールとなる

だろう。

2. シビックプライド

都市再生機構に在籍している時に、シビックプライド研究会に個人的に参加していた。シビックプライドという概念はいわゆる「愛国心」「郷土愛」とは異なる。よく知られる「I Love NY」に近いが、やはり少し違う。「私はニューヨークが好きです」、つまり「私」と「NY」をわけて考えているところが違って、シビックプライドでは「私」自身が「街」の一部であるという捉え方が大切である。例えば「I Amsterdam」といった事例のように。こういったキャンペーンを通じて市民に積極的に都市への参加を促し、そこから立ち上がる都市空間こそが、魅力的な住環境へとつながっていくのではないか。

シビックプライドとは都市に対する態度（アティチュード）であり、同時に都市で共有される像（ビジョン）でもある。そのようなシビックプライドを育むためには、人々の思い、また行政の思いをうまくつなぐ都市の新しいコミュニケーションが必要とされるが、その際にもやはり緑は重要なツールとなってくる。

バルセロナ

バルセロナ市コミュニケーション局は市民に呼びかける様々なキャンペーンを行っている。

2005 年末から新しくなった基幹キャンペーンが「Barcelona Batega!」(バルセロナがドキドキする!)

「あなた(=市民)がドキドキすると、バルセロナもドキドキする。何百万もの(市民の)夢があり、何百万もの(市の)プロジェクトがある。それらを結びつけて一緒に夢を実現しましょう」と呼びかける。



シビックプライド・キャンペーンの事例としては、バルセロナの「Barcelona Batega!」が知られる。「あなたがドキドキするとバルセロナもドキドキする」という意味が込められた、市のプロジェクトだ。デザインされたバナーが街中を飾るが、その布地はリサイクルされて鞆となり、一般に販売される。人々がそのバッグを持って街を歩き回れば、更にキャンペーンが広がるというわけだ。ポイントは行政が、バルセロナを愛しそこに暮らす若手のデザイナーを起用している点で、若い感性が非常に効いているし、市民も好感を持って受けとめている。加えてインターネットメディアも積極的に活用することで、市民の理解度と民度を上げている。

そのようなキャンペーンを効果的に実施するには専門の組織が必要だが、その事例としては、イギリスのCABEなどが有名だ。1990年に設立された組織で、開発などのハードではなく、ソフトによる都市環境の向上に取り組んでいる。

3. パブリックスタイル

パブリックスタイル研究所というNPOにも在籍していて、新しい公共のありかた、担い手としての市民のありかたについて考えている。やはり公共空間で人が出会って触れあって話すということが、都市に対する誇りや愛着につながっていく。特にオープンスペースの使いこなしによる生活の質の向上が、都市のムードを高めて魅力を形成していくためには不可欠だ。それには公共空間における調査・計画・デザイン、活動から情報発信までを、トータルに実践することが必要となる。

これまでの日本の都市のつくりかたは、どちらかというと私的な個人生活の充実に注力してきた。これからもう少し公共に開いた生活の質を見直して、他者との触れあいのある生活の豊かさを、どのように獲得していくか考えなければいけない。そのような生活のありかたをパブリックライフと呼んで活動している。

良い事例としてオープンガーデンという取り組みがある。イギリスで古くからあるものだが、これは美しく手入れされた個人の私的な庭を、ある一定期間オープンガーデンとして一般開放し、誰もが自由に入って鑑賞できるようにするものだ。今では日本にも各地にコミュニティがあり、盛んに実施されている。自分のための私的な空間を少しだけ公共に開いてやることで、景観の美化につながり、庭を訪れる市民も、また庭の所有者も大きな満足を得ることができるのだ。

そのような機会を、都市のなかでできるだけ多くつくっていききたい。その活動のひとつがピクニックだ。街には多くの屋外空間があるが、いくら美しくてもそこに人がいなければ良い住環境とは呼べない。日本人はそのような空間をうまく使いこなすことがまだまだ苦手だが、例えば2009年の水都大阪イベントと連動した企画として、ピクニックを通じた川辺のオープンスペースの再生に取り組んだ。堅苦しいまちづくりではなく、ピクニックに参加することで、普段使われない川沿いの公園などを体験してもらい、その楽しさ、街やコミュニティに与える効果を知ってもらって、最後に「ピクニック宣言」を策定した。

●-よこ 水辺ピクニック '09

[illegible]

NPOではその他に屋外のライフスタイルの情報発信として「OSOTO」の発行や、今後の課題としては屋外空間の評価、「公園ミシュラン」のような格付制度にも取り組んでいきたい。これからはインフラの充実から、その上で展開されるソーシャルキャピタルとしての社会資本の形成が何より重要となる。

4. 既成市街地のみどり

既成市街地の緑の話として、学生の頃から取り組んでいる震災復興の緑のありかたを取り上げる。震災経験というのは特異な事例であるが、街の更新が極めて短期間に観察できるという意味では、今後の市街地更新を考える際の重要なサンプルとなりうるものである。神戸市東灘区・魚崎という被災地を対象にして、震災前と震災後の復興のなかで、緑の変化に着目した。

震災前の緑に比べて、震災後100日を経過した時点で緑の量は大きく減っている。これは被災した建物等を除去する際に邪魔な緑も一緒に撤去した結果である。調査では緑を3種類に分類した。街路樹や公園のような公共の緑、私有地の緑のうち敷地の前面などにあつて、景観的に公共が共有できるいわば半公的な緑、そしてバックヤードなどにある完全に私的な緑である。見比べてみると、街の緑のほとんどは私有地の緑であることがわかる。しかし、私有地の緑には何の担保性もないので、所有者の個人的な事情によって街の緑は大きな影響を受けることとなる。そのようなことが震災の復興過程を追いかけることで明らかになった。また、接道部分の構成の変化をみると、震災前は緑が多くみられたのに対し、震災後に再建された場合は、前面道路ギリギリまで建物の外壁面が迫っている事例が多く、緑が減少している。

つまり、私的空間の緑に大きく左右される住環境で、街の魅力をつくり出すためには、一人ひとりの街に対する誇りや愛着の醸成が重要ということになる。そのきっかけづくりとして、緑の空間の使いこなしを活性化させていくことには大きな意味がある。

5. 団地・ニュータウンのみどり

長く実務で団地をやってきた。団地というものは、出現した当初は誇りと愛着に満ちた住環境であったが、現在はそこにあった記憶やコミュニティが顧みられることなく建て替えが進められている。最近問題になっているのが団地の高齢化と単身世帯化だが、見方を変えればそもそも当初の均一的な世帯構成が特異だったのであって、高齢世帯を中心に、様々な年代が混在する街としてやって成熟してきたといえないこともない。そのための屋外空間における触れあいといったものを考えていきたい。建て替え事業のなかで、かつての記憶やコミュニティを、風景を通じてどうやって再生していくか。

団地の屋外空間の活用の仕方として、かつての団地がもっていた緑のポテンシャルを活かしなが
ら、居住環境を新たに形成することができれば、
相当に豊かな環境を得ることが可能だ。

またニュータウンとしては、港北ニュータウンのグリーンマトリクスが緑地の扱いとしてよく知られている。

6. みどりを使いこなすライフスタイル

日本建築学会都市計画学会の編集委員をしていて、学会誌で1960年代の都市計画やその思想を振り返る特集を組んだ。そのなかで津端修一さんのインタビューを行った。1951年に丹下研究室を卒業した津端さんは、レーモンド事務所を経て日本住宅公団の創設に参加し、1960年に高蔵寺ニュータウンの計画に携わった。その後、広島大学教授を経て現在は自由時間評論家を名乗り、300坪ある自分の敷地の2/3を畑にして、毎日自分が食べる野菜を採って半自給自足の生活を送っている。そのようなライフスタイルを30年来提案している津端さんは、もともとニュータウンでやりたかったのは、こういうライフスタイルだと話してくれた。インタビューに訪れた際には畑の野菜でパーティーを開いていただき、都市計画とはつまりこういうことだと語られたのが印象に残る。理論で難しいことをやるのが都市計画ではなく、訪れた人をもてなして、少しでも多くの人に生活の豊かさを伝えていくのが都市計画だと。

今、都市再生機構でも同じようなことを中根・金田台で展開している。緑住農がテーマだ。これは農地を含んだ土地区画整理事業で、農地を換地してバックヤード側にまとめ、居住者が農作業できるようにしたもの。フロントヤード側は景観緑地として、市が管理するオープンスペースとなっている。バックヤードの農地は隣地と連続しているので、農地の帯となって散策も可能だ。緑と住宅地と農地をセットで販売する試みであり、現在の都市再生機構もいろいろと知恵を絞っている。

7. 人生に寄り添うみどり

緑を、都市に対する誇りと愛着を育むツールとして使いこなすことが重要である。例えば総合設計制度で設けられた公開空地をどのように使いこなせばよいのか、また日本の公園はあらゆる禁止看板で制限ばかりだが、「みんなの公園」という意識ではなかなか良くなっていかない。そうではなく、「私たちの公園」と思える場所をひとつでも多くつくるのが、緑地のありかたとして大切だと思う。単なる賑わいづくりだけでなく、人生なくてはならない存在として、これからの都市再生のなかでの緑の持つ意味を考えていきたい。

(文責：高岡伸一／大阪市立大学都市研究プラザ特任講師)

Information

▶第2回 ヒートアイランドに配慮 したまちづくり・アイデアコンペ ～大阪の夏を快適に走る～

ヒートアイランド対策に産学官民が連携して取り組む「大阪ヒートアイランド対策技術コンソーシアム」(大阪HITEC)では、大阪におけるヒートアイランド現象を緩和し低炭素型社会の形成に役立ち魅力ある都市空間を創出する空間デザインと大阪の夏を涼しく過ごす夢あふれるユニークなアイデアを広く募集する。応募区分は「学生の部」と「一般の部」に区別し、審査・顕彰の際に考慮するものとする。

■提案内容

大阪の夏を涼しくし、都市の魅力を向上させ、大阪のまちでマラソンやジョギング、ウォーキング等を楽しめるまちの提案。

①都市デザイン部門

ヒートアイランド現象を緩和し快適で魅力ある都市空間デザインの提案。

②技術アイデア部門

大阪の夏場でも快適にマラソン等できる都市環境や屋外環境を創出する技術アイデアの提案。

■提出物

①都市デザイン部門

デザイン趣旨、各種図面、イメージパース、模型写真、対策技術の内容などをA3サイズ2枚に表現

②技術アイデア部門

アイデア趣旨、イラスト、文章(図表、グラフ含む)などをA3サイズ1枚に表現

■賞

①都市デザイン部門

最優秀作品賞1点(賞状及び副賞10万円)、優秀作品賞数点(賞状及び副賞2万円)、特別賞1点(賞状及び副賞5万円)

②技術アイデア部門

最優秀作品賞1点(賞状及び副賞10万円)、優秀作品賞数点(賞状及び副賞2万円)、特別賞1点(賞状及び副賞5万円)

*優秀賞は、応募区分(学生の部、一般の)を考慮する。

■事前申込

2011年6月10日(金)～7月10日(日)(当日消印有効)

氏名、応募部門(都市デザイン部門・技術アイデア部門)、応募区分(学生の部・一般の部)を記入の上、電子メールにて申し込む。

送信先 info@osakahitec.com「大阪HITECコンペ係」まで。(送信後の変更対応可)

■作品提出期間

2011年8月1日(月)～8月20日(土)まで(当日消印有効)

■審査

8月下旬

■作品展時期間・表彰式

9月上旬

詳細は大阪HITECホームページで。

<http://www.osakahitec.com/> (5月下旬公表予定)

▶カンディンスキーと青騎士



ヴァシリー・カンディンスキー《「コンポジションⅦ」のための習作2》1913年

20世紀初頭のドイツ・ミュンヘン。ロシア生まれの巨匠ヴァシリー・カンディンスキー(1866—1944)は、仲間とともに1911年、新しい美術運動を展開させるべくグループ「青騎士」を結成した。彼らは展覧会の開催や書籍の刊行を通して、モダン・アートの歴史に輝かしい足跡を残した。本展では、カンディンスキーの伴侶であった画家ガブリエーレ・ミュンター旧蔵の作品を中心に、ミュンヘン市立レンバウハウス美術館が所蔵する世界屈指の青騎士コレクションの中から代表作を含む約60点の作品と当時の写真や資料によってこの美術運動を紹介する。

会期 2011年4月26日～6月26日(日)

10:00～18:00(金、土は20:00まで)

休館日月曜

会場 兵庫県立美術館 企画展示室

神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

078-262-0901

観覧料 一般1,300円、大学生900円

高校生・65歳以上650円

中学生以下無料

招待券は日本建築協会(06-6946-6981)へ。

▶2011年度コレクション展 I

特集展示

「伊藤文化財団設立30年記念 —寄贈作品の精華—」

伊藤文化財団は、伊藤ハム(株)創業者・伊藤傳三の意志により、兵庫県下の美術館や文化施設等のいっそうの充実を期すために、民間の立場から協力することにより、県民文化の向上発展を期すことを目的に1981(昭和56年)に設立された。以来、30年にわたっての寄贈

作品は約700点、寄贈図書は約4,000点にのぼる。本展では、安井曾太郎、小出楯重の貴重な素描、現代美術から後期の「具体」の重要な作品群など含め幅広い寄贈作品の全容を紹介する。

会 期 2011年3月26日～7月3日(日)

会 場 兵庫県立美術館 常設展示室
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL.078-262-0901

観覧料 一般500円、大学生400円

高校生・65歳以上250円、中学生以下
無料

招待券は日本建築協会 (06-6946-6981) へ。



本多錦吉郎《羽衣
天女》1890年

▶大英博物館古代ギリシャ展 —究極の身体、完全なる美—

美術、文学、哲学、スポーツ—さまざまな文化が花開いた古代ギリシャで“人類史上もっとも美しい”と評されるギリシャ美術は、その後の西洋文明の「美」の手本となった。本展では、日本初公開の《円盤投げ(ディスコボロス)》をはじめ、大英博物館が世界に誇るギリシャ・コレクションから厳選された彫刻、レリーフ、壺絵など135点を紹介する。

会 期 2011年3月12日～6月12日(日)
9:30～17:00(金・土は19:00まで)
休館日月曜(5/2は開館)

会 場 神戸市立博物館
神戸市中央区京町24番地

観覧料 一般1,500円、高大生1,100円
小中生600円

問合せ 神戸市立博物館 (078-391-0035)
[展示構成]



円盤投げ(ディスコ
ボロス)
後2世紀(原作:前
450—前440年頃)
作品写真
©The Trustees of
the British Museum.

第一章／神々、英雄、別世界の者たち、第二章／人のかたち、第三章／オリンピアとアスリート、第四章／人々の暮らし

[主な作品]

円盤投げ(ディスコボロス)、ゼウス小僧、スフィンクス像、アフロディテ像、エロス像、黒像式アンフォラ：ヘラクレスのネメアのライオン退治、後期スペドス型女性像、コリントス式兜、ヘラクレスの結び目のある冠、耳飾

招待券は日本建築協会 (06-6946-6981) へ。

▶草書の美—近世日本の書聖 貫名菴翁の作品から—

書家である貫名菴翁(1778—1862)は、明治期の日下部鳴鶴や窪谷一六らの高い評価から、「近世日本の書聖」と称された。

本展では、館蔵山下コレクションの貫名菴翁作品群から、晋・唐の書風を見事に昇華してはや痕跡を留めない自然妙有の境地に到った菴翁晩年の完成期の書風「菴翁書風」作品と、最晩年オ「中風様書風」作品を中心に紹介する。

会 期 2011年4月2日～5月29日(日)
9:00～17:15 休館日月曜
(但し、5月2日は開館)

会 場 堺市博物館1階展示場

観覧料 一般200円、高大生100円
小中生50円、65歳以上、障害あるか
た無料、堺市内在住・在学の小中生
は室生

▶ルオーと風景 —パリ、自然、詩情のヴィジョン—

20世紀フランスを代表する画家ジョルジュ・ルオー(1871—1958)は、生涯「風景」をテーマに取り上げ描き続けた。ブルターニュ地方やヴェルサイユ、そしてパリの下町の情景など。やがてこうした舞台にキリストが登場し、ルオーの風景画は神秘的な光に包まれた独自の静謐な聖書風景へと向かう。

本展は、ルオーの初期の風景画など国内所蔵の名品の他、ブルターニュやヴェルサイユを描いた日本初公開作品等フランスから特別出品される。油彩、水彩、版画、資料等約90点により、彼の最も内密な創造の源を彼が出合ったフランスの風景に求め、画家と風景の関係を読み取っていく。

会 期 2011年4月23日～7月3日(日)
10:00～18:00 休館日月曜

会 場 パナソニック電工 汐留ミュージアム
ハローダイヤル 03-5777-8600
東京都港区東新橋1-5-1
パナソニック電工ビル4階

入館料 一般500円、高大生300円、
小中生200円

▶水・火・大地 —創造の源を求めて—

九州新幹線開通を記念して、熊本が誇る水(豊かな地下水)・火(阿蘇・不知火)・大地をテーマとした展覧会である。

出品作家は、ニューヨークを制作拠点として活躍する蔡國強と千住博、世界有数美術館の多くがその作品を所蔵する杉本博司、またイギリス自然派を代表するディヴィッド・ナッシュ、リチャード・ロング、アンディー・ゴールズワージー、そして、見えない水をテーマとした遠藤利克、熊本の土を素材とした浅井祐介の8名である。

会 期 2011年4月9日～6月12日(日)
10:00～20:00(最終入場は19:30)
休館日月曜

会 場 熊本市現代美術館企画展示室I・II
熊本市上通町2-3びふれす熊日会館3F
TEL.096-278-7500

観覧料 一般1,000円、高大生500円、
小中生300円
熊本市、福岡市、鹿児島市内の小・
中生は無料



遠藤利克「遠藤利克展／供儀と空洞」
国際芸術センター青森 2009年 展覧会風景

▶ホンマタカシ ニュー・ドキュメンタリー

ホンマタカシは、現代の写真表現において第一線で活躍し、国際的に注目されている日本人写真家の一人である。80年代後半から活躍しはじめたホンマは、90年代ロンドンへ渡り様々な方法で写真を制作する可能性に触れていく。帰国後も活躍を続け、99年には『東京郊外』で、木村伊兵衛写真賞を受賞し、現在に到る。本展では、2005年以降手がけた作品群を中心に展示する。

会 期 2011年4月9日～6月26日(日)
11:00～19:00(金・土は20:00まで)
休館日月曜

会 場 東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2

TEL.03-5353-0756

観覧料 一般1,000円、高大生800円、
小中生400円



《Trails》より 2010

▶医療福祉建築賞2010受賞作品

「医療福祉建築賞」は20回の節目を迎えた回であった。今回の応募点数は24点であり、3点が選ばれた。



○メディカルモリノビル（プレスト&イメー
ジング先端医療センター附属クリニック）

所在地 神奈川県川崎市麻生区万福寺6-7-2

延床面積 6,317㎡

竣工年月 2008年12月

開設・管理者 中新産業(株)+学校法人マリアンナ
医科大学

設計者 KAJIMA DESIGN

施工者 鹿島建設(株)

写真撮影 (株)エスエス東京



○長岡市子育ての駅千秋「てくてく」

所在地 新潟県長岡市千秋1-99-6

延床面積 1,282㎡

竣工年月 2009年3月

開設・管理者 長岡市・長岡市教育委員会子ども
家庭課

設計者 (株)長建設計事務所+長岡造形大学
山下研究室

施工者 建築/長鉄・池田千秋が原南公

園施設建築特定共同企業体

写真撮影 山下真理子



○久留米大学医療センター

所在地 福岡県久留米市国分町155-1

病床数 300床

延床面積 22,548㎡

竣工年月 2007年4月

開設・管理者 学校法人久留米大学・久留米大学
医療センター

設計者 (株)日建設計

施工者 大和建設(株)：Ⅰ期、(株)大林組：Ⅱ期

写真撮影 (株)伸和

▶「平成22年度 省エネ照明デザイン インワード」受賞作品決定

省エネ対策を一層推進するため、優れた省エネ効果と高いデザイン性の両立を達成している施設を2010年12月より募集した。この度、グランプリ及び優秀事例受賞施設が決定した。結果内容は以下のとおり。

■グランプリ受賞施設



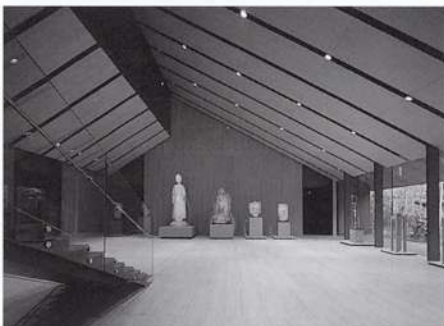
①商業施設部門

『天井照明のALL LED化を多数のフロアで
実現した世界初の百貨店』

施設名 大丸大阪・梅田店

所在地 大阪市北区

事業者 (株)大丸松坂屋百貨店



②公共施設・総合施設部門

『美術館展示照明をはじめ、建物全体のベ
ース照明にLEDを採用し、魅力的な空間と高
い省エネ性を実現した次世代型施設』

施設名 根津美術館

所在地 東京都港区

事業者 (財)根津美術館



③その他施設部門

『あらたなるゆとりのシニア邸宅を実現する
「リズムに考慮した省エネ照明デザイン」』

施設名 東急ウェリナ大岡山

所在地 東京都渋谷区

事業者 東京急行電鉄(株)

優秀事例受賞施設

■商業施設部門（8作品）

・アリオ橋本・ケンタッキーフライドチキン
石神井公園店・コープさっぽろ西宮の沢店・
スターバックスコーヒー福岡大濠公園店・
ZENT豊田本店・ドトールコーヒーショップ
外苑前店・長野トヨタ チューカーボックス
川中島店・パロー草津店

■公共施設・総合施設部門（6作品）

・大林組技術研究所 本館・東京国際空港国
際線ターミナル・阪急電鉄 摂津市駅・港区
立芝浦小学校・芝浦幼稚園・ユビキタス競創
広場CANVAS・ローム京都駅前ビル

■その他の部門（3作品）

・NHK横浜放送局・Green Avenue あざぶ
の丘・ポーラ銀座ビル

総会

第2回通常総会

3月23日(水) 16:00~16:30

出席者 中井会長ほか722名

(1,436口 委任状含む)

場 所 OMM地下1階ギャラリー

議 事 (1) 平成23年度事業計画(案)

(2) 平成23年度収支予算(案)

理事会

第2回通常理事会

3月23日(水) 15:00~15:35

出席者 中井会長ほか45名(委任状含む)

場 所 OMM地下1階ギャラリー

議 事 (1) 平成23年度事業計画(案)

(2) 平成23年度収支予算(案)

(3) 報告事項

編集委員会

第12回編集委員会

3月9日(水) 17:30~20:00

出席者 設楽委員長ほか6名

議 事 (1) 4月号特集「まちなかのサードプレイス」の報告

(2) 5月号特集「新しい生活空間」の報告

(3) 6月号特集「ECO」の報告

(4) 7月号特集「建築と土」の報告

(5) 8月号特集「駅」の報告

(6) 各小委員会・分科会からの報告

(7) 読者と選ぶ「建築と社会」賞1次審査

(8) 収支状況報告

第2回「駅」特集委員会

3月16日(水) 18:00~21:00

出席者 設楽委員長ほか3名

議 事 8月号特集 企画案検討

第10回構造分科会

3月4日(金) 18:00~19:30

出席者 石田幹事ほか4名

議 事 (1) 「構造の頁」の企画

(2) 新年度の分科会体制

(3) 12月号構造特集の企画

第9回施工材料分科会

3月1日(火) 17:00~18:00

出席者 中川幹事ほか4名

議 事 11月号特集

第10回設備分科会

3月2日(水) 18:00~20:15

出席者 赤澤幹事ほか3名

議 事 (1) 「設備の頁」の企画

(2) 見学会の企画

(3) 講習会の企画

(4) 6月号設備特集の企画

(5) 新企画の提案

(6) 超高層・高層マンションやオフィスビル計画時への提案

(7) “測定機器シリーズ”

第11回作品作風小委員会

3月24日(木) 19:00~20:30

出席者 池上副委員長ほか5名

議 事 (1) 作品の選定

(2) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告

(3) 「gallery」掲載報告・予定

(4) 前回の編集委員会の報告

第12回広告企画小委員会

3月9日(水) 16:30~17:30

出席者 設楽委員長ほか4名

議 事 (1) 4月号特集「まちなかのサードプレイス」

(2) 5月号特集「新しい生活空間」

(3) 6月号特集「ECO」

(4) 7月号特集「建築と土」

(5) 新シリーズ「素材」

(6) 収支状況

第12回10年委員会(現場見学会)

3月3日(木) 18:30~19:30

出席者 設楽委員長ほか4名

議 事 (1) 第5回「建築の現場」見学会について

(2) 今後のスケジュール

第13回10年委員会

3月4日(金) 11:30~13:40

出席者 設楽委員長ほか3名

議 事 (1) 橋爪紳也氏へのインタビュー 大阪「かくれたええところ」

そうせい(創生)プロジェクトの今後の望むこと

(2) プロジェクトの今後の進め方

出版委員会

第11回出版委員会

3月17日(木) 18:00~19:00

出席者 上原委員長ほか8名

議 事 (1) プロのノウハウと特装本の経過報告

(2) 進行中のテーマについて

事業委員会

第7回情報見学小委員会

3月10日(木) 18:30~18:45

出席者 瀬戸川委員長ほか8名

議 事 (1) 「関西大学堺キャンパス」見学会について

(2) 来年度事業案について

教育委員会

第57回工高生デザインコンクール募集規定作成会

3月9日(水) 18:30~20:45

出席者 長坂審査委員長ほか審査員5名・神野副委員長ほか委員5名

議 事 (1) 第57回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討

(2) 今後の作業予定、その他

特別委員会

第20回 群像(インタビュー)

3月9日(水) 9:00~12:00

出席者 奥 貴人(インタビュアー)ほか7名

議 事 関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー(株)ケイオス 澤田 充氏

第21回 群像(インタビュー)

3月28日(月) 9:30~12:00

出席者 影林督論(インタビュアー)ほか6名

議 事 関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー(株)竹中工務店 原田哲夫氏

講習会

「わかりやすいエレベーター新基準解説講習会」開催

3月16日(水) 14:00~17:00

場 所 近鉄堂島ビル2階会議室

講 師 三菱電機(株)ビルシステム部

橋詰裕基氏

三菱電機ビルテクノサービス(株)

井上 淳氏

山本宜永氏

参加者 12名

出席者 赤澤委員ほか2名

見学会

関西大学堺キャンパス見学会

3月24日(木) 14:00~16:00

講 師 大平滋彦氏(株)竹中工務店

参加者 31名

出席者 瀬戸川委員長ほか3名



関大堺キャンパス見学会

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)



本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計 施工



本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支社 名古屋・福岡
支店 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホンコン
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511



We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング、コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作



株式会社NPGコーポレーション
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel: (06) 6351-7271 (代) fax: (06) 6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel: (06) 6351-0128 (代) fax: (06) 6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1
一光浜松町ビル7F
tel: (03) 3433-5211 (代) fax: (03) 5776-7733
(旧社名ナニワ印刷版、日本データネット版)

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235 (代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLビル
TEL (03)3862-0978 (代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

- デンカCSA (膨張性混和材) コンクリートのひびわれ防止に
- デンカラスコン (グラウト用無収縮材) 鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
- デンカキューテックス (止水・補修用) コンクリート躯体の漏水補修に
- デンカES (土質安定用急硬材) 地盤補強用薬注入
- デンカΣ1000 (製品用超高度混和材) コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社

近畿地区販売店

浜宗産業株式会社

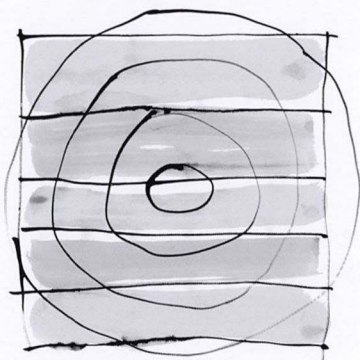
TEL 本社・京都・京丹後 (0772) 72-2220
舞鶴 (0773) 76-0133

金森藤平商事株式会社

TEL 大阪 (06) 6332-6861
TEL 東京 (03) 3272-8501

小浦産業株式会社

TEL 大阪 (06) 6443-6181



構造用集成材の銘建工業

設計者のニーズに素早く的確に対応し
木材を通じた新しい価値を提案

木質素材のより良い使用方法をご提案させていただくことで、銘建工業は皆様と環境とのコミュニケーションを図って行きたいと心がけております。これからも木材の可能性を追い求め変化を厭わない私たち銘建工業にご期待下さい。

●銘建工業株式会社 URL <http://www.meikenkogyo.com/>
大断面工場：岡山/0867-42-3660 東京/03-5835-5610

プロが教える 住宅の植栽

藤山 宏 著 B5判・176(カラー32)頁・定価2940円

1947年生まれ。鳥取大学農学部農学科卒業後、電鉄系造園会社、住宅会社造園課、外構造園工事会社を経て、1994年(有)造景空間研究所を設立。エクステリア・ガーデン工事の営業、設計、施工管理のキャリアを活かし、社員教育、技術研修等で活躍中。E&Gアカデミー副学長。著書に『住宅エクステリアの100ポイント』(学芸出版社)、他。

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、
住空間で緑(樹木・草花)を効果的に
使いこなすための知識と考え方

実例・図面満載



●目次

第1章 植物の基礎知識

第2章 現地調査と植栽計画図の作り方

第3章 部位別植栽の考え方

01 門廻り

02 アプローチ・階段スペース

03 垣・塀・フェンス等

04 法面・擁壁

05 駐車スペース

06 坪庭・中庭

07 デッキ・テラス・ベランダ・
バルコニー

08 壁・屋上

09 インテリア

第4章 イメージ別ガーデン植栽の考え方

第5章 施工・メンテナンス

G 学芸出版社

〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811 fax 075-343-0810

<http://www.gakugei-pub.jp/> E-mail info@gakugei-pub.jp



詳しくはホームページで

三和シャッター 検索

狙いは、逃さない。



作業効率アップ!

空調効率アップ!

このスピードでつかまえる!
最速1.5m/秒※

※W4000xH5000mm以下の場合



虫や埃の侵入阻止!



最速1.5m/秒の速さで作業効率を向上させる三和のスパイラルシャッターは、ニオイや音の漏れにくい高い気密性能(12m³/min)と遮音性能(約23~25dB)、さらに室外設置も可能な耐風圧性能(400~1000Pa)を備えて、食品工場などの作業環境最適化の狙いをスピーディに達成します。

- 日本初の赤外線エリアセンサを装備するなど、安全にも配慮しております。
- 冷蔵・冷凍倉庫には熱を通しにくい断熱スパイラルシャッターを、フォークリフトなどの出入りが頻繁な場所にはターボシャッターを、それぞれご用意しております。

三和の超高速シャッター

スパイラルシャッター

三和グループ

三和シャッター工業株式会社 03-3346-3011